

富士宮市の遺跡Ⅳ

2008

富士宮市教育委員会

富士宮市の遺跡Ⅳ

2008

富士宮市教育委員会

例　　言

1. 本書は、平成12年度から平成19年度の期間において富士宮市教育委員会が実施した小規模な発掘調査および確認調査の成果をまとめたものである。
2. 本書で報告している遺跡は、富士宮市内に所在する大室古墳、神祖遺跡、井出館、若宮遺跡、丸塚遺跡、牛ヶ沢遺跡、浅間大社遺跡である。
3. 各遺跡の発掘調査は、開発に伴う事前の発掘調査として事業主体者から富士宮市教育委員会が依頼を受けて実施したものである。
4. 発掘調査は富士宮市教育委員会教育長を調査主体者として、富士宮市教育委員会文化課が担当した。各遺跡の発掘調査の調査対象地（所在地）、調査原因、調査期間、調査面積、調査主体、調査担当者については、各報告の冒頭に記載した。
5. 発掘調査は以下の体制で実施した。

＜調査主体＞ 富士宮市教育委員会教育長 藤井國利（～平成15年7月）
同 大森 衛（平成15年7月～平成19年7月）
同 佐野敬祥（平成19年7月～）

＜調査担当者＞ 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英誓
富士宮市教育委員会文化課嘱託員 小野田晶（～平成17年3月）
同 佐野恵里
同 澤柳幸司（平成17年4月～）

6. 本書の執筆は、第Ⅰ章を佐野、第Ⅱ章の各遺跡の報告の内、1大室古墳、3井出館、4若宮遺跡、6牛ヶ沢遺跡を渡井、2神祖遺跡を佐野、5丸塚遺跡を澤柳、7浅間大社遺跡を佐野と澤柳がそれぞれ担当し、第Ⅲ章を渡井が行った。
7. 本書の編集は佐野が行った。
8. 丸塚遺跡の発掘調査に係る基準点測量は、株式会社東日に委託した。
9. 発掘調査に係る遺構写真の撮影は、それぞれの調査担当者が行い、遺物写真の撮影は、澤柳が行った。
10. 出土品の鑑定は、船載陶磁器を小野正敏（国立歴史民俗博物館）、瀬戸・美濃を藤沢良祐（愛知学院大学）、カワラケを池谷初恵（伊豆の国市教育委員会）、灰陶陶器・山茶碗を松井一明（袋井市教育委員会）、近世陶磁器を堀内秀樹（東京大学埋蔵文化財調査室）の各氏にお願いした。
11. 発掘調査および本書に係る事務は、富士宮市教育委員会文化課が担当した。
12. 発掘調査に係る諸記録および出土品は、富士宮市教育委員会で保管している。
13. 発掘調査および報告書の刊行に当たっては、次の方々からご指導、ご協力いただいた。記して感謝申し上げる次第である。（順不同、敬称略）

池谷信之、池谷初恵、（故）井出潔、植松章八、小野正敏、加納俊介、小池聰、小崎晋、
高尾好之、野村昭光、藤沢良祐、堀内秀樹、前田勝己、松井一明、富士山本宮浅間大社、
独立行政法人産業技術総合研究所活断層研究センター、株式会社ダイヤコンサルタント
富士宮市消防本部警防課

凡　　例

1. 遺構の名称は、以下の省略記号で表している。
SB：住居等の建物跡 SD：溝 SK：土坑 SX：その他
2. 掘図中の標高は、海拔高度を表す。
3. 掘図中の遺構実測図の縮尺は、図中に示したとおりである。
4. 掘図中の遺物実測図の縮尺は、図中に示したとおりである。土器、陶磁器が1/3、石器が1/3、錢貨・玩具が1/2で掲載している。
5. 遺構、遺物の写真の縮尺は、任意である。
6. 土層観察および土器観察に係る色調は、すべて『新版標準土色帖』(農林水産技術会議事務局監修)を参考にしている。土器の色調は、最も広く占有する部分における色調を原則として示している。
7. 掘図中の以下のトーンは、攪乱を示している。それ以外の掘図中のトーンは、掘図中で用例を示している。



8. 掘表中の復元・推定値は（ ）で表示している。

目 次

第Ⅰ章 位置と環境	1
地理的環境	1
歴史的環境	5
第Ⅱ章 各遺跡の調査報告	
1. 大室遺跡	
(1) 遺跡の位置と環境	7
(2) 調査の概要	10
(3) 遺構	11
(4) 成果	13
(5) 補遺	13
2. 神祖遺跡	
(1) 遺跡の位置と環境	15
(2) 調査の概要	18
(3) 遺構と遺物	19
3. 井出館	
(1) 遺跡の位置と環境	21
(2) 調査の概要	23
(3) 遺構	24
(4) 遺物	31
(5) 年代	33
(6) 施設	34
4. 若宮遺跡	
(1) 遺跡の位置と環境	37
(2) 調査の概要	41
(3) 遺構	43
(4) 遺物	48
(5) 年代	51
5. 丸塚遺跡	
(1) 遺跡の位置と環境	53
(2) 調査の経過	54
(3) 層序	57
(4) 遺構と遺物	57
(5) まとめ	62
6. 牛ヶ沢遺跡	
(1) 位置と環境	65
(2) 調査の概要	69
(3) 遺構	71
(4) 遺物	75
(5) 年代	77
7. 浅間大社遺跡	
(1) 遺跡の位置と環境	80
(2) 調査の概要	82
(3) 遺構	84
(4) 遺物	96
(5) まとめ	118
第Ⅲ章 おわりに	120

挿 図 目 次

第1図	富士宮市位置図	1
第2図	遺跡分布図	2
第3図	遺跡周辺地質図	3
大室古墳		
第4図	大室古墳調査区位置図	7
第5図	大室古墳周辺地形図	8
第6図	大室古墳周辺遺跡分布図	9
第7図	大室古墳及び発掘調査区位置図	10
第8図	大室古墳遺構実測図	12
第9図	大室古墳関連出土土器実測図	14
神祖遺跡		
第10図	神祖遺跡調査区位置図	15
第11図	神祖遺跡周辺地形図	16
第12図	神祖遺跡周辺遺跡分布図	17
第13図	神祖遺跡トレンチ配置図	18
第14図	神祖遺跡2トレンチ実測図	19
第15図	神祖遺跡出土遺物実測図	20
井出館		
第16図	井出館調査区位置図	22
第17図	井出館周辺地形図	23
第18図	井出館トレンチ設定図	24
第19図	井出館トレンチ実測図①	26
第20図	井出館トレンチ実測図②	28
第21図	井出館出土遺物実測図	32
第22図	井出館出土鉄製品実測図	33
第23図	井出館施設想定図(遺構配置図)	35
若宮遺跡		
第24図	若宮遺跡調査区位置図	37
第25図	若宮遺跡周辺地形図	38
第26図	若宮遺跡周辺遺跡分布図	40
第27図	富士市天間沢N地区第1号住居址出土土器実測図	41
第28図	若宮遺跡調査区城図(調査区とトレンチ)	42
第29図	若宮遺跡遺構全体図	43
第30図	若宮遺跡標準層序	43
第31図	若宮遺跡SB01実測図	45
第32図	若宮遺跡SB02実測図	46
第33図	若宮遺跡SB03実測図	47
第34図	若宮遺跡出土遺物実測図①	48
第35図	若宮遺跡出土遺物実測図②	49
第36図	若宮遺跡出土遺物実測図③	50
丸塚遺跡		
第37図	丸塚遺跡調査区位置図	53
第38図	丸塚遺跡調査対象地周辺地形図	54
第39図	丸塚遺跡周辺遺跡分布図	55
第40図	丸塚遺跡調査区全体図	56
第41図	丸塚遺跡調査区標準土層図	57
第42図	丸塚遺跡SK01実測図	58
第43図	丸塚遺跡遺物出土状況	59
第44図	丸塚遺跡出土遺物①	60
第45図	丸塚遺跡出土遺物②	62

牛ヶ沢遺跡

第46図	牛ヶ沢遺跡調査区位置図	65
第47図	牛ヶ沢遺跡周辺地形図	66
第48図	牛ヶ沢遺跡周辺遺跡分布図	67
第49図	石畠遺跡採集遺物実測図	68
第50図	富士市祢宜ノ前遺跡第16号住居址出土遺物実測図	69
第51図	富士市藤夜姫古墳石室内出土遺物実測図	69
第52図	牛ヶ沢遺跡調査区周辺図	70
第53図	牛ヶ沢遺跡遺構全体図	70
第54図	牛ヶ沢遺跡 S B 0 1 実測図	72
第55図	牛ヶ沢遺跡 S B 0 1 カマド実測図	73
第56図	牛ヶ沢遺跡 S K 0 2 実測図	74
第57図	牛ヶ沢遺跡出土遺物実測図	76
第58図	牛ヶ沢遺跡 S B 0 1 出土高台付坪 (No.1) 実測図	77
浅間大社遺跡		
第59図	浅間大社遺跡調査区位置図(1)	81
第60図	浅間大社遺跡周辺地形図	82
第61図	浅間大社遺跡周辺遺跡分布図	83
第62図	浅間大社遺跡調査区位置図(2)	84
第63図	浅間大社遺跡確認調査トレーニング設定図	85
第64図	浅間大社遺跡確認調査全体図	86
第65図	浅間大社遺跡確認調査 SK 0 1・0 2 実測図	87
第66図	浅間大社遺跡確認調査 S X 0 1～S X 0 3 実測図	87
第67図	浅間大社遺跡第VI次調査調査区位置図	88
第68図	浅間大社遺跡第VI次調査遺構分布図	89
第69図	浅間大社遺跡第VI次調査土層柱状図	90
第70図	浅間大社遺跡第VI次調査 S K 0 1・S X 0 1 実測図	90
第71図	浅間大社遺跡第VII次調査調査区位置図	91
第72図	浅間大社遺跡第VII次調査遺構分布図	91
第73図	浅間大社遺跡第VII次調査遺構実測図	92
第74図	浅間大社遺跡第VII次調査遺構範囲想定図	93
第75図	浅間大社遺跡確認調査出土遺物実測図	95
第76図	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図①	97
第77図	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図②	101
第78図	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図③	102
第79図	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図④	103
第80図	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図⑤	104
第81図	浅間大社遺跡第VI次調査出土金属製品実測図	106
第82図	浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物実測図①	113
第83図	浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物実測図②	114
第84図	浅間大社遺跡第VII次調査出土石製品実測図	115

表 目 次

第1表	周辺遺跡地名表	2
第2表	神祖遺跡出土遺物観察表	20
第3表	井出館出土陶磁器時期別の推移	34
第4表	井出館出土陶磁器產地別の推移	34
第5表	井出館出土陶磁器產地別の割合	34
第6表	井出館出土陶磁器種別の割合	34
第7表	井出館出土陶磁器観察表	36
第8表	井出館出土錢貨観察表	36

第9表	井出館出土土製品及び石製品観察表	36
第10表	井出館金属製品観察表	36
第11表	若宮遺跡出土土器観察表	52
第12表	若宮遺跡出土石製品観察表	52
第13表	丸塚遺跡出土遺物観察表①	64
第14表	丸塚遺跡出土遺物観察表②	64
第15表	牛ヶ沢遺跡出土土器観察表	79
第16表	浅間大社遺跡確認調査出土遺物観察表	95
第17表	浅間大社遺跡確認調査出土金属製品観察表	97
第18表	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表①	107
第19表	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表②	108
第20表	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表③	109
第21表	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表④	110
第22表	浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表⑤	111
第23表	浅間大社遺跡第VI次調査出土石製品観察表	112
第24表	浅間大社遺跡第VI次調査出土金属製品観察表	112
第25表	浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物観察表①	116
第26表	浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物観察表②	117
第27表	浅間大社遺跡第VII次調査出土石製品観察表	117

写 真 図 版 目 次

図版 1

1. 大室古墳近景
2. 大室古墳調査区全景

図版 2

1. 神祖遺跡出土遺物
2. 井出館 5 トレンチ遺構検出状況

図版 3

1. 井出館 SK 0 7 検出状況
2. 井出館出土陶磁器
3. 井出館出土錢貨

図版 4

1. 若宮遺跡 SB 0 1 検出状況
2. 若宮遺跡 SB 0 2 検出状況

図版 5

1. 若宮遺跡出土遺物①
2. 若宮遺跡出土遺物②

図版 6

1. 丸塚遺跡調査区全景
2. 丸塚遺跡出土遺物

図版 7

1. 牛ヶ沢遺跡調査区全景
2. 牛ヶ沢遺跡 SB 0 1 (カマド) 検出状況

図版 8

1. 牛ヶ沢遺跡出土遺物
2. 浅間大社遺跡第VI次調査 SK 0 1 検出状況

図版 9

1. 浅間大社遺跡第VII次調査 2・3 トレンチ完堀状況
2. 浅間大社第VI次調査出土墨書き土器

図版 10

1. 浅間大社遺跡出土かわらけ

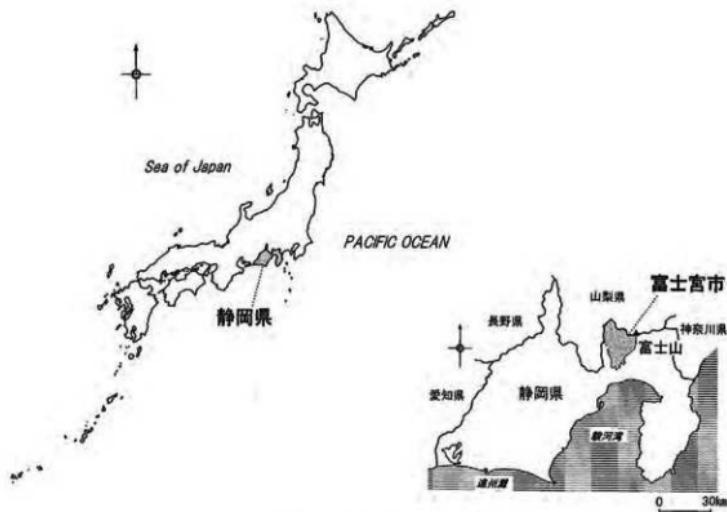
第Ⅰ章 位置と環境

1 地理的環境（第1図～第3図）

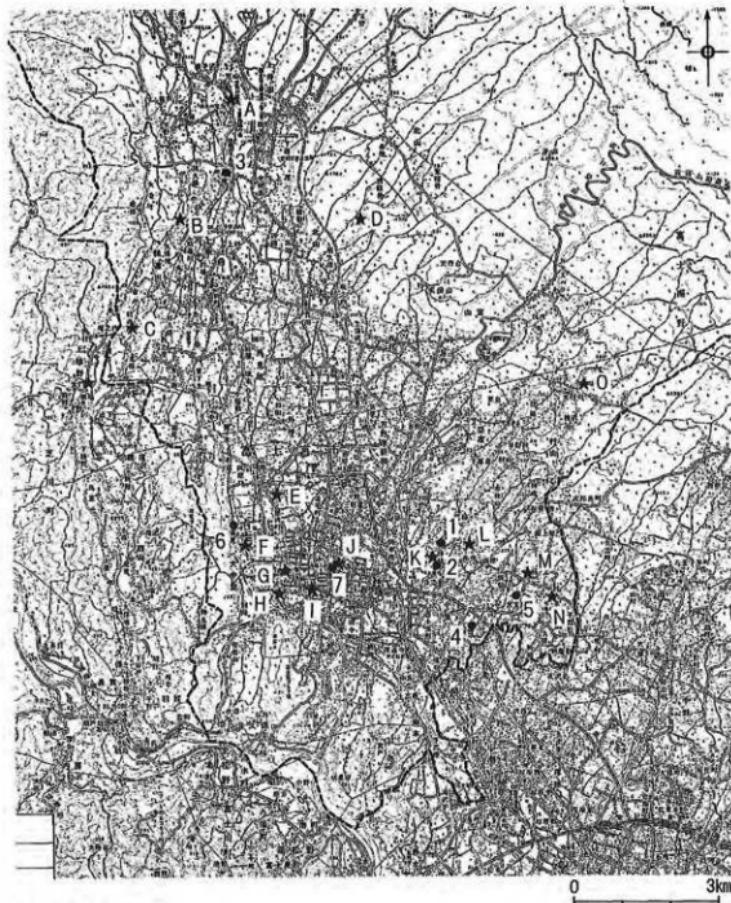
静岡県富士宮市は、本州の太平洋側ほぼ中央にある日本の最高峰、富士山の南西麓一帯に位置している。市境北端は富士山麓にあり、山梨県境となる。富士宮市域には富士山頂が含まれるため、富士山頂の3776mから潤井川氾濫原の末端（山本石の宮地区）の35mまでと、標高差がとても大きい。広ぼうは東西19.50km、南北29.04kmで、面積314.81km²である（第1図）。

地形的には、市域の北東から南西には富士山の丘陵が広がり、西側には富士山麓を取り巻くように、天守山地、羽鍋丘陵、星山丘陵が並んでいる。また富士山の裾野と羽鍋・星山丘陵の間を流れる潤井川により、幅の狭い低地が形成されている（第2図・第3図）。市街地は、この幅の狭い低地沿いを中心として展開した。

市街地は、かつて「大宮」と呼ばれ、富士山信仰の中心地の一つである富士山本宮浅間大社を中心として発展してきた。富士宮市域の古道には、富士山南西麓を抜けて甲府盆地へと通じる道（「駿州中道往還」）や、駿州中道往還から東へ分岐して富士山北麓を通って甲州街道へと通じる道（「若彦路」）がある。駿州中道往還は南進して駿河湾沿いを東西に通る東海道につながり、他地域との交流の重要な役割を果たしていた。また、東海道からは、富士山を目指す富士山信仰の道が通じており、多くの人々が富士山信仰のため富士宮を訪れた。室町時代末期の狩野元信（1476-1559）作とされる「絹本着色富士曼荼羅図」（国指定重要文化財・富士山本宮浅間大社蔵）には、富士登頂を目指す様々な階層の姿が描かれて、往時の賑わいを窺わせている。交通手段が大きく変化した今日では、富士山の南麓標高2,380mまで車での進入を可能にする、富士山スカイラ



第1図 富士宮市位置図

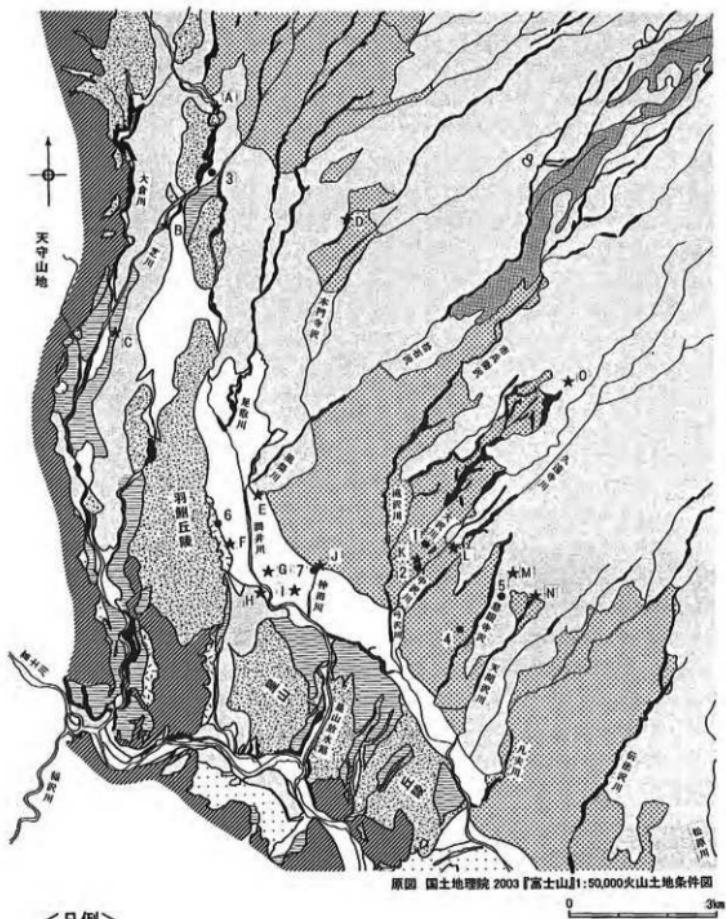


第1表 遺跡と湧水地

1 大室古墳	A 白糸の滝	I 西町羽衣
2 神祖遺跡	B 椿沢	J 湧玉池
3 井出館	C 精進川	K 小泉八幡宮
4 若宮遺跡	D 北山志田水	L 大岩出水八幡宮
5 丸塚遺跡	E 淀師渋沢	M 杉田新梨の水飲み場
6 牛ヶ沢遺跡	F 大中里金田	N 杉田滝ノ上不動尊
7 浅間大社遺跡	G 大中里方辺	O 村山浅間神社竜頭の滝
	H 大中里よしま池	

* 湧水地：参考 渡井正二2002「3. 富士山麓の開拓の歴史」p 209『富士山の自然と社会』
国土交通省中部地方整備局富士砂防工事事務所

第2図 遺跡分布図



原図 国土地理院 2003『富士山』1:50,000火山土地条件図

0 3km

<凡例>

	富士火山新期溶岩流 (約2,200年前以降に噴出した溶岩流)		谷底平野・氾濫原
	富士火山旧期溶岩流及び旧期スコリア丘 (約2,200年以前に噴出した溶岩流)		急崖
	富士火山火山麓扇状地		河岸段丘
	古富士泥流堆積地		扇状地・緩扇状地
	第三紀や第四紀の地層からなる山地や丘陵地		崖錐

第3図 遺跡周辺地質図

イン（昭和四十五年（1970）開通）は、富士山への観光客を増加させ、毎年多くの人々が富士山に訪れている。

富士宮市域の地質は、大きく4つに分けることができる。新第三紀の地層がみられる天守山地、富士火山起源の噴出物で覆われる富士山丘陵部、断層運動により隆起して古富士火山の噴出物である火山泥流が残存する羽鶴丘陵・星山丘陵、富士山腹を源流とする潤井川の氾濫原である。市内の大部分は富士火山起源の噴出物の分布域に含まれる。羽鶴・星山丘陵には、両丘陵を分断する安居山断層、星山丘陵と潤井川氾濫原との境には大宮断層といった活断層群が確認されている。

富士宮市の水源は、富士山の広大な裾野に湛えられている豊富な地下水である。富士川以外に他地域から流れ込む河川のない富士宮市域では、この地下水が、地上に湧出した伏流水となって各地に点在し、河川の源流となっている。富士山麓には多数の沢が刻まれているが、多くは降雨の時以外普段は水の流れない沼澤で、富士宮市内の河川は、潤井川と芝川のどちらかに合流している。潤井川は、星山丘陵沿いに東流して駿河湾に注ぎ込み、芝川は天守山地東側を南流して富士川に注ぎ込んでいる。浅間大社境内にある湧玉池（国指定特別天然記念物）は神田川の始点となる源泉地で、潤井川に合流している。

富士山麓の湧水は、富士山麓に降った雨や雪が溶岩中にしみこんで、透水性の溶岩と不透水性の溶岩との間から水圧によって、溶岩流の末端や、断層活動により水脈が分断されたりしたところから湧出するとされる。富士宮市内の湧水地の分布は、富士山西麓の芝川流域（第2・3図A～C）、浅間大社周辺・大中里・淀師地区（第2・3図E～J）、富士山南西麓の杉田・小泉・大岩地区（第2・3図K～N）、さらに図の範囲外ではあるが、富士山西麓の猪之頭地区のまとまりがみられ、富士宮市の遺跡分布密度の粗密はこの湧水地の粗密にほぼ重なっている。これらの豊富な水源を利用して、潤井川流域では水田が開かれ、近代に至ると富士宮市北部の芝川流域に水力発電所が、また潤井川流域では製紙工場が建設された。

豊富な水源を有する富士山麓ではあるが、度重なる噴火活動で降下した火山灰により、土壤がとなり、農作物などの生産性は高いとは言えないと言われる。水源の乏しいところでは天水に頼ったり、水源地から堀や堰を通して水を分配するなどの工夫が早くからなされていた。明治時代初期には、米・麦の他、茶・煙草・駿河半紙・三櫻などの生産が行なわれていたことが知られている。

活火山である富士山は、約1万年前から比較的静穏な火山活動期である新富士火山の時期に入ったと考えられており、現在は400～500年周期と言われる大噴火の間にあるといわれ、噴煙を上げることもなく穏やかな姿を見せている。富士山南西麓では、約20～1万年前とされる古富士火山期の古富士泥流層や黄褐色ローム質土層の厚い堆積が確認できるが、これらの上部には、富士黒土層、栗色土層、黒ボク土層と呼ばれる褐色から黒褐色を呈する火山灰腐植土層が堆積しており、さらにその上部に約2,800～2,500年前に降下したと考えられている大沢スコリア層と呼ばれる富士山の北西麓にある側火山からの噴出物が堆積する状況が標準土層となる。黄褐色ローム質土層は、愛鷹山麓での休湯層に対応し、富士黒土層から黒ボク土層までは縄文時代に相当する土層である。富士宮市では、旧石器時代の発掘調査例はなく、縄文時代早期の遺物は、富士黒土層中に発見される。縄文時代中期から後期にかけての時代は、栗色土層・黒ボク土層は縄文時代晩期に相当する。黒ボク土層の上部の大沢スコリア層は、縄文時代と弥生時代とを分ける鍵層となっており、弥生時代以降の遺構は大沢スコリア層を掘り込んで構築されている。古代から近世に相当する層は、後世の改変によって削平されているところが多いが、残存状況の良いところでは、

大沢スコリア層上部のややしまりのない黒色から黒褐色土層中に発見されている。

延暦十九年(800)『日本紀略』や貞觀六年(864)『日本三代実録』、宝永四年(1707)の富士山の大規模な噴火活動により、噴出した溶岩流や火山灰などにより火口側の集落や湖が埋まるなどの災害が引き起こされている。富士山南西麓の富士宮市域では、前述のように火山灰層の堆積が富士山東麓よりも少なく、富士山噴火の影響を知ることは難しい。富士山南東麓からの爆発的な噴火であった宝永四年の噴火の際にも、富士山上空の偏西風により火山灰などは火口から東方に飛散した上で、富士山東麓の小山町・御殿場市・裾野市では火山灰の降下が著しく、家が埋まるなどの大きな被害が記録されているが、富士宮市内ではそれらの噴出物を確認することはほとんどない。また、富士山東麓では、富士黒土層の上に約4,500年前以前に堆積した火山灰層が確認されているが、遺跡の調査中では、富士山南西麓ではそのような火山灰層は確認されていない。

富士宮市に起る自然災害には、富士山の火山活動によるものだけでなく、富士山の土石流災害もあげられる。富士山の山頂西側から下へ、「大沢崩れ」と呼ばれる、山体の崩落箇所がある。この大沢崩れは、富士山の高所での厳しい自然環境にさらされて破壊された溶岩礫が、降り積もった火山灰などと共に、雪崩や豪雨の際一気に押し流されてできたもので、この土石流は田畠を埋めてしまうこともあった。また、江戸時代には、用水に堆積した砂礫によって橋が落下して配水できなくなることもしばしばあった。なお、大沢崩れは、約1,000年前から崩落が始まった可能性が考えられており、現在も崩落を続けている。

市域のほとんどは富士山の火山活動による噴出物を基盤としており、人々はその上に生活を営んできた。富士宮市は、富士山による恵みや富士山による災害とともに暮らしを展開してきたといえる。

2 歴史的環境（第2図）

富士宮市域での生活の痕跡は、若宮遺跡(第2図4、以下同様)での縄文時代早期前半の撚糸文土器期の集落から始まる。富士宮市の西隣の芝川町大鹿窪遺跡では、縄文時代草創期の爪形文土器や隆線文土器、押圧縄文土器期の集落跡が発見され、富士山西麓での縄文草創期における集落の様相が知られるようになったが、富士宮市内では概期の様相は希薄となっている。若宮遺跡以降、縄文早期の遺跡は広がりを見せ、押型文土器期、続く貝殻沈線文土器期、条痕文土器期と、星山丘陵に位置する黒田向林遺跡や星山丘陵の富士川沿いに位置する小松原A遺跡・沼久保坂上遺跡、富士山南麓に位置する上石敷遺跡石敷遺跡、丸塚遺跡(5)などといった場所で集落が営まれている。縄文時代前期の遺跡は、早期よりも減少傾向にあり、若宮遺跡の西側にある代官屋敷遺跡や、富士山南麓標高330m付近にあるワラビ平遺跡、星山丘陵と羽飼丘陵の間に位置する滝戸遺跡などで、木島式土器や諸磯式土器、北白川下層式土器、十三菩提式土器期の集落が営まれている。縄文中期から後期にかけては遺跡数が急増する時期である。縄文中期初頭の五領ヶ台式土器、勝坂式土器、曾利式土器期と連続して集落が営まれている。遺跡は、住居跡や集石遺構が連続と営まれた滝戸遺跡や富士山南麓の標高200m付近にある箕輪A遺跡、富士山南麓の標高230m付近にあり、配石遺構や土坑が確認された滝ノ上遺跡などがある。この時期、縄文中期後半の曾利式土器から後期前半の堀之内式土器にかけて特に遺跡数が増加する。このように、縄文後期には前代の縄文中期後半から続く遺跡が多いが、縄文後期後半には不活発になる。縄文後期後半の遺跡は、滝戸遺跡や、星山丘陵と羽飼丘陵の境にあり、加曾利B式土器から安行式土器が出土した大中里坂下遺跡、箕輪A遺跡の東側にある箕輪B遺跡のみとなる。また、これらのいずれか

らも、遺構は発見されていない。縄文晩期に至るとさらに減少傾向は加速し、富士山南麓の標高210m付近に位置する辰野遺跡で清水天王山式土器が確認されるのみとなる。このような遺跡の増減には、地球規模の気候変動の他、周期的に噴火を繰り返す富士山の影響が指摘されている。

弥生時代の遺跡は、中期から始まる。弥生時代中期の条痕文系土器が再葬墓に使用されて発見された渋沢遺跡が、富士山南西麓の渋沢湧水地(E)の周辺に登場する。弥生中期の遺跡は、その他に星山丘陵と羽鶴丘陵の間に位置する別所遺跡、富士山南西麓にある溶岩洞窟万野風穴(国指定天然記念物)を含む押出遺跡などで採集されている。続く弥生時代後期から古墳時代初頭は、縄文時代中期から後期と同じように遺跡数が急増する時期である。遺跡の進出は、まず潤井川沖積地の微高地上に、泉遺跡、西町遺跡、羽衣遺跡が展開し、次の段階に至り、星山丘陵上に滝戸遺跡、月の輪上遺跡、月の輪平遺跡など、また富士山南麓に若宮遺跡(4)、石敷遺跡、丸ヶ谷戸遺跡、神祖遺跡(2)などと、潤井川を挟む丘陵側である両地域に集落が展開する。滝戸遺跡や月の輪上遺跡北側の南部谷戸遺跡では、墓域として方形周溝墓が造られ、丸ヶ谷戸遺跡では、前方後方形周溝墓が登場する。

古墳時代中期以降は、遺跡の数は激減する。大宮城跡の下層において古墳時代中期から後期にかけての集落跡が発見されたが、以降、奈良・平安時代に至っても確認される遺跡は少ない。市内の古墳は、現在は墳丘が削平されたりして消滅している古墳が少なくない。星山丘陵と羽鶴丘陵の間に位置する別所1号墳、別所稻荷塚古墳、別所蛇塚古墳、星山丘陵の月の輪遺跡群の周辺に塚本古墳、月の輪法印塚古墳(消滅)、富士山南麓の神祖遺跡周辺に、大室古墳(1)、神祖山ノ神古墳、神祖2号墳、神祖3号墳(消滅)がまとまりをもっている。塚本古墳と大室古墳は調査が行われ、塚本古墳は古墳時代前期中葉の年代が与えられ、大室古墳は墳丘規模8~10mほどの円墳とされた。

奈良・平安時代の遺跡は、8世紀前半には潤井川沖積地を望む弓沢川左岸の丘陵上平坦面に集落が集中し、9世紀後半から10世紀前半には富士山南麓標高500mの丘陵上の村山浅間神社遺跡や、泉遺跡、牛ヶ沢遺跡(6)といった場所に分散する状況が認められている。

中世の富士宮は、浅間大社の大宮司富士氏の居館跡である大宮城跡と浅間大社遺跡(7)を中心とし、富士山信仰の興隆と共に語られる。また、近世においては、富士講の隆盛を見、富士山西麓の溶岩洞窟が富士講の聖地(人穴)として人々の崇敬を集めた。市内の中近世の遺跡は、遺構として確認されるのは用途不明の円形土坑が多く、建物跡や溝などが発見されたのは、大宮城跡や月の輪上遺跡、浅間大社遺跡、井出館(3)、村山浅間神社遺跡などである。大宮城跡では豊富な内容を持つ貿易陶磁器や国産陶器などが出土し、古代末から戦国末期までの富士宮の様相について知る上で重要な資料となっている。

<引用参考文献>

- 国土地理院 2003 『富士山』1:50,000火山土地条件図
- 国土交通省中部地方整備局 富士砂防工事事務所 2002 『富士山の自然と社会』
- 富士宮市 1971 『富士宮市史』上巻
- 富士宮市 1988 『富士宮市史』下巻
- 静岡県 1996 『静岡県史』別編2 自然災害史
- 町田洋 1977 『火山灰は語る』火山と平野の自然史

第Ⅱ章 各遺跡の調査報告

1 大室古墳

所 在 地 富士宮市小泉字大室1467番の1
調 査 原 因 駐車場整備に伴う事前の発掘調査
調 査 期 間 平成13年3月15日～3月27日
調 査 面 積 25m²
調 査 主 体 富士宮市教育委員会教育長 畠井國利
発 挖 担 当 者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英誉

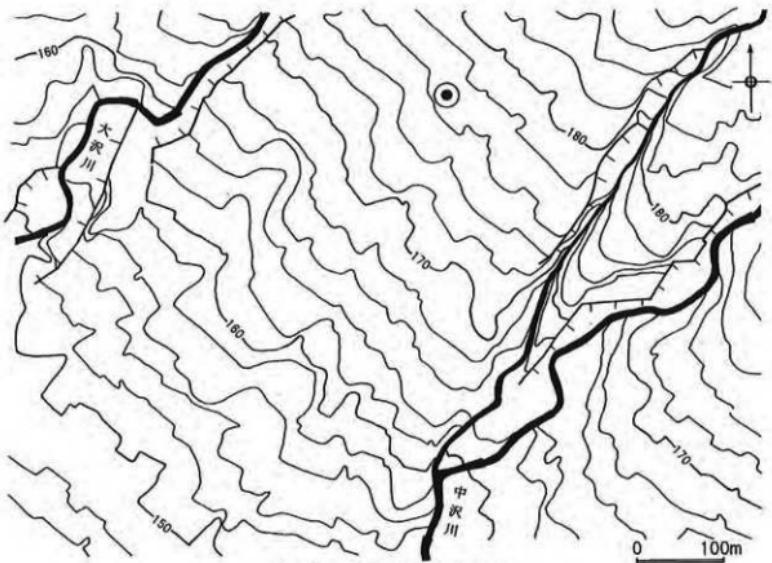
(1) 遺跡の位置と環境（第4～6図）

富士山の西南麓において、数少ない現存する古墳として評価されている大室古墳は、標高175m程を測る緩斜面地に位置している（第4図）。この周辺は、埋没谷で区画されることにより、東西両側に対する独立性を持つようであるが、現状の地形環境は、それを明確に示していない（第5図）。

大室古墳のある一帯は、不透水性の古富士火山の集塊泥流層を地質基盤とする小泉地区を含む富士根地区に当たり、数多くの湧水地が存在している。それは、同時に中小の河川を生み、この地区において富士山斜面に沿う河川が多い要因ともなっている。そして、その自然環境は、人間生活に対して利便性を促し、数多い遺跡の分布域を形成させている（第6図）。



第4図 大室古墳調査区位置図



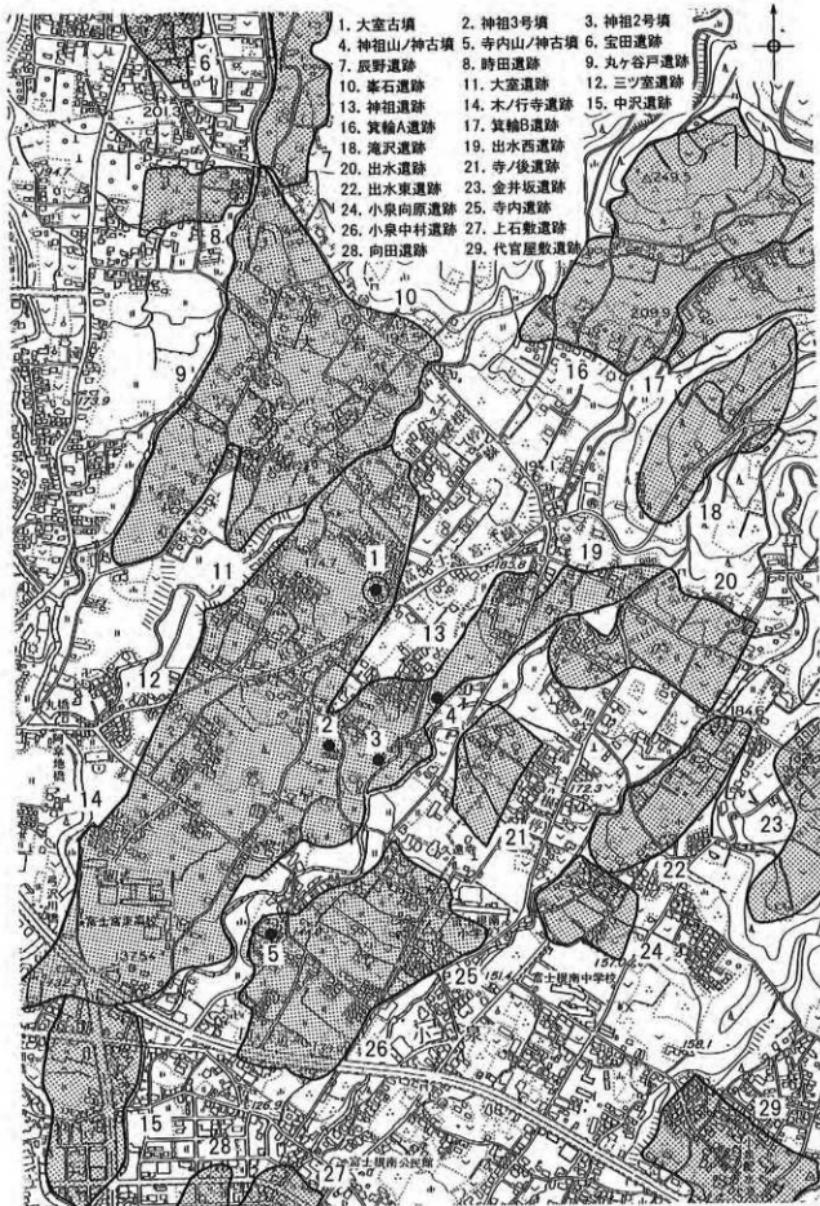
第5図 大室古墳周辺地形図

湧水地は、富士山の多重構造がそのシステムを形成するものである。それが、地質環境を違え、富士宮市内における特徴的な自然環境の形成に繋がるのである。環境が大きく左右する市内における遺跡分布は、その偏りを大きな特徴として上げられるのである。

小泉の大岩地区は、時代の複合する遺跡の広域的な分布域として取り上げられてきた。古墳時代に係るものとしては、丸ヶ谷戸遺跡（9）で古墳時代前期初頭の26mを測る前方後方形周溝墓が発見されている（富士宮市教育委員会1991）。神祖遺跡（13）では古墳時代前期後半を主体とする良好な遺物の分布が知られる。古墳時代後期では、木ノ行寺遺跡（14）で集落跡が発掘調査（富士宮市教育委員会1995）。され、中沢遺跡（15）で当該期の遺物が採集されている。

古墳に関連しては、丸ヶ谷戸遺跡の前方後方形周溝墓の捉え方を保留する中で、この大室古墳を含むその他のものは、すべて古墳時代後期の円墳として認識されている。神祖地区には3基の古墳の所在が伝えられている（富士宮市教育委員会1987）。神祖1号墳（4）は、基底径7~8mを測る円墳で、高さ1.5mを有する。神祖2号墳（2）は、墳丘がすでに消失している古墳で、主体部に係ると思われる偏平礫が確認されている。神祖3号墳（3）も、すでに消滅している古墳で、直刀、馬具類、土器などの出土が伝えられているが、その実態についてはよく分からない。これらを含めて、大室古墳は三ツ室古墳群としての古墳群の中で捉えられている（富士宮市教育委員会1987）。しかし、現在では周辺の発掘調査の進行に伴って、その群構成の設定を再検討しなければならない状況となっている。

大室古墳の南側100m程の地点で実施した発掘調査では、古墳に係る遺構、遺物の出土は確認されていない（富士宮市教育委員会2005）。この地点まで大室古墳に係る古墳群としての広がりは考え難いものとなっている。また、神祖1号墳に隣接する北側の丘陵部における確認調査によっても同様に古墳に係るものは発見されていない。古墳群としての周辺への展開は認められない。神祖1



第6図 大室古墳周辺遺跡分布図

500m

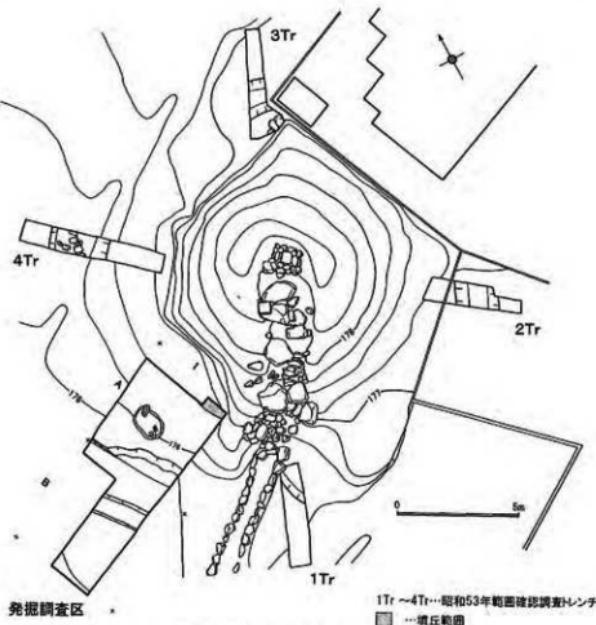
号墳については、中沢川とサギ沢川に挟まれた丘陵の末端部に位置する古墳であり、支群構成の中で捉えると、神祖2号墳や神祖3号墳と単純に同一の古墳群として位置づけられるものではない。

それは、大室古墳までを含めて三ツ室古墳群として捉える壮大な見解に対しても指摘されることで、実際の地形的な規制の中では、その古墳群の認定に対して、もう少し詳細な検討が必要となろう。現状の調査の成果では、各古墳とも小規模な古墳群を形成しており、複数の支群の存在が想定されるものとなっている。それぞれが大規模な古墳群を構成する要素なり得るかは、今後の調査課題となる。このように古墳群の構成を考えていくと、下流部ながら中沢川を挟んで対岸に位置する寺内山の神古墳（5）の評価も変わるものと考えられる。

（2）調査の概要（第7図）

富士宮市の市指定史跡「大室古墳」の南側において計画された簡易な工事による駐車場の整備に伴う古墳の範囲確認調査と周辺の遺構確認を主な目的とした発掘調査は、古墳の南西部分にその調査区を設定して実施した。発掘調査は、昭和53年に実施した発掘調査の成果を追認することで、古墳の周囲に展開すると思われる周濠の跡の確認を最大の目的とした。

開発工事が現況の地表面を利用して、地中に対して影響を及ぼさない事業であるため、その発掘調査は、表土を排除することで発見された遺構の確認および調査を行なう古墳に対する確認調査としての方法を取った。古墳の墳丘に関連する部分以外、畑地として利用されていた場所を調査区としたため、その対象地は西側に向かって緩やかな傾斜を示す地点となった（第7図）。古墳



第7図 大室古墳と発掘調査区位置図

の墳丘裾部に近い調査区の東側では古墳の墳丘に係る流出土の堆積があり、西側では近年まで行なわれていた畑地に対する耕作土が厚さ15cm程度を測って覆っている状況が認められた。

古墳に対しては、基本的に調査を行なわないことを前提として、その範囲を確定するための検討に留めた。遺構の確認は、耕作土下で認められた大沢ラビリ層をその確認面としている。大沢ラビリ面において発見された遺構は、土坑1基、溝1条、造成跡1箇所である。いずれも近現代と思われるもので、古墳と直接関係のないものであった。緩斜面地に対する造成跡は、土層の堆積からも分かるように、畑地の造成跡であることが判明しており、山の神を祀る高塚と畑地の境界を表しているものである。このように、古墳の墳丘盛土自体は、調査区内で確認しているものの、それ以外で古墳に伴うような施設等は発見されていない。

発掘調査に係る調査区は、グリッド法により一辺5m四方の区画を狭い調査区に対して、2つのグリッドとして任意に設定した。それぞれ古墳側からA-1、B-1と呼称して調査を進めた。古墳の確認調査として設定された調査区は、古墳に対して直交する方向にあり、長辺を東西方向に持つものであり、その長辺の方針がN-69°-Eを示した。

(3) 遺構(第8図・写真図版1)

発見された遺構は、古墳の墳丘、溝、土坑、土地に対する造成跡である。

墳丘

調査区の東端で古墳の墳丘裾を確認している(第8図)。確認した部分の墳丘の盛土は厚さ43cmを測り、2つに分層された。2つの層は、しまりが強く、粒子の細かい黒色土で、下層が14cm、上層29cmの層厚で水平に堆積していた。この層を以て墳丘裾部の認定を行なっている。

古墳の墳丘からの流出土は、墳丘裾から更に2m40cm程の広がりを持つ。今回の調査区においては、関連する土層が4層確認されている。下層の3層は、共にしまりの弱い黒色土で、層厚20~25cmを測るものである。発掘調査で第3層とした最上層も同じくしまりの弱い黒色土であるが、本来、古墳に関連したものと考えられる大型礫を含む点を特徴としている。礫類が古墳の横穴式石室に伴うものとして捉えるならば、今日のように、ある程度石室が露呈し始めてから流出した土層として考えられる。これらの流出土は、古墳の墳丘に沿って、典型的な斜面堆積を示し、見かけ上の墳丘を構成している。調査区においては、高さ80cmを有する。

SKO 1

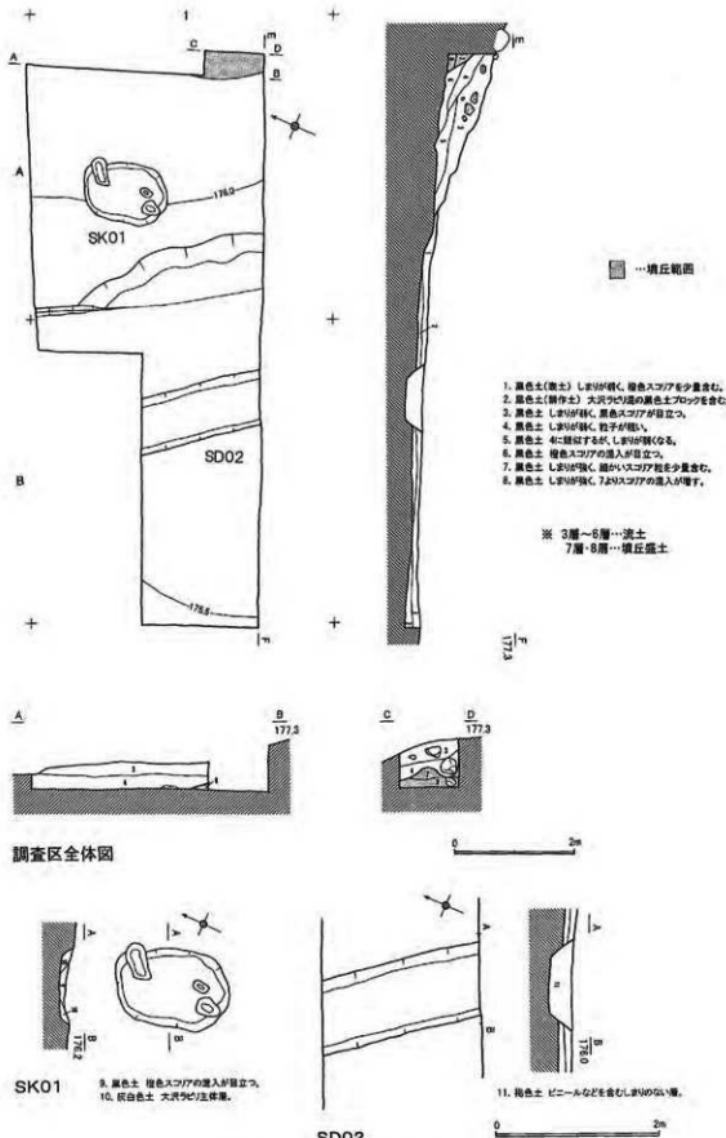
A-1グリッドで発見されている梢円形の落ち込みを土坑としてSKO 1とする。大きさは長軸146cm、短軸96cmを測り、深さは17cmほどで浅く、皿状の形状を示す。底面や壁には、不規則に並ぶ大小のビットが3個あり、底面の起伏を更に著しくしている。

覆土は、遺構の周囲に確認面となる大沢ラビリの崩落した層の堆積が認められる他は、黒色土に覆われている。遺物の出土は見ていない。その形状や関連するビットなどから人為的な構造物ではなく、木根痕など自然の営力によってできた産物であると思われるものである。

SDO 2

B-1グリッドで発見されている溝状の遺構をSDO 2とする。SDO 2は、南東から北西にかけて直線的に伸びる溝で、幅116cm、深さ35cmの規模を測る。掘り込みが、表土層から行なわれている極めて新しい時代の遺構であり、覆土中から耕作用のビニールが出土している。関連する土器、陶磁器等の遺物の出土は見られない。

畑地造成の削平跡がA-1グリッドの南西側に認められる。削平は深さ30cmほどでSDO 2と同様に南東から南西方向にかけて施されている。これは畑地の区画を規定するが、SDO 2がそ



第8図 大室古墳造構実測図

の区画を意識して構築されたことも同時に表している。

畑地の区画は、見せ掛けの墳丘に規制されて、その裾部分付近までを限界として設定されている。墳丘裾部分に直接係る調査区南東でその状況が明確に認識されるのである。

(4) 成 索

今回の大室古墳に対する確認調査によって、次の2点の事柄が判明した。それは墳丘の裾部分が確認されたことによって古墳の大きさが想定されることと、調査を実施した古墳の南西側では、明確な周濠が存在しないことが取り上げられるのである。

今回確認された墳丘の裾部分の位置からは、基底径9m～10mの大きさが想定される(第7図)。それは、昭和53年の古墳周辺におけるトレンチによる発掘調査から導かれた基底径15mとは大きく数値を違えるのである。現在、露呈している横穴式石室が石室のほぼ全体を表すのであれば、奥壁部分が従来の想定ではあまりにも前面に出すぎている。奥壁部分の位置からも古墳の規模が大きすぎるのではないかと思われるるのである。

問題となるのは、周辺で発見されたとする溝の性格である。幅1mの狭小なトレンチにおける調査からの見解であるため、誤認している部分を考慮しなければならない。例えば、それは、今回の調査でも発見されている畑地の耕作等に係る溝を古墳に関連させていないかなどである。

昭和53年に調査された各トレンチ(第7図)は、墳丘盛土に対する認識が希薄であるため、周濠と墳丘の係わりがよく分からず、また、各トレンチで溝の様相が大きく異なる点も気になる。第1トレンチの南北方向に展開する溝は、石室の軸線を現状の露呈している部分から想定して、前部に開通するものならば、やはりその位置と方向は、大きくなってしまい、石室とうまく合わない。第4トレンチの溝は、他で発見されている溝とはやや形態を違えており、幅広のものとして捉えられている。それは、比較的直線に伸びる点と覆土が古墳の反対側から流入しているように観察されている点などから大室古墳に係らないものではないかと考えられるのである。西側に隣接する古墳の周濠なのかも知れない。今回の調査地点で周濠が発見されないのは、そのためなのである。

このような古墳に対する場合、このようなトレンチ調査から得られる成果は限られてくる。また、見解も間違えることが多い、古墳に対する調査の信憑性からは、その危険性が大きい。

富士宮市の指定史跡としの大室古墳に対しては、過去の調査情報を踏まえた上で、更に慎重な検討が必要となるものと思われるるのである。なお、古墳の現況については、富士宮市教育委員会1987によって、詳しく紹介されている。

(5) 捕 遺

今回の調査に関連して、過去に大室古墳より出土していた土器類の再調査を実施している。この古墳は、元々、出土している土器類等が少なく、明確に年代設定が成されていない(富士宮市教育委員会1987)。今回の調査でも直接係る遺物の出土を見ていよい。古墳に対する調査は、1973年の遺跡分布調査と1978年の古墳の範囲確認調査を取り上げることができる。分布調査は、その調査の性格上、古墳自体のものと明らかに捉えられる遺物の抽出は難しい。大室古墳として一括されている採集土器は、縄文時代中期、古墳時代前期あるいは中世のものも含まれており、大室古墳の周辺に広がる大室遺跡としての集落遺跡に係るものが多い。その中で、古墳時代後期に比定される須恵器の破片2点が含まれており、古墳に関連付けられそうなものがある。2点とも小破片で全体の器形はよく分からぬものであるが、第9図の1として掲載した須恵器本身は、図上で復元できるものとして取り上げている。1は、分布調査時の記述「S(昭和)48年

1月7日大室古墳「墳丘部」から分かるように、探集地点が墳丘中であり、具体的な場所の記載がある。

1978年の古墳の範囲確認調査は、古墳の周間に4箇所のトレンチを入れて実施されたものである。それぞれのトレンチにおいて、古墳の周濠と思われる溝が発見され、古墳の北側に設定された3トレンチと西側の4トレンチにおいて遺物の出土が確認されている。3トレンチではその表土中から近世の陶磁器が採集されているが、古墳には直接係らない。なお、このトレンチからは古墳の墳丘に関連すると思われる人頭大の礫がその南端部で発見されている。

4トレンチでは、周濠の覆土中から長頸瓶の頸部と底部の破片が出土している。第9図の2は、その底部の破片資料を図上で復元実測したものである。ここで出土品は、古墳に係る遺構から出土した唯一の土器類であると言える。また、同時に、この周濠内では墳丘に係る礫がその底面から複数発見されている。

土器の実測図として掲載した第9図の1と2は、共に須恵器で湖西産のものと思われる。1は受け部を持つ环身で、口径8.4cm、最大径10.4cmを測る。外面の下位にはヘラケズリが認められる。2は長頸瓶の底部で高台付きである。底径は8.8cmを測る。外面にはヘラケズリによる整形が見られる。1は、その推定される法量などから7世紀中葉段階のものとして捉えられ、2は、高台付きの長頸瓶が普遍化する7世紀末から8世紀にかけてのものであると言える（東海土器研究会2000）。古墳の築造年代については、更に慎重な検討が必要となるが、7世紀中葉の築造に対して、その追跡あるいは儀礼行為の継続がその末葉まで継続したと捉えることもできる。また、4トレンチの周濠が大室古墳に係らない時間的に後出のものであるとすることも可能であろう。今回の調査成果からは、後者の捉え方の中で隣接する古墳の存在を視野に入れなければならないものとなっており、その出土土器の年代差と古墳周辺の遺構の展開が、このようにうまく整合していない。露呈している横穴式石室の構造的な位置関係をふまえながら、今後の検討しなければならない大室古墳の性格把握の重点的な課題である。

<引用参考文献>

- 東海土器研究会2000『須恵器生産の出現から消滅－猿投窯・湖西窯編年の再構築－』
- 富士宮市教育委員会1987『富士宮市古墳実測調査報告書』
- 富士宮市教育委員会1991『九ヶ谷戸遺跡』
- 富士宮市教育委員会1995『木ノ行寺遺跡』
- 富士宮市教育委員会2005『大室遺跡』



第9図 大室古墳関連出土土器実測図

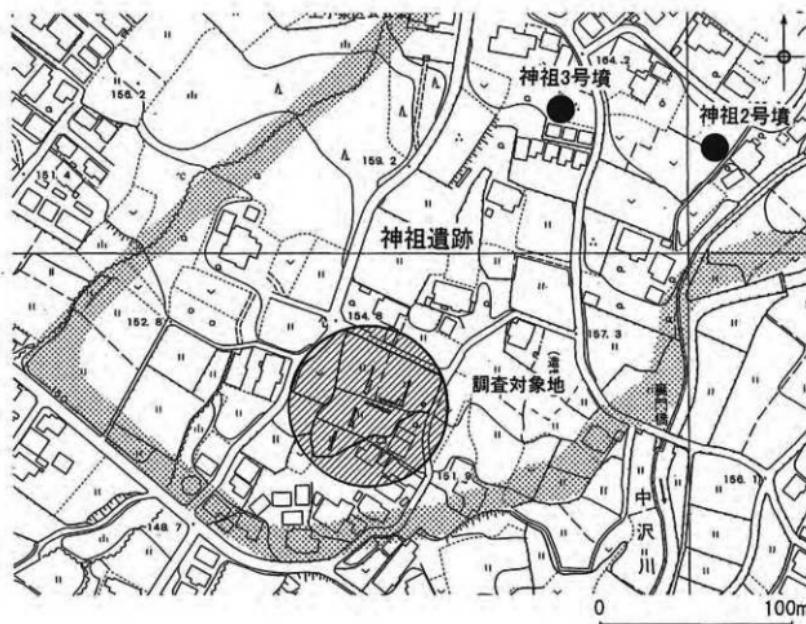
2 神祖遺跡

所 在 地 富士宮市小泉1285番、1286番1
調査原因 宅地造成
調査期間 平成14年2月19日～28日
調査面積 調査対象面積2322m²のうち69.5m²
調査主体 富士宮市教育委員会
発掘担当者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英誓

(1) 遺跡の位置と環境（第10図～第12図）

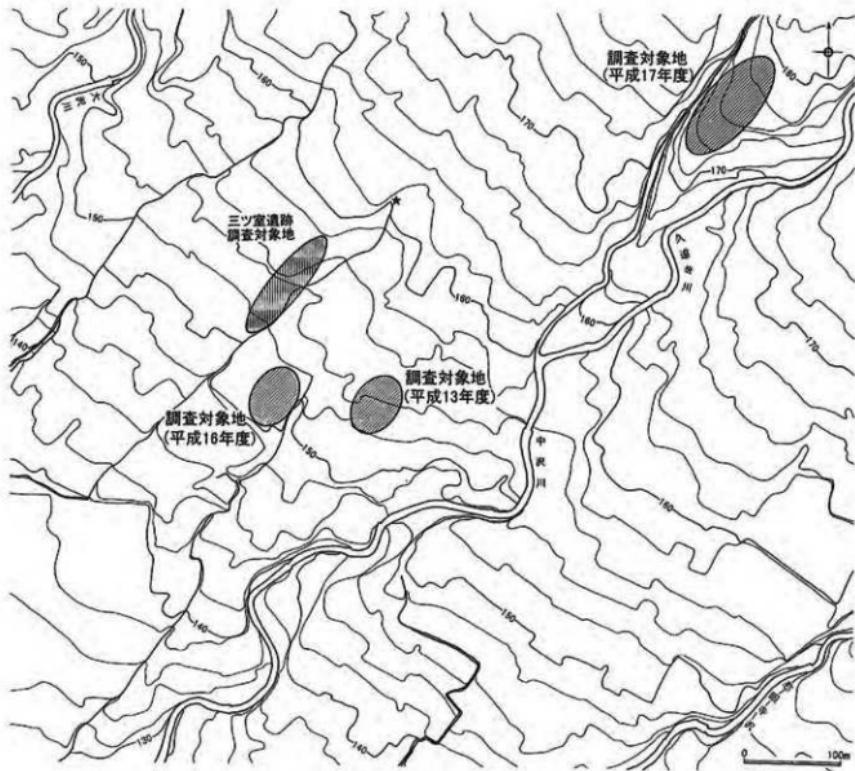
神祖遺跡は、富士山南西麓の標高150～185mに位置し、北東から南西方向に緩やかに傾斜する幅約200m未満の丘陵上にある。南北は長さ約750mあり、細長い形状となっている。基盤となる地質は、新富士火山の火山麓扇状地である（第10図）。

神祖遺跡のある小泉地区から西側の大岩地区、東側の杉田地区を含めた富士根地区は遺跡の密

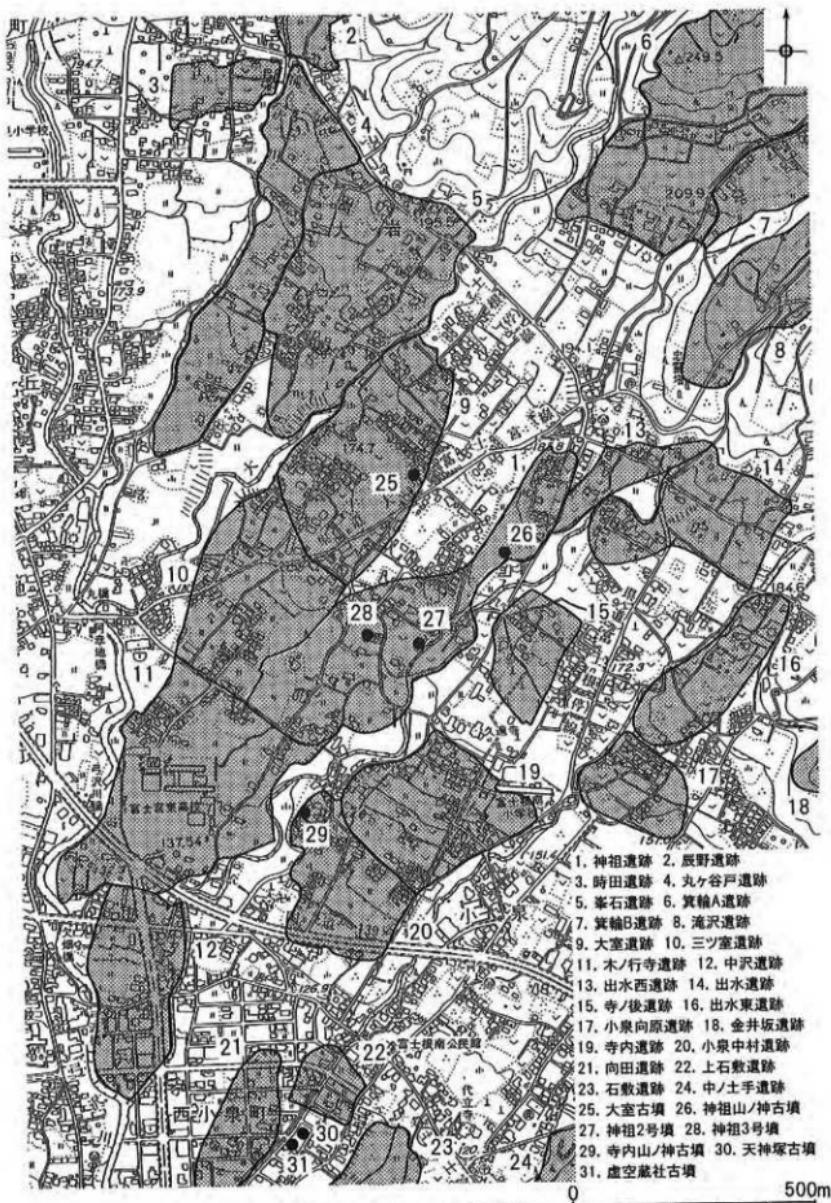


第10図 神祖遺跡調査区位置図

集地帯であり、神祖遺跡はそれら遺跡分布の中ほどにある。小泉地区は特に湧水地の多い地区であり、湧水によって刻まれたと思われる小さな谷や、それらを集めて急峻な崖を形成する大沢川や中沢川・久遠寺川・慈眼寺沢といった河川により、この遺跡密集地帯には幅の狭い丘陵が幾筋も見られ、それぞれの丘陵の比較的平坦面となる尾根上に遺跡は分布している。(第11・12図) 実際の地形は、地図上で見る以上に起伏に富んだ地形となっている。神祖遺跡には、神祖山ノ神古墳(26)、神祖2号墳(27)、神祖3号墳(28)(第12図)といった円墳が含まれ、周辺に古墳時代後期の群集墳の存在が考えられている。周辺には、古墳時代前期初頭の前方後方形周溝墓が発掘された丸ヶ谷戸遺跡(4)や、帶状銅鏡を出土した竪穴住居が発掘された弥生時代後期から古墳時代前期の集落である三ツ室遺跡(10)、弥生時代後期の集落跡である石敷遺跡(23)の集落など、弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が多く分布している。潤井川右岸の星山丘陵もまた、滝戸遺跡や月の輪平遺跡、月の輪上遺跡といった弥生時代後期から古墳時代前期の遺跡が多く分布する地区であり、両地区が、潤井川右岸における概期の遺跡の中心地であったことがわかる。その中で神祖遺跡は、富士山南西麓にあってかねてより遺物分布も多く、概期の集落跡の存在は想定されていた。



第11図 神祖遺跡周辺地形図

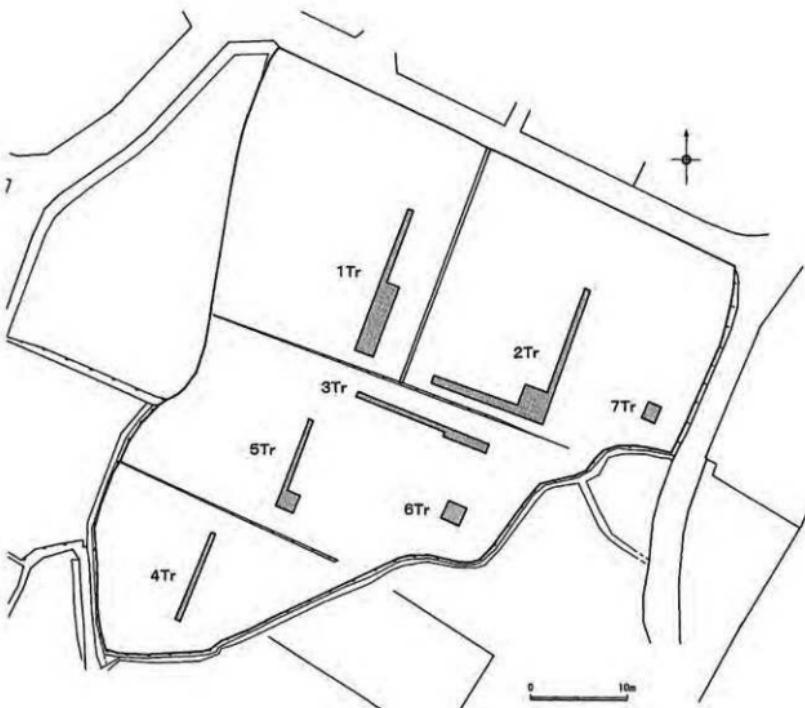


第12図 神祖遺跡周辺遺跡分布図

(2) 調査の概要（第11図・第13図）

本確認調査は、湧水地となっている上小泉八幡宮から約200m下った場所にある。本遺跡は、これまで3度の確認調査が行われている。本報告は平成13年度確認調査における確認調査である。これまでの調査はいずれも宅地造成を調査原因としており、広範囲の調査対象地に対してトレンチ調査を行っている。平成16年度調査は、三ツ室遺跡と小泉八幡宮境内地の湧水地から流れる河川を挟んで東側にあたるが、土地の削平が進んでおり、遺構・遺物とも確認されなかった。平成17年度調査は、神祖山ノ神古墳の北側平坦面にあたるが、富士山麓で弥生時代以降の遺構確認面である大沢スコリア層の堆積が確認されたもの、こちらも弥生時代以降の遺構・遺物とともに確認されなかった（第11図）。

本調査地点は、西を小泉八幡宮境内地の湧水地から流れる河川に、また東を中沢川に区切られた丘陵上の平坦面に位置する。神祖遺跡範囲の南端にあたる。東側の中沢川は、富士山の中腹辺りから端を発する河川で、神祖遺跡のあたりでは幅の狭い深い谷を形成している。そのため、調査対象地は、中沢川へ向けて東南方向に傾斜する傾向にあった。調査対象地は当時水田として利



第13図 神祖遺跡トレンチ配置図

用されており、雑段状に土地の改変が行われていた。その各段の面積に応じてトレーニングを設定し、合計7つのトレーニングによる調査を行った(第13図)。調査の結果、2トレーニング(2T r)以外のトレーニングでは、耕作土下に地山であるローム質土層が露呈することが確認され、また黄褐色の粘質土となっている部分も検出された。粘質土の堆積が見られたことは、この地点が水分の多い土地条件にあることが考えられる。

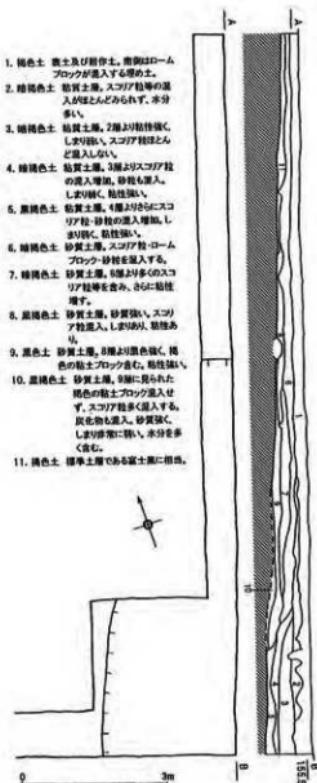
(3) 遺構と遺物(第14・15図・写真図版2)

調査区の北東側にあたる2トレーニングでは、黒褐色～黒色を呈する砂質土と暗褐色土～黒褐色を呈する粘質土の堆積が見られ(第14図)、砂質土中(9・10層)より弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の土器が出土した(第15図)。そのため、南東方向に傾斜する埋没谷の存在し、遺物は堆積土の流れ込みに伴うものと判断された。

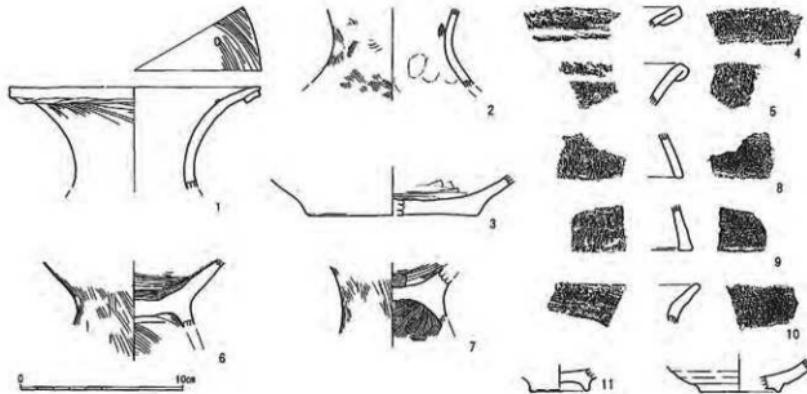
この砂質土層と粘質土層は、富士山南西麓の標準土層である富士黒土層に相当する褐色土層と新富士火山の火山灰層である黄褐色ローム層の上に堆積しており、砂質土(6～10層)の堆積の後、粘質土(2～5層)が谷部を埋めるように堆積している。遺物は、谷の埋没が始まる直前に堆積している。

遺物は、1～3トレーニングから出土しているが、ほとんどは2トレーニング出土である。主に、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の土器、近世陶磁器が出土している。うち、1～9の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の土器、10・11の近世陶磁器を図示した。

1は、壺の口縁部である。折り返し口縁となり、口縁部内面に網文と円形貼付文が見られる。口縁部外面には左上から右下方向へハケ目がわずかに認められる。2は、壺の頸部である。外面には、左上から右下へ斜めハケ目、内面には縦ハケ目が残存する。また、内面には縦方向の指オサエが見られる。3は壺の底部である。内面に弧を描くようにヘラナデが見られる。底部には木葉痕などは見られない。4・5は壺の口縁部で、折り返し口縁となっている。内面には網文がわずかに残存している。5は口縁端部に刻みがあり、内面には赤彩が認められる。6・7は台付壺の脚台部である。両者とも、内外面一面にハケ目が見られる。8・9は甕の台部である。外面には縦ハケ目、内面には弧を描くように横ハケ目が見られる。10は、鉢と思われる口縁部である。内外面とも横ナデされている。11は瀬戸・美濃系の碗である。灰釉系の施釉がなされ、高台端部は露胎となる。18世紀代かと思われる。12は、瀬戸・美濃系の志野皿である。削り出し高台である。17世紀前半と思われる。



第14図 神祖遺跡2トレーニング実測図



第15図 神祖遺跡出土遺物実測図

第2表 神祖遺跡出土遺物観察表

No.	出土地点	種別 器種	口径 器高 底径	特色など	調整・文様	備考
1	2Tr 黒色土	広口壺	(15.4)	胎土 石英、長石(多)、赤色粒子(多)、黑色粒子(多)、砂粒(多)、金雲母含 燒成 硬質 色調 暗	文様 口縁部内面縦文+円形貼付文 外面 ナナメハケメ(4本/cm)	口縁部1/4以下
2	2Tr 一括	壺		胎土 石英、長石(少)、有色鉱物含 燒成 硬質 色調 暗	外面 ナナメハケメ(7本/cm) 内面 タテハケメ(12本/cm)、粒オサ 工	頸部1/4以下
3	2Tr	壺	(10.2)	胎土 石英、長石(多)、赤色粒子(少) 黑色粒子(少)含 燒成 硬質 色調 にごい暗	内面 ヨコハラナデ	底部1/4以下
4	2Tr	広口壺		胎土 石英、長石(少)、赤色砂粒、黑色粒子、砂粒(多)含 燒成 硬質 色調 暗	文様 口縁部内面縦文	口縁部1/4以下
5	2Tr 包含層中	広口壺		胎土 石英、長石、赤色粒子(少)、砂粒(多)含 燒成 硬質 色調 暗	外面 ナナメハケメ(10本/cm)	内面 彫 口縁部1/4以下
6	2Tr 黒色土中	壺		胎土 石英、長石、赤色粒子(少)、黑色粒子(少)、砂粒含 燒成 硬質 色調 にごい暗	外面 タテハケメ(5本/cm) 内面 ヨコハメ+ナナメハケメ(5本/cm) 裏面 ヨコハメ+ナナメハケメ(5本/cm)	内外面スリ衬着
7	2Tr 包含層中	壺		胎土 石英、長石(多)、赤色粒子、黑色粒子、砂粒含 燒成 硬質 色調 にごい暗	外面 タテハケメ(5本/cm) 内面 ヨコハメ、ナナメハケメ(5本/cm) 高台内面 ナナメハケメ(7本/cm)	
8	2Tr 包含層中	壺		胎土 石英、長石(少)、黑色粒子(多)、金雲母含 燒成 硬質 色調 暗	外面 タテハケメ(6本/cm) 内面 ナナメハケメ(9本/cm)	
9	2Tr 黒色土中	壺		胎土 石英、長石(少)、黑色粒子(多) 焼成 硬質 色調 にごい暗	外面 タテハケメ(8本/cm) 内面 ヨコハケメ(7本/cm)	
10	2Tr 包含層中	鉢		胎土 石英、長石、黑色粒子、砂粒 焼成 硬質 色調 にごい暗		口縁部1/4以下
11	1Tr 耕作土中	圓底陶器 鉢	(3.6)	胎土 石英、長石、有色鉱物含、ピンホール、貫入 焼成 硬質 色調 灰白		漁戸・美濃產 1Be代? 灰釉
12	2Tr 耕作土上	圓底陶器 志野瓶	(5.0)	胎土 きめ細かい、長石、有色鉱物長石含、ピンホール、貫入 焼成 硬質 色調 底白	削り出し高台	漁戸・美濃產、 17c前半 長石釉

3 井出館

所 在 地	富士宮市狩宿91番地
調査原因	観光施設整備事業に伴う事前の確認調査
調査期間	平成16年11月16日～11月26日
調査面積	44.75m ²
調査主体	富士宮市教育委員会教育長 大森衛
発掘担当者	富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英誓

(1) 遺跡の位置と環境（第16・17図）

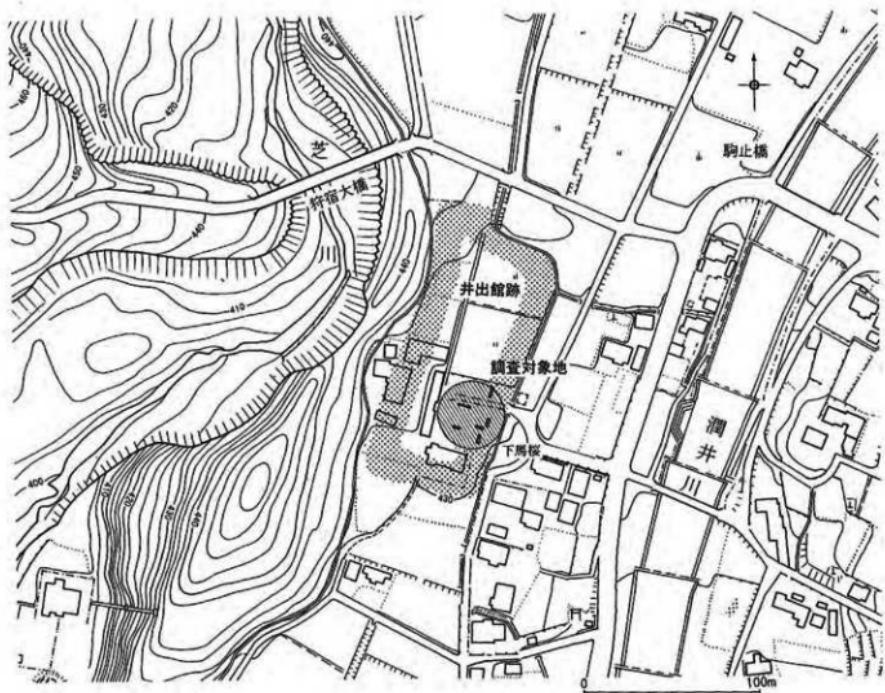
吾妻鏡にその記述がある建久四年（1193）の「富士巻狩」において、源頼朝の御仮屋（旅館）が設置される場所は、現在の狩宿井出氏の邸宅の付近であったと言われている。今回の調査は、この地方土豪であった井出氏の屋敷地（井出館）に対しての埋蔵文化財の確認調査として実施したもので、現在の屋敷内にある長屋門の前面をその対象とした。

井出館は、国の名勝天然記念物に指定されている「白糸ノ滝」から南に1.2kmほど下った芝川左岸の標高430m付近の丘陵上に位置している（第16図）。この丘陵は、その東側を富士山の大沢をその源頭部とする枯れ沢である大沢川（潤井川上流部）によって画されており、最も芝川と潤井川が接する場所となっている。

芝川を挟んで東側は、富士山の傾斜に沿った新富士火山の溶岩流（北山溶岩）を地質的基盤とする緩斜面地が続くが、その斜面地を縦断する大沢川がこの井出館付近で、最も芝川に接近するわけである。また、井出館の北側は標高504mを測る峰山と呼ばれる独立丘陵が聳え、南側は徐々に標高を減じる緩やかな斜面となる。西側は、この傾斜地と芝川とを小高い丘により遮られながら、比高差40m以上を測る芝川の深い谷部へと続く。この辺りから西側は、古富士火山の集塊質泥流層をその基盤とする傾斜地が、北西側に対して標高を増やしながら展開する。このような地形環境から井出館の立地は、南側に向かって開口する景観を示していると言える。現在、井出館から東側は、比較的緩やかな傾斜地が続くことから、その大半を水田として利用されているのに対して、西側は芝川の形成した深い渓谷と丘陵地形を示し、一面に亘って山林に広く覆われているのである（第17図）。

井出館の立地が、外敵から身を守るために選ばれた地形なのかは、今後の調査成果に委ねられるものであり、「富士巻狩」の際の源頼朝の旅館となったその選定の根拠もここにあるのかも知れない。このように、井出館のある場所は、その地形的な独立性の強さをひとつ特徴として取り上げられるのである。そして、この屋敷周辺の420m～440mほどの標高を測る平坦地の存在がそこに指摘されるのである。

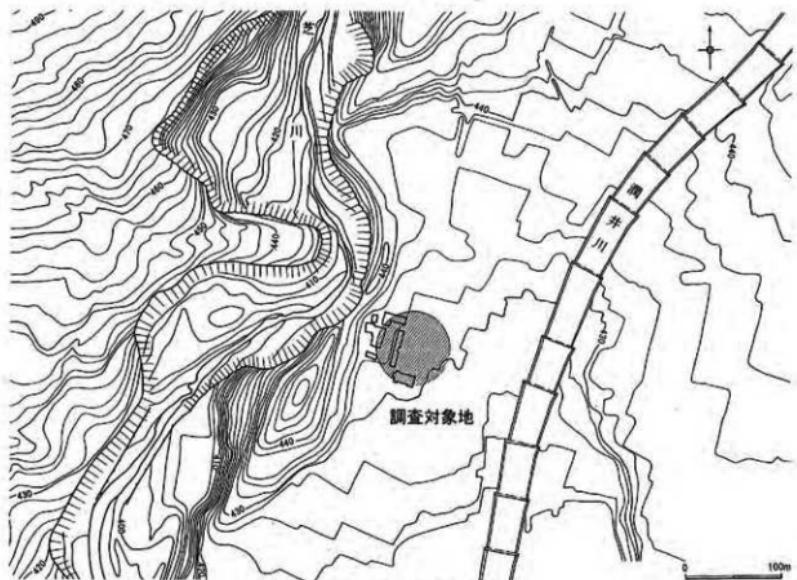
吾妻鏡に見られる「十五日、庚辰、藍沢御狩、事終入御富士野御旅館、当南面立五間仮屋」（建久四年五月十五日の条）にある富士野御旅館がこの井出館付近にあったものと考えると、鎌倉時代の初めからこの地での経営が知られる遺跡の存在を考えなくてはならない。井出館の2kmほど南にはある大石寺が鎌倉時代末期の建立が伝えられるなど日蓮宗に係る寺院や南条氏館などの中世居館の存在が上野や北山地区において確認されているものの、この段階以降の遺跡の数はそれほど多くない。「富士巻狩」あるいは「曾我兄弟の仇討」の伝承の数々を今に伝える「曾我兄弟



第16図 井出館調査区位置図

の隠れ岩」や「工藤祐経の墓」などは点在している地域ではあるものの、一般生活に係る集落遺跡（村）の存在はあまりはっきりしないのである。鎌倉幕府の地頭であった上野の南条時光や北山の石川孫三郎などの支配地であったことは知られるのであるが、被支配となる人々の居住域の実態はまだよく分かっていない。井出館から大沢川を挟んで南西側にある辻遺跡は、平安時代中葉に登場する特徴的な遺跡である（富士宮市教育委員会2005）が、直接関連する時代のものではない。

井出家の邸宅は、今も場所に築かれる前は、屋敷地の北側一帯に広がる水田の場所にあり、南面する建物であったようである。邸宅は江戸時代に数回の火災に遭遇しているが、記録等によれば、宝暦年間、安永五年（1776）、寛政九年（1797）において被災した事が伝えられている。これらの内、いずれかの火災が契機となって、屋敷は北側から西側へと移転したものであるとされている。この地に頼朝の御仮屋（旅館）の遺跡が火災を受けるまであったされること（富士宮市1971）の正否は別として、18世紀以前の井出館の建物配置は、今と大きく異なるのである。



第17図 井出館周辺地形図

(2) 調査の概要 (第18・20図)

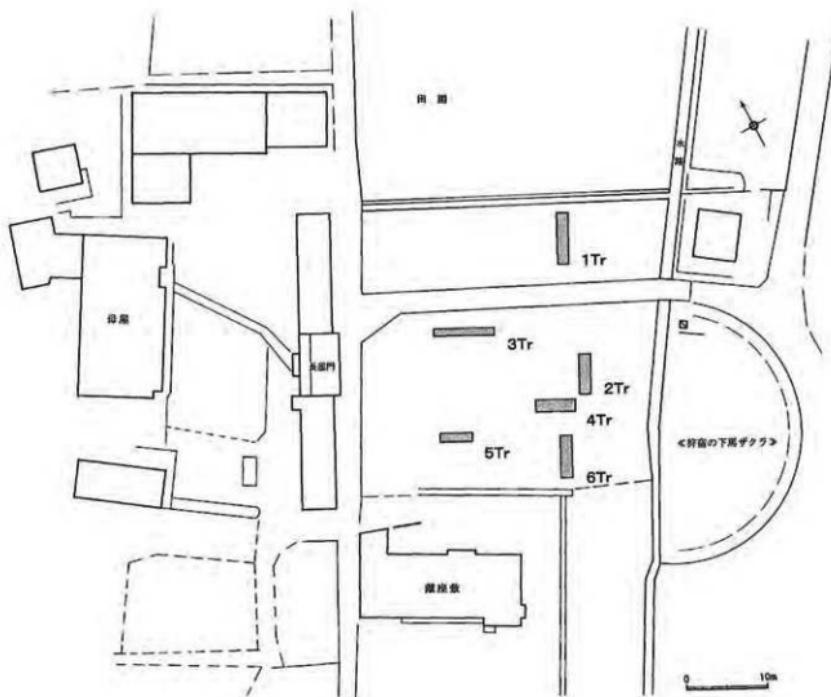
調査は、長屋門の南西側にある植木場と畑地一帯を対象としている。この区域は、国の天然記念物に指定されている「狩宿の下馬ザクラ」の北東側であり、同時に、かつて屋敷があったとされる水田（田圃）の南東側に当たる。その旧屋敷地に対しては、入り口付近の南側一帯に相当する場所であるとも言え、比高差1mを測って一段下がった場所となっている。

整備工事が、低木の抜根程度の簡易な工事で、地下の埋蔵物に対してほとんど影響がないものであったため、確認調査のためトレンチは、発掘の可能な畑地や植木の間など、任意に設定した。そして、その調査の成果から、開発事業との整合性を図って、確実な遺跡の保護に努めたものである。

トレンチは、調査対象区域の北東側を中心に6箇所設定した。1、2、4、6のトレンチは、北東側を北から列状に並ぶもので、第3と第5トレンチが対象地の南東側に設定したものである（第18図）。

確認調査は、前述のように限定された範囲内で行なっており、調査における制約も種々あったため、確認された遺構の内、構状の遺構と思われるものに対しては、調査を実施しているが、土坑状のものあるいはピットなどについては、その確認のみに留めた。トレンチ毎を基準として調査を進め、それぞれのトレンチは直交ないし平行するように位置付けさせ、相関する関連を持たせた。

調査対象地における標準的な土層（第20図）は、6トレンチ南壁で見られるものとして、厚さ40cmを測る大沢ラビリ層（第4層）を境として上層に黒色土（第3層）と表土（第1層・第2層）があり、下層において砂質土層（第5層・第6層）が確認されている。大沢ラビリ層直下に堆積している砂質土層から新富士火山の溶岩流上に展開した扇状地堆積物をこの一帯が地形基盤とし



第18図 井出館トレンチ設定図

ていることが分かる。また、大沢ラビリ層の直上にある黒色土は、近世の遺物包含層であり、ほぼ全域でその分布が知られた。この層のように旧耕作土の可能性があり、市域の丘陵上の堆積と違えて、大沢ラビリ層よりも上層の土層について、その堆積が顕著な状況を示すことも指摘されるのである。遺構確認は、比較的層厚のある大沢ラビリ層上面において行なった。

なお、井出館に対する調査は本報告の調査以外に、観光施設の整備事業の一環として以下の2件の開発事業に関連して遺跡の確認調査を実施している。ひとつは2006年2月20日～24日にかけて行った屋敷の前から北側に延びる道の整備に関連した確認調査で、その北側部分の道路新設地点を対象としており、もうひとつは、「狩宿の下馬ザクラ」から北東側50mほどの地点で、トイレ新設工事に伴う確認調査を2006年3月2日、3日、6日に実施している。両者とも井出館に関連する遺構、遺物は発見されておらず、直接屋敷に係る範囲でないことが判明している。

(3) 遺構

A 1トレンチ (第19図)

1.5m×6.4mのトレンチにおいて20cmの間隔を開けて平行する2条の溝と土地の造成跡が発見されている。遺構は地表下30cmほどで認められた。

トレンチ内では、近世～現代の陶磁器類と釘が出土している。第21図の1は、18世紀の瀬戸・美濃系の陶器で汁次の破片である。

S D O 1

トレンチ北側の溝 S D O 1 は幅0.74m、深さ0.12mを測る溝で、北西から南東方向に走る。断面は浅い皿状の形状を示す。覆土は北側から流れ込むように堆積した黒色土（第7層）の上に他の黒色土（第3層）が覆ったような状態が確認される。このような覆土から、本来その北側に広がる幅広の溝があり、その底面の一部をこの S D O 1 が構成していたと想定することもできるものとなっている。

遺物は、溝内から18世紀後半～19世紀前半の肥前系の青磁筒型碗の破片が出土している。

S D O 2

南側の S D O 2 は幅0.64m、深さ0.12mを測る共に浅い溝である。S D O 1 とよく似た形状の溝で皿状の断面形を示す。S D O 1 と平行して走るこの S D O 2 も S D O 1 に係る一連の溝の一部として捉えることも可能であるが、その残存状況からの判断はできない。覆土は、茶褐色を示す砂利層で、一時的にせよ冠水状態にあったか、水路として水が流出していた際の最下層の状態を示している。隣接して北西から南東に流れる水路を考えると南東側に流れていた水路跡として捉えられるのである。遺構の覆土中から和釘が1本出土している（第22図の31）。また、細片ながら瓦が発見されている。

造成跡

トレンチ中央部で発見されている造成跡は、北側から南側に対する削平の跡となり、深さ20cm程度で掘り下げている。覆土が第2層を主体となることから比較的新しい段階の造成跡と思われる。但し、造成跡の方向は、S D O 1 や S D O 2 と同方位であり、その関連が窺われるものとなっている。

B 2 トレンチ（第19図）

1.5m×5mの大きさを測るトレンチである第2トレンチでは、地表下30cmを確認面として柱穴と思われるピットの配列が発見されている。この柱穴列は、S B O 5としたやや規模の小さな建物跡の一部ではないかと考えている。これらのピットは、平面での遺構確認のみを行い保存の処置を取っている。

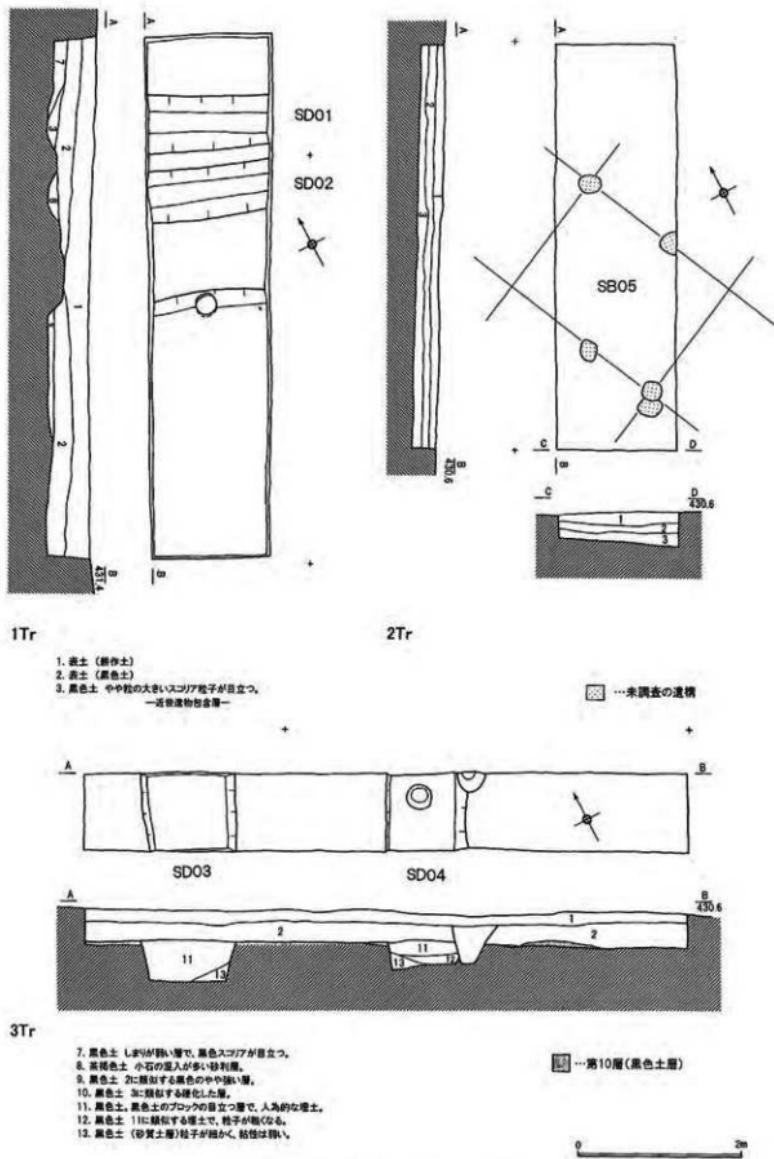
トレンチ内で発見されている遺物は、近世～近代の陶磁器類である

S B O 5

径0.25m～0.3mを測るピットとしての柱穴が5個発見されているが、その配列から掘立柱建物跡を想定しており、南北棟と思われる1間（1.7m）×2間（2.1m）以上の規模を示す掘立柱建物として復元される。桁行の柱間の幅に違いを見せている。この建物跡は、柱穴の大きさや建物の規模から小規模な小屋のような建物の跡ではなかったかと推測されるものである。ピットの覆土はすべて第3層の黒色土を主体としている。

C 3 トレンチ（第19図）

現在の邸宅を目指す道に平行する位置に設定したトレンチで、1m×7.5mの大きさを測る。地表下40cm程を確認面として、トレンチの中央と西側で溝状の遺構を発見している。溝は同規模で平行する位置にあり、関連する遺構であると言えるものである。トレンチにおいて出土している遺物は、近世～現代までの陶磁器類と玩具（おはじき）などであるが、常滑産の壺破片かと思われる中世陶器片が3点発見されている。



第19図 井出館トレンチ実測図①

SDO 3

3トレンチの北西端で発見されている溝で、幅1.07m、深さ0.5mを測り、箱型の断面形を示すものである。大沢ラビリ層を掘り下げた比較的しっかりと築かれた遺構であるため、その壁は、垂直気味に立ち上がるものとなっている。

覆土は、東側からの崩落等に係る第13層の黒色土以外は、人為的な埋土である第11層の黒色土で構成されている。一定の期間開口していた溝がある時期に一気に埋め戻されていることが分かる。

遺物は、実測図を掲載した第21図の19と27の近世のものと思われる擂鉢とおはじき以外にも、18世紀以降の近世、近代の陶磁器が少量覆土中から出土している。また、小破片ながら中世のものと思われる陶磁器（常滑？）が1点確認されている。

SDO 4

3トレンチの中央付近で発見された溝状の遺構をSDO 4とする。北東隅で後世のピットと重複関係にあり、その壁の一部が消失している。また、溝の中央にも後世のピットが溝の底面において認められる。残存部分では、幅1.02m、深さ0.34mの規模を測る直線的に延びる溝あることが分かる。上記のSDO 3より若干小規模であるが、断面の形状はよく似た箱型を示す。

覆土はSDO 3同様に第13層がSDO 4北西壁際で見られる他に、第11層、第12層など人為的に埋め戻された埋土が確認される。

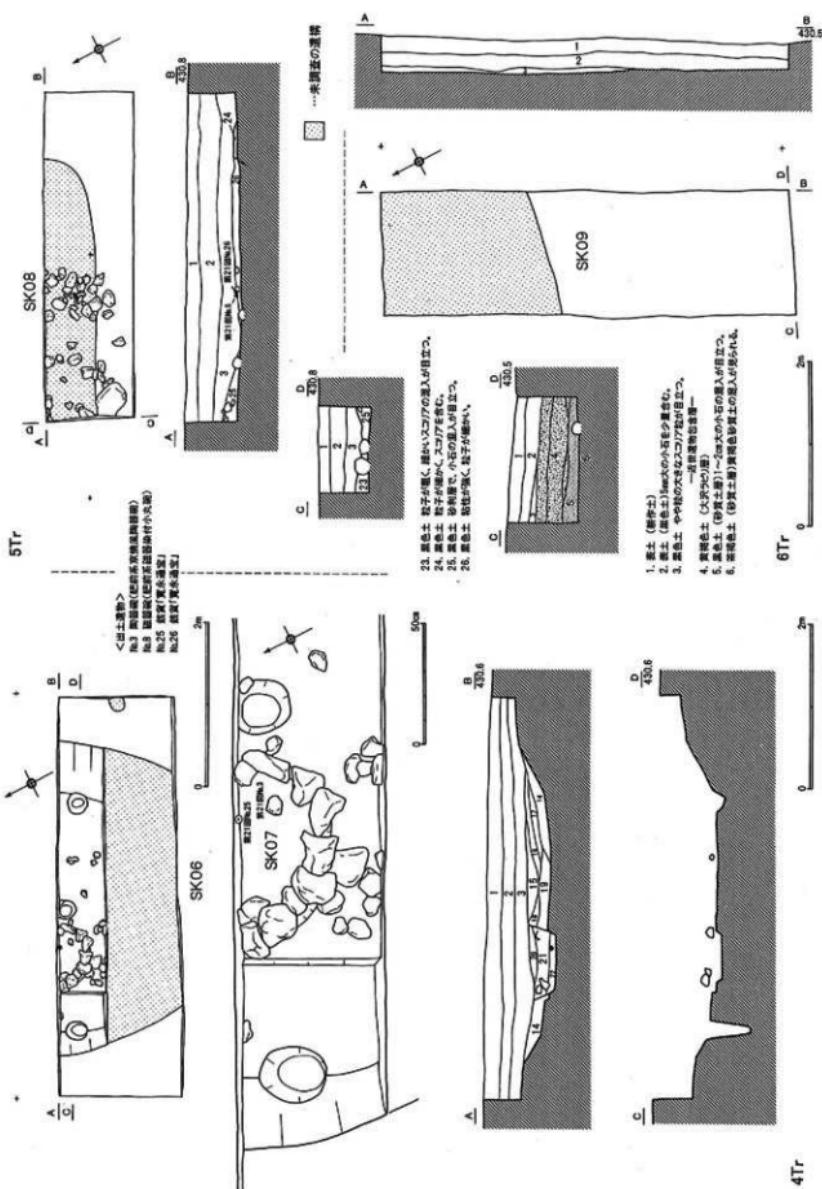
遺物は、17世紀後半以降の陶磁器がその覆土中から少量出土している。

SDO 3とSDO 4はその配置や形態などから相関するものであることが分かる。両者は、185cmほどの間隔を開けて平行するものであり、それぞれの内側の壁は、意識しているように直線をしっかりと形成する。この溝に囲まれた部分は、大沢ラビリ層上面において厚さ4～5cmほどの硬化面を形成しており、一定の期間、地面として露呈しており、さらに踏み固められたような状況にある。硬度の度合いは落ちるもの硬化的した面は、それぞれの溝の反対側までその広がりを示している。SDO 3の北西側では、調査トレンチの外側までその広がりが見られ、SDO 4では、外側（南東側）に180m程の広がりが認められるのである。この3トレンチ周辺では、溝と硬化面の関連から、かつての地表面の位置と側溝を持つ道状遺構の敷設を考えてみようと思う。道と考えると、南北方向に展開するものとして、旧屋敷の門に係る可能性を指摘できるのである。1トレンチで発見されている区画に係る溝に対して、それぞれの延長が直交する点もそれを傍証しているのである。但し、一間程度の幅員に対しては両側側溝で、その幅が大きすぎる点や、後述する5トレンチにおいて、維続する溝の発見が無い点などから否定的な部分のあることも考慮しなければならない。

D 4トレンチ（第20図、写真図版3）

2トレンチの西側に設定し、2トレンチと直角の位置にある4トレンチは、国指定の天然記念物「狩宿の下馬ザクラ」の、丁度、屋敷側15m程の地点を調査の対象として設置されたものである。

このトレンチでは、地表下50cmで土坑が2基発見されている。トレンチの大半を覆う大型の土坑をSK06、SK06の中で発見されている石組みを伴う土坑をSK07としている。トレンチ内における出土遺物は、17世紀から現代までの陶磁器類を主体としているが、遺構としての落ち込みが発見されている割にはその数は少ない。また、更に古く、中世に遡りそうな常滑系の陶器の小破片が2点出土している。また、トレンチの表土中から柄の取り付け部分かと思われる鎌の破片（第22図の30）が出土している。



第20図 井出館トレンチ実測図②

SK06

SK06は、全体の1/3ほどが発見されている大型の円形の平面形を示す土坑で、直径3.9mの規模が推定される。

調査はトレンチ北側壁際ににおいてSK06を断ち割りすることだけに留め、他は確認した状況で保存の処置を取っている。調査を実施した部分からは、SK06が壁の緩やかに立ち上がる皿状の断面形を示すものであると想定され、その深さが78cmを有している。その中で、土坑の北西側で底面において弱い段を確認している。段は土坑の縁から70cm程内側の地点で認められるもので、5~6cmの深さで落ち込む小さなものである。この段は、土坑の平面形にあって弧状になるものではなく、1トレンチや3トレンチなどで発見されている区画に合うように直線的な展開を示している。また、底面を中心にピットが3個発見されているが、その配列や形状に規則性などがない、SK06との関連はよく分からぬ。SK06より後出のものかと思われる。

SK06の覆土は、以下のように分層される。

SK06の覆土

第14層 黒色土 粒子が粗く、橙色スコリアの混入が目立つ。

第15層 黒色土 スコリア混入黒色土ブロックを含む。

第16層 黒色土 15よりブロックの混入が減る。

第17層 黒色土 粘性がやや強く、炭化物の混入が目立つ。

第18層 黒色土 16に類似するがスコリアの混入が増える。

第19層 黒色土 15よりブロックの混入が増える。

となり、第14層が壁際に堆積している他は、中央部分において確認されている。そして、第15層～第19層が、土坑を埋め戻すため、人為的に埋められた土であることが判明している。その堆積は、最下部の第19層の上にその他の土を乗せるような状態を示す。

SK06は、円形の土坑として池などの施設が考えられるが、底面が大沢ラビリ層か黑色砂質土層であるため、透水性に富んでおり、現状のままで、親水を志向したものとしては適さない。

土坑の底面には、拳大の礫が散在するが、遺構の構築部材となったものは判断できるような出土状況を示さない。

SK07

SK06の調査中にSK06より後出のものとして発見されている円形の土坑であるSK07は、その周囲の石組みから遺構として判断されたものである。全体の1/2ほどが確認されており、径95cmの規模を測る。

周辺の礫は、15cm～20cmの自然礫で、1段を基本として列状に並べている。SK07の最下部に埋められている第22層を基盤として、土坑の下位部分において、その壁の構築のため、その上に設置されている。

箱型の断面形を示す掘り込みは、深さ34cmを測る。南東側は、垂直気味に立ち上がるのに対して、反対の北西側は、緩やかに広がるように立ち上がりを示す。

覆土は、以下のように3つに分層されるものである。

SK07の覆土

20. 黒色土 しまりが弱く、粘性に富む。

21. 黒色土 粒子が粗く、炭化物の混入が見られる。

22. 黒色土 砂質の層で、炭化物の混入が目立つ。

第21層と第22層は明らかな人為的な埋土であり、このSK07の構築時に係るものである。土坑は、径1m程の土坑を穿ち、その底面に第22層とした黒色土を敷き、周囲に礫を石組みとしながら第21層を充填することで、土坑の基底部を形成している状況が看取されるものである。用途についてはよく分からぬ。植木等の根回しの施設であろうか。

遺物は、第21図の3として掲載した17世紀後半の肥前系京焼風陶器碗が覆土の上層部から出土している。同時に17世紀前半の肥前系陶器碗の小破片も確認されている。また、第21図の25の寛永通宝が第22層中から出土しており、遺構の構築時に係る出土状況を示している。

これらの遺物の出土状況から17世紀後半あるいは18世紀前半までには、このSK07が廃絶しているものと思われるが、それは、SK06の年代も規定する。SK06の年代は、遺構の重複関係からSK07より古い時代のものであることが判明している。SK06の覆土中では、明確な出土を示す遺物がないが、4トレンチにおける出土遺物としては、17世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃系磁器皿が確認されている。また、中世まで遡る陶器片の出土が確認されているが、直接、SK06に係るものであるか判断できるような出土状況はない。

E 5トレンチ（第20図、写真図版2）

調査対象地の西側に設定したトレンチで、北西から南東方向に1.1m×4mの大きさを測る。現在の地表より深さ60cmで遺構確認面となる。

発見されている遺構は、トレンチの北西側に分布する礫群と北東壁際に見られる土坑状の落ち込みである。土坑状の落ち込みをSK08とする。

トレンチ内において発見されている遺物は、18世紀以降の陶磁器が主体となる。年代的には、他のトレンチのものよりやや新しいもので占められている。陶磁器以外には、近代の瓦の破片が5点と第21図の29、32として掲載した鉄製品が出土している。32は釘の破片資料である。

礫群

後述するSK08の上面で礫の分布が認められる。分布範囲がSK08の範囲を意識していないことから両者の関連は薄い。時間差であると思われる。礫の数量やその出土位置から、その分布において規則性を認めることは、難しいが、トレンチのほぼ中央において一定の塊を指摘することができる。それは、20cmほどのものから小礫まで含む礫によって構成されており、明確な振り込みを持たない礫の配列として認識されるもので、南西から北東方向の列状を示す。配石とした場合、その幅は0.65m、長さ0.87mを測る。この配石は、5トレンチと関連付けられる位置に設置している前述の3トレンチで発見されている構造遺構と同じ方向を指向する。この礫群では礫に混ざって陶磁器と銭貨が出土している。第21図の8は、肥前系磁器染付小丸碗で18世紀後半～19世紀初頭の製品、第21図の12は17世紀末～18世紀前半の肥前系陶器ハケ目碗、銭貨では、第21図の26の寛永通宝が発見されている。いずれも礫群の中央部分において出土している。

トレンチの北西隅においても礫の散在する様子を指摘することができる。長軸50cmほどを測る大型礫をはじめてとして多彩な大きさのものが見られるその分布から遺構になり得る配置は認められない。やや乱雑な状況として認識される。

これらの礫群は、トレンチの南西側にはまったく見られない点から、上記の礫群を一括して、その分布に濃淡はあるものの、トレンチの半分ほどに対して、比較的広い範囲で面的に広がりながら南西から北東方向を示すものとして捉えることができる。それが、1トレンチ、3トレンチにおいて指摘された屋敷地内の方向性と共通することを踏まえると、屋敷に関連した何らかの建物や畠地、田圃などに係る礫群として捉えられるのである。

SK08

礫群に覆われる状態で発見されている落ち込みをSK08とする。隅丸方形の平面形の一隅のような形状を示す。トレンチの中央部分を北西—南東方向に辿り、緩やかに屈曲しながら北側に移行するもので、発見されている部分で長辺3.3m、短辺0.62mを測る。北西—南東の長辺は、1トレンチで確認されている区画と方向がほぼ一致しており、その相関性が指摘される。礫群と同様に屋敷に係る施設として捉えられるのである。SK08については、確認だけに留め、現状で保存する処置を取った。

F 6トレンチ（第20図）

6トレンチは、調査対象地の南側に設置したトレンチで、4トレンチの南東側に位置する。1.5m×5.1mの大きさのトレンチで、深さ35cmで遺構の確認面が認められる。遺構として捉えられる落ち込みは、トレンチの北東側において確認されている。

6トレンチにおける出土遺物は、その数量が他のトレンチよりやや多くなる。17世紀から現代までの陶磁器が見られるが、17世紀代の陶磁器の出土が主体的となり、他のトレンチと様相を違えて、古い段階の遺物が多くなる。

SK09

6トレンチにおける落ち込みをSK09とする。その大半は調査区域外に展開するため全体の形状は分からぬが、確認した部分では、弧状を示す円形指向の土坑状の遺構が想定されるものとなる。このSK09は、トレンチの北西壁側で1.8m、南東壁部分で2.2mの範囲で発見されている。

SK09は、近接する4トレンチで発見されているSK06と類似した円形の大型土坑が想定されるものであり、出土遺物が17世紀を主体とする点も共通した要素であると言える。

(4) 遺物（第21・22図、写真図版3）

出土遺物は、陶磁器、鉄製品、錢貨、土製品（玩具）、砥石である。錢貨や土製品以外は破片資料が多く全体の形態の分かるものは少ない。

A 1トレンチ（第21図、第22図）

1は1トレンチ中から出土した瀬戸・美濃系陶器汁次の底部破片で18世紀に生産されたものである。底径は推定5.4cmを測る。31は鉄製品としての頭巻釘で、残存長5.4cmを測る。

B 3トレンチ（第21図）

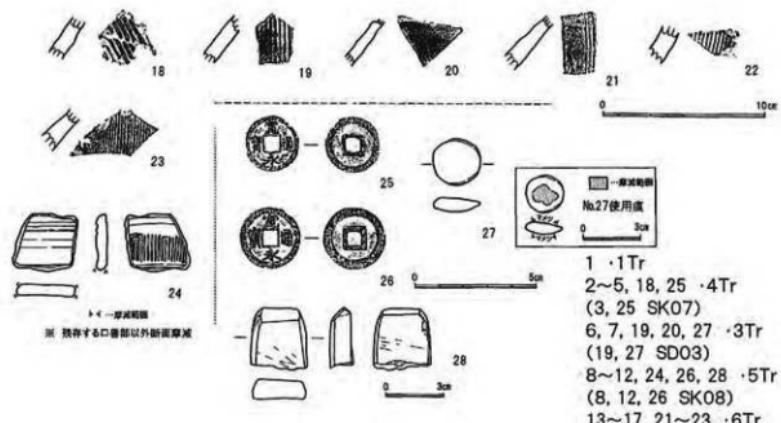
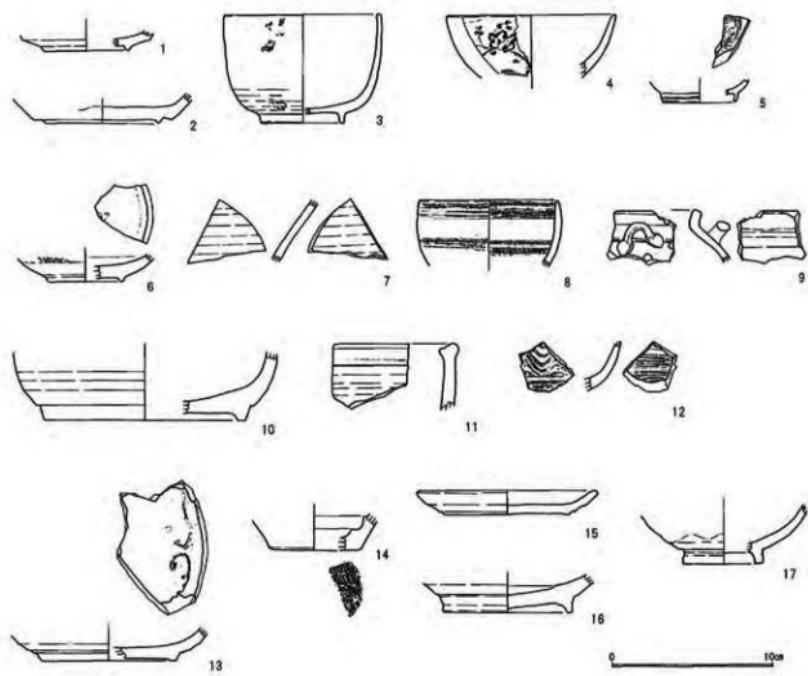
6は18世紀～19世紀初頭に生産された肥前系磁器染付碗、7も同時期の備前系陶器皿上手德利である。7は道状遺構と思われる硬化面から出土している。19と20は、近世の擂鉢の小破片、27は土製のおはじきである。

C 4トレンチ（第21図、第22図）

2は17世紀前葉～中葉の瀬戸・美濃系陶器皿である。3はSK07内から出土した肥前系京焼風陶器碗で17世紀後半の生産年代が考えられるもので、口径9.2cm、底径5.0cm、器高6.7cmを測る。4、5は共に肥前系の磁器で、4が18世紀代のくらわんか碗、5が17世紀後半の染付小壺である。18は近世の擂鉢の小破片、25の錢貨はSK07に伴う「寛永通宝」である。鉄製品としては30の鎌の破片が出土している。

D 5トレンチ（第21図、第22図）

8は18世紀後半～19世紀初頭の肥前系磁器染付小丸碗で、推定の口径8.4cmを測る。9、10、11は瀬戸・美濃系陶器で、9が壺の口縁部破片で、18世紀に生産されたものである。10は一升徳利



第21図 井出館出土遺物実測図

の底部破片で、推定底径12.5cmを測る。18世紀前半の生産年代が考えられる。11は鉢の口縁部破片で、18世紀代に生産されたものである。12は17世紀末～18世紀前半の肥前系陶器ハケ目碗である。24も肥前系陶器で、17世紀後半～18世紀の三島手鉢の口縁部破片資料である。破断面の摩耗が著しく、破片化したものを二次的に再利用しているものである。

3.5cm×3.7cmの大きさで、重さ14.4gを測る。26は銭貨で「寛永通宝」である。

28は、粘板岩製の砥石の破片資料で、丁寧に整形された製品である。表裏2面の使用が確認される。

鉄製品である29は、鍵の破片であろうか、厚さ1.0cm、長さ9.2cmを測る。32は頭巻の釘の破片、残存長4.0cmを測る。

E 6 トレンチ（第21図）

13～17は、瀬戸・美濃系の製品である。13、15、16が陶器皿で17世紀前葉～中葉に製作されたものである。14は陶器の蓋で、17世紀～18世紀前半のものである。17は陶器碗で17世紀後半代の年代が与えられる。

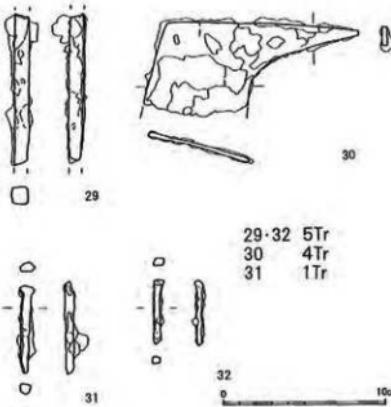
21、22は瀬戸・美濃系の擂鉢の破片で、23は志戸呂系の擂鉢の破片であり、いずれも近世のものである。

(5) 年代（第3表～第6表）

井出館跡で出土した陶磁器は、近世以降のものがほとんどを占める。うち、近世から近代（明治30年代）までの総点数105点の内訳を表にしたのが第3表～第6表である。点数は、破片数として計数している。また、複数時期や複数器種にまたがる場合は、点数を時期数や器種数で割った数値をそれぞれに足して算出している。陶磁器の産地は、瀬戸・美濃系、肥前系、備前系、志戸呂系の4箇所のものが出土している。備前は、1点のみで、18～19世紀の献上手徳利、志戸呂系も1点のみで、擂鉢が出土している。

時期別推移の傾向は、17世紀後半に最も多くの点数を出土し、19世紀後半にも増加している点があげられる（第3表）。浅間大社遺跡では、17世紀以降19世紀前半まで、増加を辿る傾向にあり、異なる様相を見せる。

産地別推移の傾向は、17世紀前半では瀬戸・美濃系のものが圧倒的に肥前系を上回っているが、18世紀後半までは両者とも均衡しつつ、19世紀前半では肥前系のものが瀬戸・美濃系のものを上回っている。19世紀後半になると瀬戸・美濃系のものが急増するが、このうち15点は、明治10～30年代（1877～1906）の型紙染付の碗・皿類や、銅版染付の碗・皿類が含まれる。瀬戸・美濃系のものは、17世紀前半から19世紀前半まで、減少を辿る傾向にあり、明治時代を向かえて急増するといえる。肥前系のものは、増加と減少を繰り返しており、この推移が時期別推移に影響を与えている（第4表）。



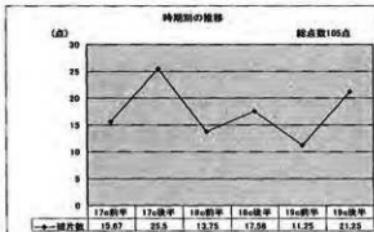
第22図 井出館出土鉄製品実測図

本調査における全体での産地別の割合は、瀬戸・美濃系が58%、肥前系が40%、備前系と志戸呂系がそれぞれ1%となる(第5表)。同じく器種別の割合では、碗が50%と半数をしめ、次いで皿の17%、擂鉢6%、鉢4%と続く。以上の日用品で77%の割合に達し、日用品が高い割合を占めている(第6表)。また、浅間大社遺跡や村山浅間神社遺跡でわずかながら見られた貿易陶磁器は本調査では出土していない。

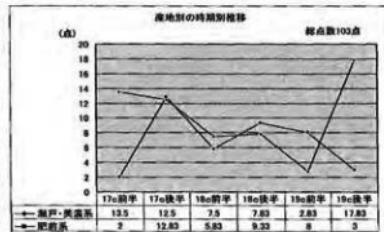
瀬戸・美濃系のものは、陶器で占められ、磁器は明治時代に入ってから見られるようになる。17世紀前半から志野皿・灰釉皿が見られ、17世紀後半から鉄釉碗・灰釉碗といった碗類が加わる。また、17世紀後半～18世紀前半の鉄釉香炉が見られる。18世紀には、御室碗・太白手広東碗・太白手筒形碗などの他、17世紀には見られなかった灰釉鉢・灰釉壺・汁次・鉄釉一升徳利・鉄釉陶器蓋が新たに加わり、器種の増加が見られる。19世紀には、碗・皿類は見られず、新たに鉄釉灯明皿・灰釉仏飯器が加わり、鉄釉一升徳利も引き続き見られる。

肥前系のものは、17世紀前半までは陶器のみ見られ、17世紀後半から磁器が主体を占めるようになる。碗は、17世紀前半に鉄釉碗、17世紀後半に京焼風陶器碗・内野山窯の碗・刷毛目碗が見られる。17世紀代の碗は陶器がほとんどで、17世紀末に1点のみ磁器碗があるのみである。17世紀の皿・小壺・油壺についても磁器である。また、17世紀後半～18世紀の陶器三島手鉢の再利用片が出土している。18世紀以降は、磁器の製品で占められ、器種も碗・皿類で占められる。碗は、くらわんか碗が最も多く、皿も染付製品である。18世紀後半～19世紀初頭には、染付端反碗・染付筒形碗・染付小丸碗・青磁筒形碗が見られる。

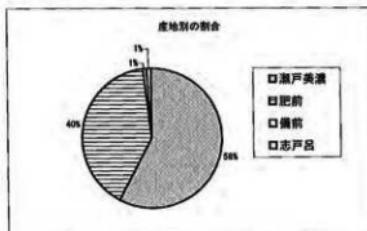
本調査出土資料は、破片資料が多く、全体の様相を知ることのできるものは少ないため、法量について詳細はわからない。産地については、瀬戸・美濃系と肥前系でほとんど構成されるという傾向は、浅間大社遺跡や村山浅間神社遺跡と共通する様相を示している。なお、中世の常滑の甕も少數ながら出土している。



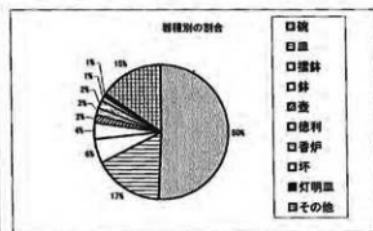
第3表 井出館出土陶磁器時期別推移



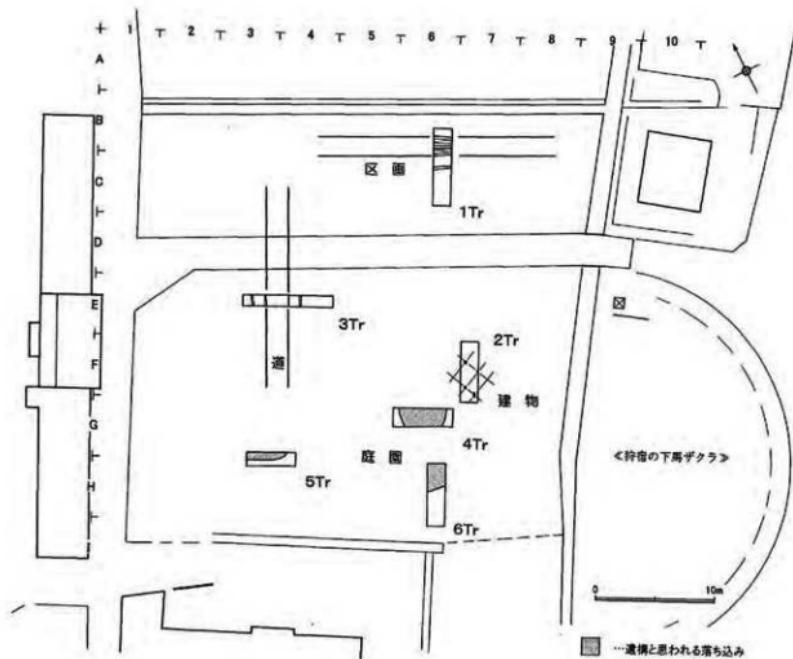
第4表 井出館出土陶磁器産地別推移



第5表 井出館出土陶磁器産地別割合



第6表 井出館出土陶磁器器種別割合



第23図 井出館施設想定図（遺構配置図）

<引用参考文献>

富士宮市1971『富士宮市史』上巻

富士宮市教育委員会2005『村山浅間神社調査報告書－遺跡範囲確認調査編－』

(6) 施設（第23図）

長屋門の前面をその調査対象とした今回の確認調査では、土坑、溝、道、礫群、ピットなど多彩な遺構が確認された。それらは、すべて近世に造られたと思われるもので占められており、直接井出館に係るものとして評価される。

これらの遺構は、その出土遺物から年代に違いを見せており、同時期に営まれていたものではないようである。遺構自体の詳細な調査を実施していないため、正確な時代は判断できないが、4トレンチで発見されているSK06やSK07、6トレンチで発見されているSK09などは17世紀代のものとして判断され、1トレンチのSD01やSD02や3トレンチの溝あるいは5トレンチの礫群とSK08などは18世紀代の遺物の出土が目立つ。後者は、その同一な方向性から、一定の規則性が指摘されるものである。それは、18世紀において頻繁に起きた火災とそれを契機に屋敷建物を移転させていると言う史実とも合致するものである。伝承の通り、現在の屋

敷地北側の田園に元の屋敷があったとするならば、今回の調査対象地は、屋敷の前面（南側）に点在する施設の一部であったものと捉えられるのである。SD01やSD02は屋敷に係る区画であろうし、SD03やSD04は、屋敷の門へ向かう道の一部に係るものだったのではないだろうか。そして、今回の調査対象地は、17世紀以降、「狩宿の下馬ザクラ」も含めた屋敷地の南側に広がる庭園の一部ではなかったかと考えられるのである（第23図）。

第7表 井出館出土陶磁器観察表

No.	種別	器種	出土地点	口径	底径	高さ	产地	年代	特徴	備考	
1	陶器	灰汁	1Tr	(5.4)	3.0	高戸・美濃	18世紀	内面・脚部外面鉢輪	1/4以下存		
2	陶器	灰	4Tr	7.0	5.0	高戸・美濃	17世紀前半～中葉	内面・脚部外面鉢輪(黄)	底部1/2存		
3	陶器	碗	SK07	9.2	5.0	6.7		京焼黒陶器 底付(緑)	2/3存		
4	陶器	碗	4Tr	(10.8)	7.0	肥前	18世紀	くらわんか碗 染付	1/4以下存		
5	陶器	平	4Tr	(4.6)	3.0	肥前	17世紀後半	小坪 脚付	1/4以下存		
6	陶器	碗	3Tr	(4.7)	3.0	肥前	18世紀後半～19世紀初頭	丸台	底部1/4存		
7	陶器	盆	3Tr			肥前	18世紀後半～19世紀	脚上手挽利 外面鉢輪	小破片		
8	陶器	碗	SK08	(8.4)		肥前	18世紀後半～19世紀初頭	小丸碗 勉付	口縁部1/3存		
9	陶器	碗	5Tr			高戸・美濃	18世紀	口縁部内面・外面鉢輪(緑)	小破片 耳(把手)		
10	陶器	盆	5Tr		(12.5)	高戸・美濃	18世紀前半	内外面灰釉(緑) 割出し高台	1/4以下存		
11	陶器	鉢	5Tr			高戸・美濃	18世紀	内外面灰釉(黄)	小破片		
12	陶器	碗	SK08			高戸・美濃	17世紀末～18世紀初頭	ハケ目茶碗 内外面灰釉	小破片		
13	陶器	碗	6Tr	(5.4)	3.0	高戸・美濃	17世紀前半～中葉	直脚碗 真右衛門	1/4以下存		
14	陶器	碗	6Tr	(5.5)	3.0	高戸・美濃	17世紀～18世紀前半	外側灰釉、底部足切り未調査	1/4以下存		
15	陶器	碗	6Tr	(11.0)	(7.5)	(1.5)	高戸・美濃	17世紀前半～中葉	足右衛門 底脚外面鉢輪	1/3存	
16	陶器	碗	6Tr	(8.1)	3.0	高戸・美濃	17世紀前半～中葉	内側長石釉 外面鉢輪	底部1/4存		
17	陶器	碗	6Tr	(4.8)	3.0	高戸・美濃	17世紀後半	内外面鉢輪 底部露胎	1/4以下存		
18	陶器	盤	4Tr			高戸・美濃	近世	内外面鉢輪	小破片		
19	陶器	盤	SD03			高戸・美濃	近世	内外面鉢輪	小破片		
20	陶器	盤	3Tr			高戸・美濃	近世	内外面鉢輪	小破片		
21	陶器	盤	6Tr			高戸・美濃	近世	内外面鉢輪	小破片		
22	陶器	盤	6Tr			高戸・美濃	近世	内外面鉢輪	小破片		
23	陶器	盤	6Tr			高戸・美濃	近世	内外面鉢輪	小破片		
24	陶器	鉢	5Tr			肥前	17世紀後半～18世紀	三島丁鉢 頭削面空缺	破片の軽用		

第8表 井出館出土錢貨観察表

No.	出土地点	銘名	法量(cm)				備考
			径	厚さ	穿孔	重さ(g)	
25	SK07	寛永通宝	2.2	0.11	0.61	1.9	新寛永
26	6Tr	寛永通宝	2.5	0.13	0.63	3.3	古寛永

第9表 井出館出土土製品及び石製品観察表

No.	出土地点	器種	法量(cm)				材質	特色	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ(g)			
27	SD03	玩具	2.0	1.9	0.6	2.1	土製品	表面摩耗	おはじき ほぼ完存
28	6Tr	紙石	(3.1)	2.9	1.0	15.0	粘板岩	表面凹凸	1/2存

第10表 井出館金属製品観察表

No.	出土地点	器種	法量(cm)				材質	特色	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ(g)			
29	6Tr	鍔?	(9.2)	1.0	1.0	49.7	鉄製品		
30	4Tr	鍔?	(7.3)	8.0	0.25	65.0	鉄製品	柄の込み部6.5cm	刀部欠損
31	1Tr	釘	(5.4)	0.65	0.65	6.1	鉄製品	頭巻釘	先端彫文有
32	6Tr	釘	(4.0)	0.45	0.45	2.6	鉄製品	頭巻釘	先端彫文有

※()以降存長

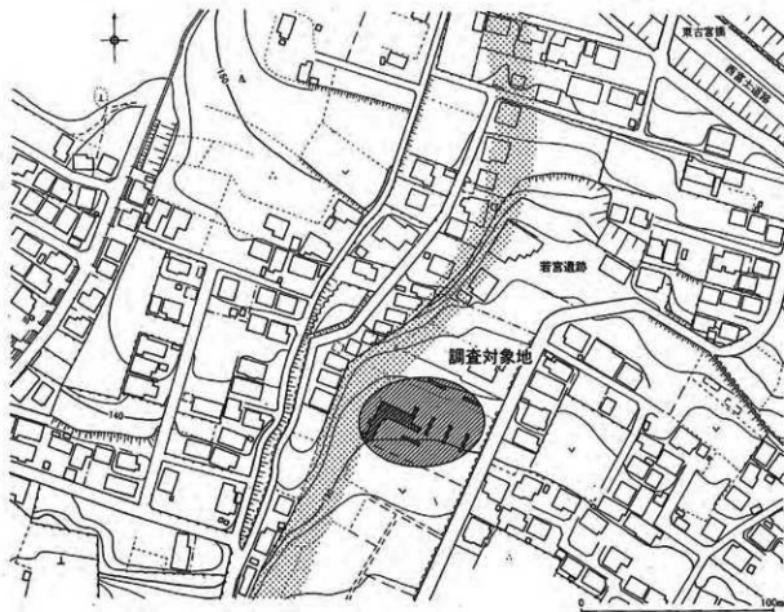
4 若宮遺跡

所 在 地	富士宮市小泉字古宮2261-4
調査原因	住宅分譲地造成工事に伴う事前の発掘調査
調査期間	平成17年7月7日～7月15日
調査面積	199.5m ²
調査主体	富士宮市教育委員会教育長 大森衛
発掘担当者	富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英裕

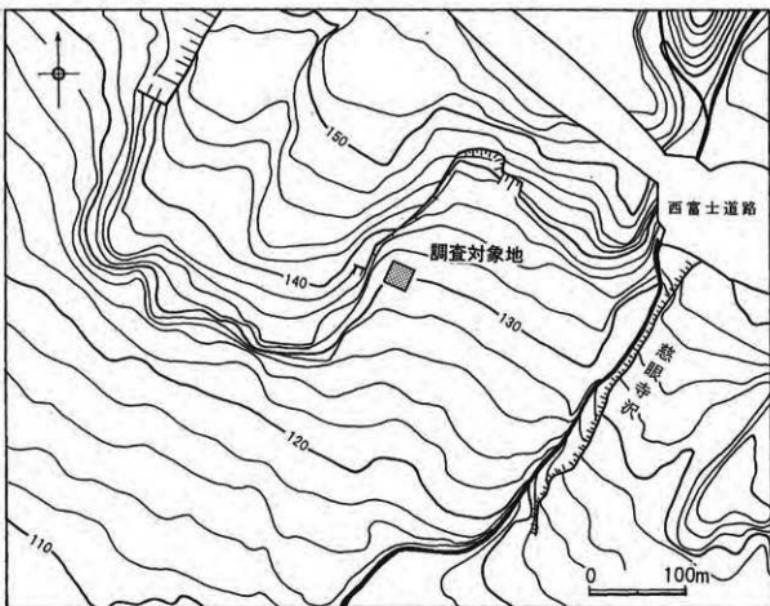
(1) 遺跡の位置と環境（第24～27図）

若宮遺跡の周囲は、近年の宅地化な進行によって、畑地や山林の急激に減少している。若宮遺跡の所在する丘陵上における宅地化がいち早く実施され、徐々に丘陵下に対しても、その土地造成事業が進むようになっている。今回の発掘調査も、若宮遺跡の南側緩傾斜地を対象とした宅地造成事業に係るものであり、発掘調査が実施されるまで、畑地として利用されていた場所である（第24図）。

富士宮市の南東に位置する遺跡は、慈眼寺沢川の右岸にある丘陵上とその直下の緩やかな傾斜地に広がる。富士山の緩傾斜地における雄塙状に展開する丘陵の連続は、この若宮遺跡周辺でもその



第24図 若宮遺跡調査区位置図



第25図 若宮遺跡周辺地形図

地形の様子がよく観察されるものであり、遺跡の北半部に独立する丘陵が見られる（第25図）。今回発見された集落遺跡は、その丘陵裾部の比較的安定した微高地にあり、富士山の斜面に沿って南側に向かって徐々に傾斜しながら、調査区の東側50mほどにある南北に開析された谷部に対しても斜行を示す地点となっている。本来、標高150m程の丘陵部と標高120m～130mを測る斜面地では、遺跡の性格もその内容も異なるもので、別の遺跡として捉えるべきものである。丘陵上に、若宮遺跡として調査されている著名な縄文時代早期前半の集落遺跡が位置している（富士宮市教育委員会1983）。下段の傾斜地内の丘陵崖線に程近い微高地において発見された遺跡では、丘陵上の若宮遺跡と大きく異なる調査成果が得られている。複雑な擁壇状の丘陵が形成されているこの地区においても、今回の調査地区辺りから南西側2kmにある潤井川までは比較的緩やかに傾斜地となるため、若宮遺跡周辺の丘陵は、大きな比高差を以って見えるものとして見られ、特徴的な独立丘陵の様相を示している。

若宮遺跡の位置する小泉地区は、富士山起源の古富士火山による古富士泥流等噴出物がその大半の地質的な基盤となっており、出水不動尊、神祖などの湧水地と数多くの河川が形成されている。それは、弓沢川以東から新富士火山の噴出物である大渕溶岩流に覆われている富士市大渕地区以西の範囲における地形環境であり、原始・古代の生活圏の形成が促されることによる異なる時代の遺跡分布が複合的に認められるものとなっている。富士山西南麓において、この区域は、星山・羽舎丘陵上と共に顕著な遺跡分布域を形成している。富士山麓における湧水地および河川は、地質的な性格により限定された地区に位置しており、それは、同時にその水資源に依存する

遺跡の分布も規定している。この若宮遺跡の場合は、その東側を慈眼寺沢川が流れる。

今回、若宮遺跡で発見されているのは、古墳時代前期の集落跡である。周辺に関連する遺跡（第26図）としては、同時期の集落遺跡が調査されている慈眼寺沢川を挟んで隣接する富士市天間沢遺跡（13）を取上げることができる（富士市教育委員会1984・1985）。今回の調査地点から南東側700mほど下流域にある天間沢遺跡も若宮遺跡同様に富士山の緩斜面地にある集落遺跡で、堅穴住居12軒、掘立柱建物1棟などが散在する状況で発見されている。この集落の景観は、両者でよく似た様子を示しており、立地環境と共にその類似性が指摘されるものである。さらに、古墳時代前期も後半段階を主体とする遺跡である点もよく似ている。この段階は、この地域における遺跡数が減少傾向にある時期で、星山丘陵上の月の輪平遺跡や滝戸遺跡などが取り上げられるものの、それほど多くはない。また、慈眼寺沢川の上流にある杉田西原遺跡（8）においては古墳時代前期の土器が採集されているが、詳細は分かっていない。

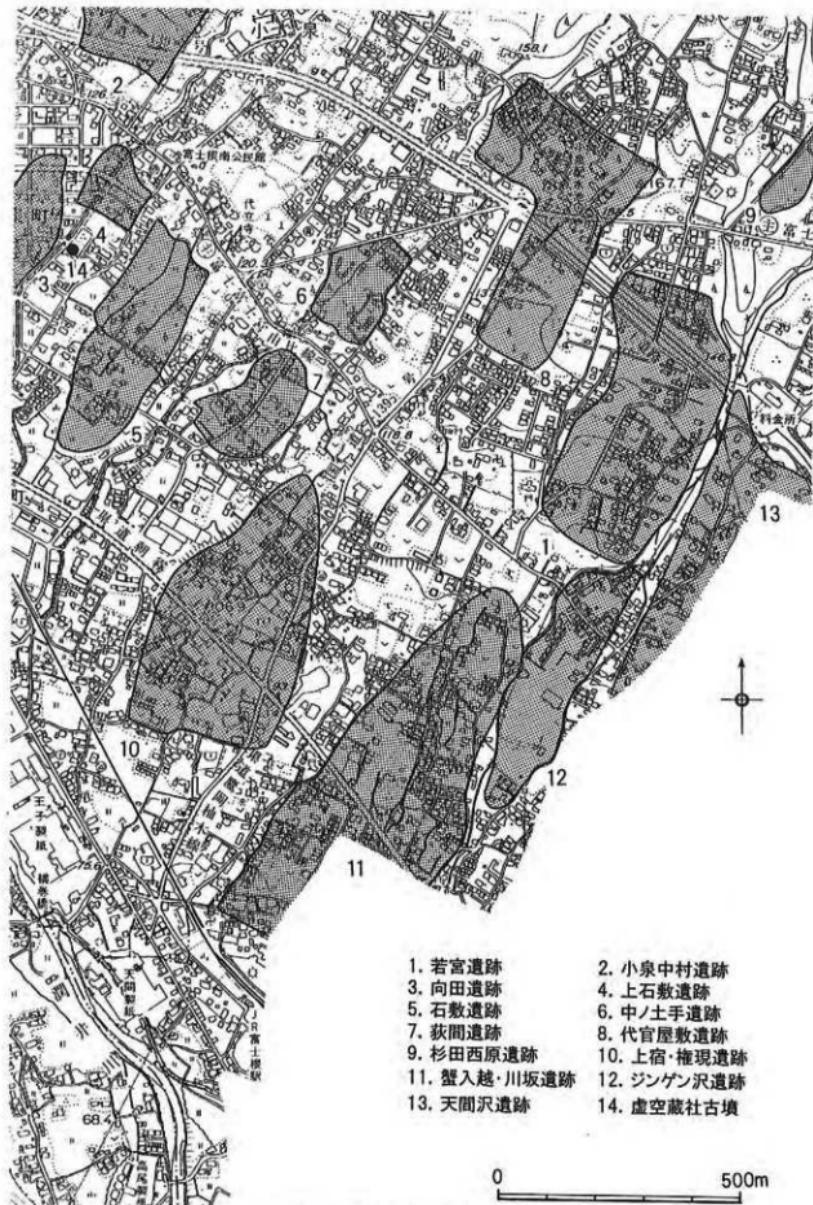
古墳時代前期はその前半段階において、丸ヶ谷戸遺跡で前方後方形周溝墓を伴う墓域が形成され、三ッ室遺跡、上石敷遺跡（3）、上宿・権現遺跡（9）などにおいて、集落遺跡の経営が始まる。さらに、石敷遺跡（4）や寺内遺跡においては、その時期の土器が採集されている（富士市教育委員会1993）。また、星山丘陵上に滝戸遺跡や月の輪平遺跡、潤井川左岸の沖積地内に泉遺跡などの遺跡の登場が知られ、弥生時代後期以来段階的な広がりを見せていた遺跡群が大きく増大する段階を迎える。それは、古墳時代前期になって、富士山麓に対する開発と共に全長26mほどを測る前方後方形周溝墓を造営する有力な地域勢力の存在を窺わせる状況の中で、この地域における新たな時代の到来を告げるものとして大きく評価されるのである。

ところが、その盛行期も古墳時代前期後半となると晒りを見せ始め、月の輪平遺跡や隣接する月の輪下遺跡、滝戸遺跡など星山丘陵上の遺跡において継続性が指摘されるものの、他の遺跡はその勢力を失い、ほとんど消失してしまいます。そして、その動向に合わせるように、古墳時代前期前半の遺跡分布域の周囲において、この若宮遺跡や天間沢遺跡（第27図）、あるいは大中里の大中里坂下遺跡、大岩の辰野遺跡などで集落遺跡の経営が始まると、一様に継続性の弱い遺跡をそれぞれ形成する点でよく似ている状況を示すようになる。それは、舌状台地に展開し、その独立性の強い地形環境の中で極めて継続性の強い集落経営を行なう月の輪平遺跡と緩傾斜地に広がる広い丘陵の中で經營される継続性の弱い天間沢遺跡との立地場所に相関する遺跡の違いとしても2分化されるものもある。若宮遺跡は、前述のように後者に属する遺跡であると言える。

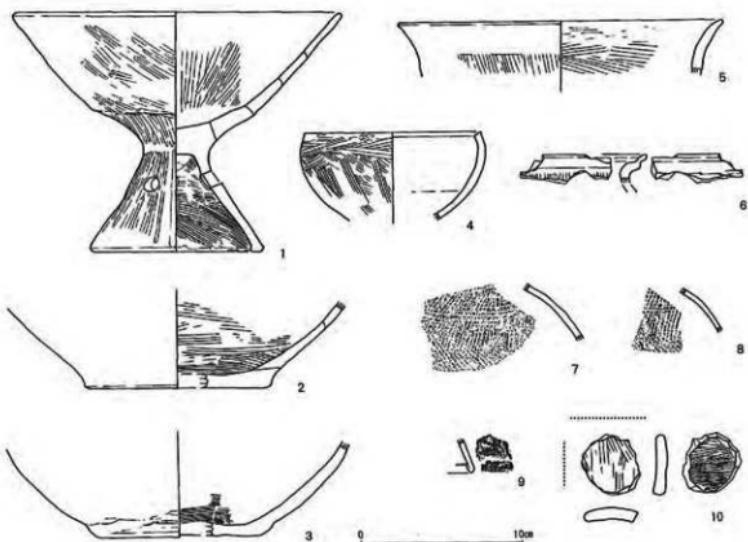
古墳時代中期になると、富士山麓の遺跡群は漸減的な状況になり、ほとんど認めることはできなくなる。それは、東日本に共通する遺跡の動向でもあり、それに同調しているものである。海岸部など沖積平野における遺跡の展開を考えて行かなくてはならないと思われるが、山間地における遺跡の造営の痕跡を見る事はできない。

古墳時代中期末葉になると、潤井川流域において遺跡の登場が明らかになる。富士市沢東A遺跡がその下流域にあり、中流域では大宮城跡や浅間大社遺跡などで、平安時代～中世の城館や神社に直接係らない下層の集落跡として発掘調査が実施されている。いずれの遺跡も沖積地内の微高地の遺跡で、特異な立地を示しており、陶邑T字K208段階の初期須恵器が発見されている。

古墳時代後期以降は、富士市域の平野部における遺跡数の増加が認められようになり、以後律令時代に富士郡衛城の形成と共に飛躍的な発展を示し、律令体制下の政治的な枠組みの中で富士地域の中心として、官道（東海道）沿いの富士市域の平野部にある東平遺跡や中折遺跡においてその機能を持つようになる。対して、潤井川中流域においては、遺跡の動向は明らかではなくな



第26図 若宮遺跡周辺遺跡分布図



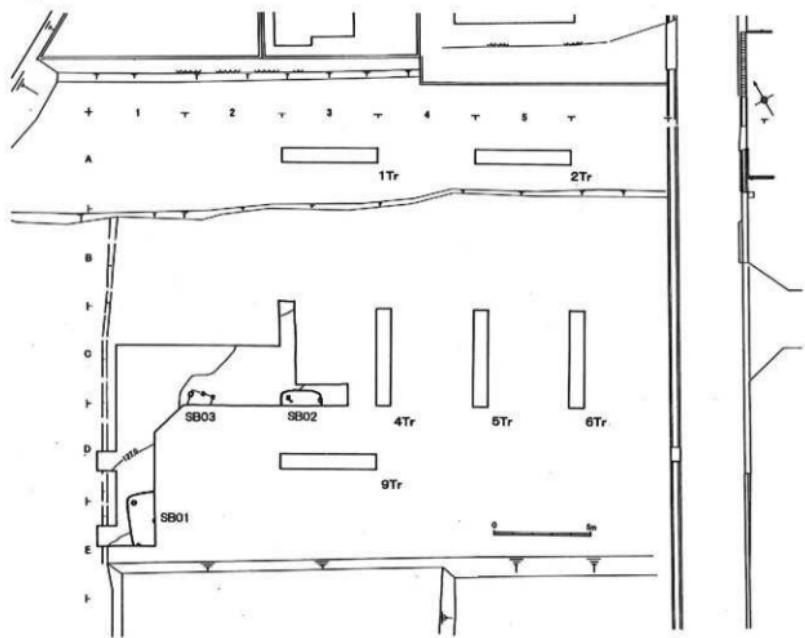
第27図 富士市天間沢遺跡N地区第1号住居址出土土器実測図

り、古墳時代後期の大宮城跡下層や中沢遺跡や木ノ行寺遺跡や奈良時代の上宿・權現遺跡（9）上石敷遺跡（3）や峯石遺跡など弓沢川流域を主体として若干の遺跡分布が認められるものの継続性の弱い集落遺跡として確認されるだけになる。そして、この状況は、10世紀の大宮城あるいは浅間大社遺跡の登場を以って一変し、富士山信仰に関連するのであらう新たなこの地域における政治体制の再編が成され、その中心地域が潤井川中流域へと移動する。

（2）調査の概要（第24・28～30図）

開発の対象地に対する確認調査の結果により、その北西側の丘陵地に沿う微高地において、遺構・遺物の出土が確認されている。本文は、その出土状況から開発事業計画と照合させて199.5 m²に対して本格的な発掘調査を実施した成果の報告である。

L字状の形状を示す発掘調査区（第28図・第29図）は、標高127mほどの場所にあり、南東側に緩やかな傾斜を示している。調査では、散在する状況で、堅穴住居2軒、掘立柱建物になると思われる柱穴列1基が発見されている。発掘調査区以外の確認トレンチは、その北東側および南東側に設定されたものであり、南側に傾斜する斜面地に対して、南北方向の谷部の開析が認められる対象地南東側の状況を確認するためのものであるが、2トレンチ以外遺構および遺物の出土は認められていない。今回発見された集落遺跡の広がりが比較的限定されている実態をよく表しているものと考えることができる。それは、確認調査として、一般市道小泉71号線を挟んで東側に隣接する地点で実施した宅地造成に関連する調査などにおいて遺構・遺物が発見されていないことからも傍証されるものである（第24図）。

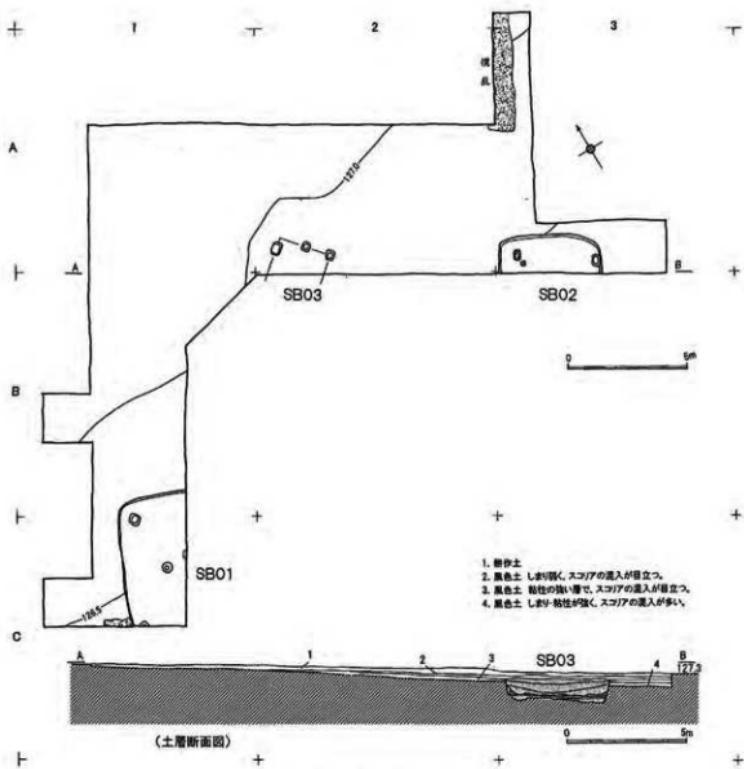


第28図 若宮遺跡調査区域図（調査区とトレンチ）

2トレンチにおいては、その南東側の谷部において、2次的な堆積土内から比較的まとまって土器が出土している（第28図）。今回発見された集落址のような限定された区域で営まれた同時期の遺構の存在が周辺において窺われるものとなっている。

発掘調査は、調査区に合わせて任意に5m×5mのグリッドを設定して実施している。そのため、グリッドの南北軸は30度ほど東に傾くこととなった。グリッドは、北から南へA・B・C列、西から東へ1・2・3列として、それぞれの列の交差を以って名称とした（第29図）。

この調査対象地域における標準的な土層の堆積は、A-3グリッド南壁で認められるものとし、弥生時代以降の遺構確認の鍵層となる大沢ラビリ層の上に2層に分層される黒色土の堆積を認めることができる。スコリア粒を含む粘性の強いこの黒色土は、谷部に移行するこの地点において認められるものであり、今回発見の古墳時代前期の住居は、この層を掘り込んで構築されているのである（第30図）。なお、調査区の大半は、厚さ10cm～20cmを測る耕作土（表土）の直下



第29図 若宮遺跡遺構全体図

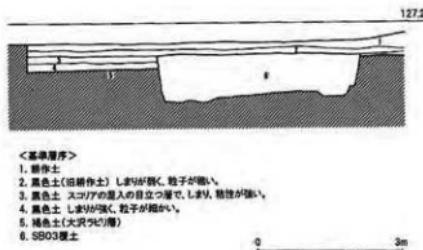
において、大沢ラピリ層が認められおり、それを遺構の確認面として調査を進めた（第29図）。

(3) 遺構（第31～35図）

発見された遺構は、竪穴住居址2軒と柱穴列1基である。竪穴住居址は調査区の南端部と東端部において発見されており、柱穴列は中央付近において確認されている。それぞれ重複関係は持たずに単独で位置しており、有機的な関連が想定されるものである。

S B O 1 (第31図、写真図版4)

S B O 1 (第31図) は、その大半がC-1グリッドに収まる竪穴住居址で全体の1/3程度が検出されており、



第30図 若宮遺跡標準層序

堅穴の東側および南側が、調査区外に展開している。南北方向に中心軸を求めるに N-25° - E を示すものとなる。発見されている北側コーナーの状況から方形に近い隅丸方形の平面形が想定されるものであり、南西壁5.0m、北東壁で2.8mの長さを測る。北側と東側の柱穴が確認されていることから、南西壁は6.0m程度の長さを測るものと想定され、比較的規模の大きな堅穴であることが推定される。掘り込みは堅固な作りであると思われるもので、その残存状況が良い。床面から構造の確認面まで北東壁で0.67mの深さを測る。

覆土は、北側からの流れ込みが著しく、壁際の三角堆積が顕著に見られる。その中で、三角堆積の下位部分において炭化物や焼土の混入の目立つ層（第5～7層）が堅穴の周囲に堆積しており、焼失家屋の様相を示しているとも言えるが、関連する建築部材などの炭化材の明らかな発見はない。焼土等については、堅穴内への投げ込みの可能性も考えられるものであるが、床面と焼土層との間に明確な間層を挟まないことから壁材あるいは屋根材の焼失した痕として捉えられるものである。この焼土・炭化物の層以外は、自然堆積を示して埋没していると言える。

床面は、掘り方を形成して床としているが、掘り方内に建て替えに伴う古い住居の痕跡を残すものとなっている。古段階の住居は、この新段階の住居より一回り小さな規模を測るもので、拡張されている様子がよく分かる。古段階の住居では、住居の周囲を掘り窪める形状の掘り方が確認されている。その最深部で新段階の住居の床面より0.32mを測る。新段階の住居に伴うと思われる明確に掘り方は、確認していないことから、古段階の住居の掘り込みをそのまま利用した堅穴構造の住居を構築しているものと考えられる。

柱穴は、各コーナー部分において発見されている。新旧とも2本ずつ4箇所の柱穴が確認されており、方形を基調とする平面形を示す。新段階の住居に伴うものの内、北側コーナー部分の柱穴は、0.45m×0.45mの大きさで、床面からの深さ0.38mを測り、西側コーナーのもので深さ0.35mを測る。

古段階の住居の2つの柱穴は、いずれも掘り方内からの発見で、北側が0.6m×0.4mの長方形で、深さ0.48mを測り、南側も0.47m×0.4mの長方形で、深さ0.44mを測る。

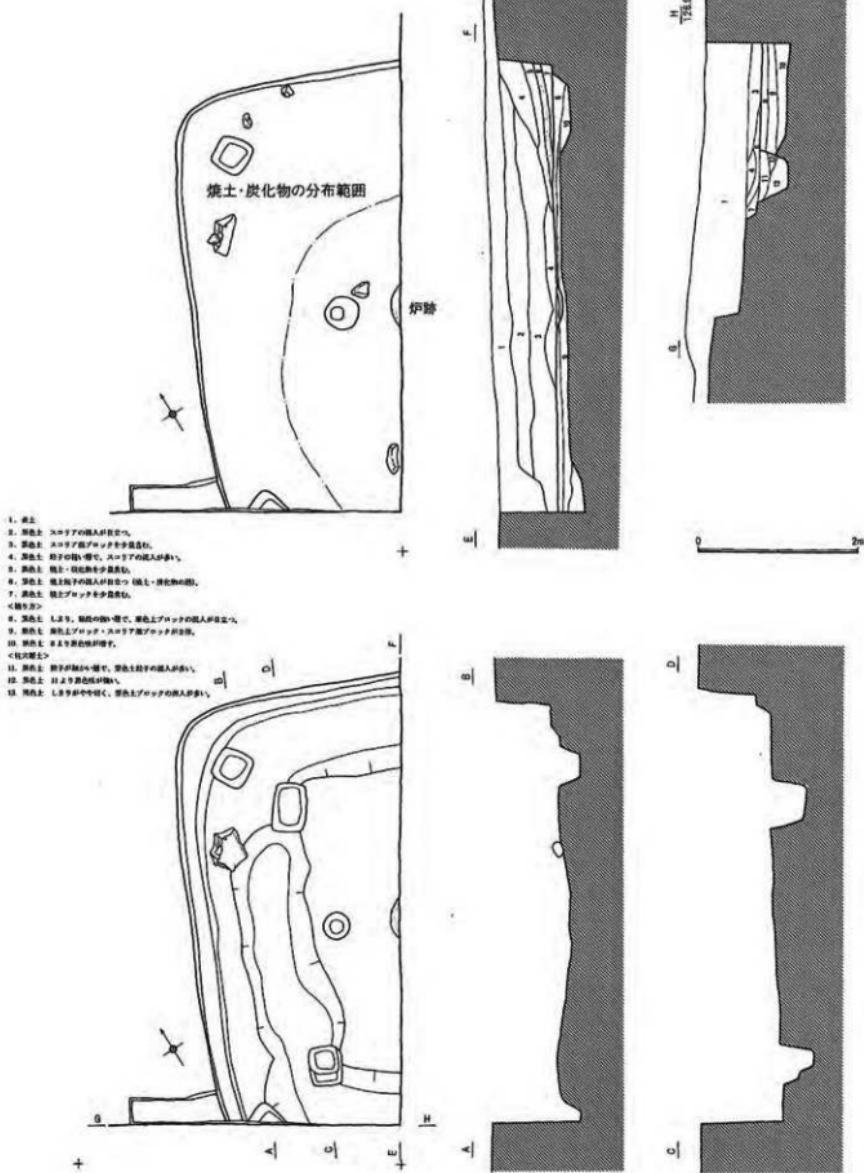
炉址は、調査区の南東側の壁際で確認されたもので、大半は調査区外に広がっている。炉は地床炉で深さ10cm程度を測り、5cmを測る明瞭な焼土の堆積が認められるものである。堅穴に対する位置関係では、住居のはば中央に設置されたものと推定される。東側に近接して径0.42m、深さ0.2mを測るピットが確認されているが、関連はよく分からぬ。

遺物（第34図・第35図）は、覆土中から土器片が出土しているが、明らかに堅穴住居に伴う状況で出土しているものはない。ただし、第34図の1として実測図を掲載した高壙は、新段階の堅穴住居北側柱穴内からの出土で、高壙の壙部の一部を埋納しているような状況で、内面を下に向けて、柱穴の掘り方内から出土している。

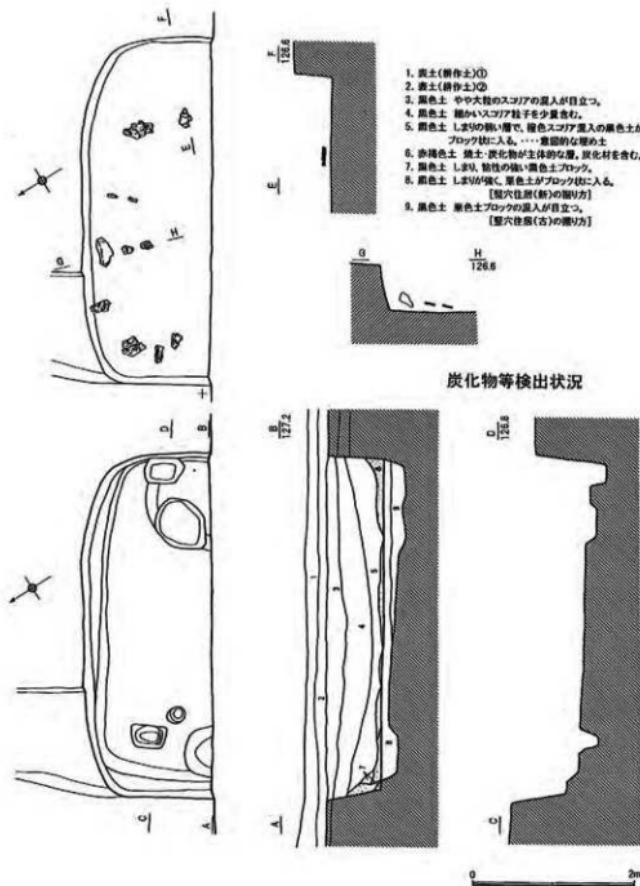
S B O 2 (第32図、写真図版4)

S B O 2 (第32図)は、A-2グリッドにおいて発見された堅穴住居で、全体の1/3程度が確認されている。堅穴自体の多くは、調査区外の南東側に展開しており、中心軸の方向はよく分からぬが、それを南北方向に見れば、N-34° - E を示すことになる。確認されている堅穴の一部から推定される堅穴住居の規模は、一边4.3mを測り、その形状は方形を示すものである。S B-1同様に建替えによる拡張が行われた様子が、堅穴の掘り方の状況から判明している。

壁は、北東壁で深さ0.55m、南東壁・北西壁で共に0.65mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる良好な掘り込みとして確認されている。掘り込みは、大沢ラビリ層の上にある黒色土からであり、黒



第31図 若宮遺跡 S B O 1 実測図



第32図 若宮遺跡SB02実測図

色土の堆積が認められる浅い窪地における竪穴の構築であることが分かる。

覆土は、竪穴住居の壁部分と床面に広がる焼土層がその最下層を占めている。この層中には、多量の炭化物や炭化材が含まれており、典型的な火災家屋の様相を示している。この焼土層の上には、自然堆積としての覆土が堆積しており、火災以後に竪穴住居を放棄している状況を指摘できるものである。焼土は壁際部分の堆積が比較的顕著であるが、壁材あるいは屋根材に関連したものと考えることができる。

床面は、貼り床が敷設されている。貼り床に伴う掘り方内で旧住居の掘り込み跡が確認されており、住居の建替えの痕が判明している。旧住居は、1辺4.05mを測る竪穴住居として捉えられ、

新段階の竪穴よりさらに軸方向が東に傾くものとなっている。軸方向はN-41°-Eを示す。掘り方は、北西壁と南東壁の間に溝状あるいは土坑状の掘り込みが確認されているが、北西側が新段階の竪穴、南東側が古段階の竪穴住居にそれぞれ伴うものであり、片側を掘り窪める掘り方の形状を示している。

柱穴は、調査区に規制された竪穴住居の部分的な調査によって、正しい判断ができるものではないが、関連しそうなピットが北側コーナー部分に2個、東側コーナー部分で1個検出されている。北側は、0.42m×0.28mの長方形の平面形で新段階の竪穴住居の床面から深さ0.4mを測る。近接する南側のピットは、径0.2m程の円形ピットで深さ45cmを測る。

東側のピットは、0.45m×0.3mの長方形で、北側のピットと同様に新段階の竪穴住居の床面から0.5mの掘り込みを有する。これらのピットは、その形状から長方形のものが関連して柱穴を構成していた可能性が考えられるものであるが、東側のものがやや壁の際に寄り過ぎているような位置にある。

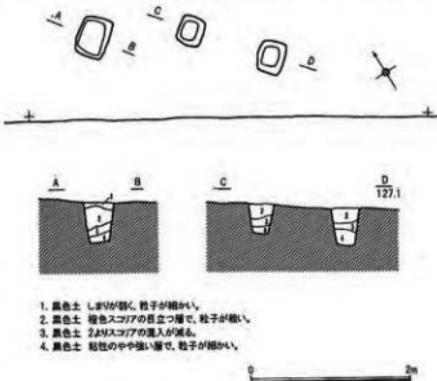
遺物（第36図）は、櫻土中の土器片が目立ったものとして取り上げられるが、直接遺構に係るものは出土していない。火災家屋の関連した建築部材は、炭化材として出土しており、梁や桁あるいは垂木など屋根の部材と思われるものであるが、どの部分なのか判断できるほどの残存状況は示していない。比較的、しっかりした燃焼状況であったもので、一面広がる焼土と共に、炭化材としてその部材が残らない事態が想定されるのである。この様相は、前述のSB-1の焼土、炭化物の出土状況とよく似ている。

竪穴住居北東壁際には、人頭大ほどの自然礫が出土している。これは、焼土や炭化物に混ざって発見され、表面の焼成による赤化が目立つものである。材質は富士山起源の玄武岩で、重さ6.9kgを測る。竪穴住居の上層に関連したものであろうか。

SB-03（第33図）

A-2グリッド東側で発見されている3個のピットの柱穴列を建物跡として捉えて、SB-3とする（第33図）。柱穴列は、一列に並ばないやや特異な配列を示すものである。柱穴は、すべて方形を基調とした平面形を示しており、北側からP1、P2、P3とした場合、P1が0.5m×0.36mの長方形で、深さ0.52mを測り、P2が0.36m×0.32mの規模で、深さ0.40mを測り、P3が0.4m×0.34mの長方形で、深さ0.47mを測る。両端の柱穴がやや深く、規模も大きくなる。

覆土は、3～4層に分層されるものであり、いずれも黒色土で構成される。最下層の第4層が柱に伴う意図的な埋土になるものと思われるしまりのやや強い層であるが、それ以外については人為的かあるいは自然堆積に係るものなのか確実な判断はできない層相を示すものである。



第33図 若宮遺跡SB-03実測図

柱間は、P 1とP 2で1.2m、P 2とP 3で1.05mを測るが、P 2とP 3で構成される列とそれに直行するP 1の列の接点を建物の角に対応するものとすると、接点からP 2までの間隔は、P 2とP 3から求められた柱間と大きな違いを示さないものとなる。

遺物は、柱穴の覆土から少量の土器片が出土している。

(4) 遺 物 (第34~36図、写真図版5)

出土した遺物の大半は、土器類である。破片資料が多く全体の器形の分かるものはない。時代としては、古墳時代前期が主体となり、造構および集落の時期を規定する。

S B O 1 (第34・35図)

古墳時代の土器片の出土が見られる(第34図1~3、第35図4~14)。1は高壺の壺部破片で、壺部の1/3程度が残っている。外面の煤の付着と内面に残る赤彩の痕が特徴的である。2はやや粗製の高壺脚部破片で、円形の穿孔(スカシ)の痕が見られる。3および4~10は、S字口縁台付甕(以下S字甕)の破片である。3~7は同一固体と思われる破片で、搬入品である。尾張におけるS字甕C類(赤塚1991)に当たり、肩部にヨコハケメが見られる。灰白色の色調で外面の煤の付着が目立つ。8は肩部の小破片である。ヨコハケメとともに頸部のヨコナデが見られる。石英の混入が目立つもので、在地産のとは言い切れない胎土を示す。色調はにぶい橙色である。

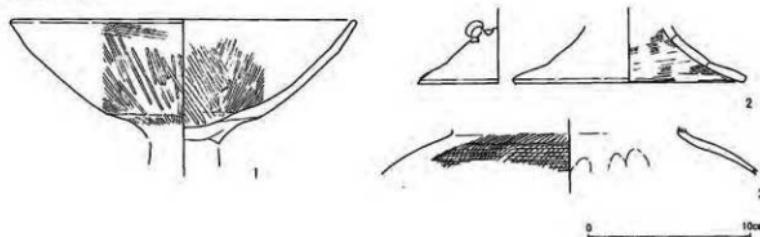
9、10は在地産のS字甕と思われるもので、細かい胎土で雲母の混入が目立つ。10の外面には煤の付着が顕著である。

11~14は甕の破片資料である。11と12は同一固体で内外面に細かいハケメを見ることができる。13は内面肩部~口縁部にかけてのヨコハケメが認められるものの、他ははっきりしないナデ整形の甕になろう。土器表面は摩滅が著しく、その残りは悪い。14は、やや厚手の甕で胴部下半部の破片だと思われるものである。外面の粗いハケメと内面の細かいハケメが特徴的である。外面には煤が付着する。

S B O 2 (第36図)

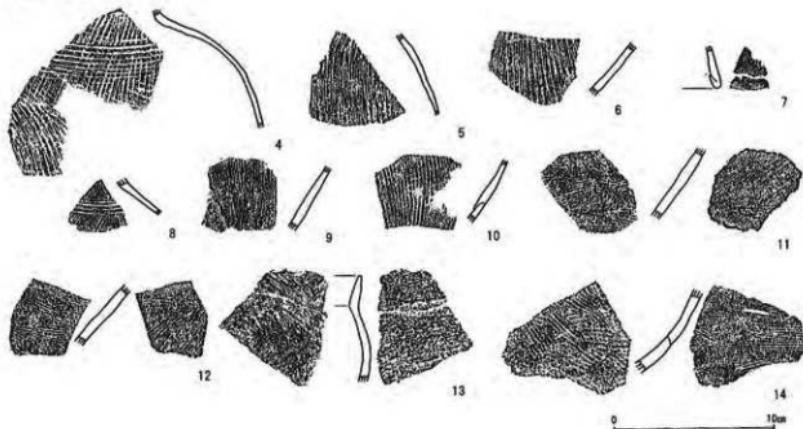
出土遺物は、土器の小破片(第36図15~25)と敲石(第36図21)である。15は二重口縁甕の口縁部破片になるものであろう。破片の下端に弱い稜線が認められるもので、口縁端部を緩やかに

SB01-①



第34図 若宮遺跡出土遺物実測図①

SB01-②



第35図 若宮遺跡出土遺物実測図②

外反させてその端部を弱く尖らせている。16・17は高坏の口縁部破片である。両方とも縦方向のヘラミガキで器面を整形している。17は、口縁部外面に断面三角形の突帯が付されている特異な形態のものである。18・19は高坏の脚部である。18は小型高坏の脚部破片で穿孔が認められる。

20は壺の肩部の破片である。外面のヘラミガキと内面のヨコハケメと共に波状文を見る事ができる。その胎土からは在地産のものと判断される。

22～25はS字甕の破片資料である。22～24は搬入品と思われるもので、石英の混入が目立つ。22と23は同一固体であろう。内面にはヨコハケメが認められる。25是在地産のS字甕ではないかと思われる。雲母の混入が目立つ。

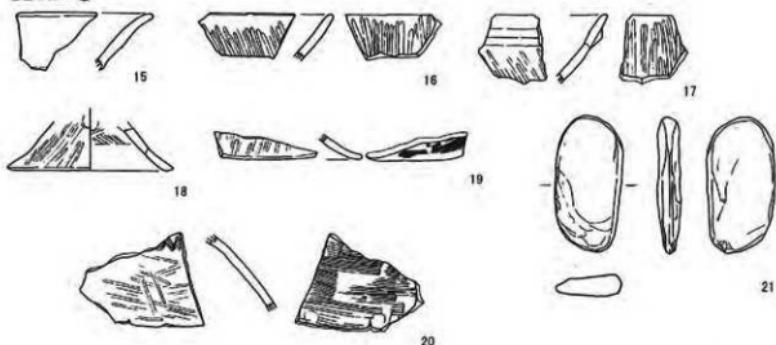
21はホルンフェルスを石材とした敲石で、両端部に敲打痕が見られる。

2トレンチ（第36図）

2トレンチの最も東側の谷部において、地形に沿うように発見されている土器群で、一括土器として捉えられるような出土状況を示している（第36図26～30）。関連する遺構などの落ち込み等は確認されていない。

26は口縁部をヨコナデする鉢の破片と思われるもので、口唇部をわずかに肥厚させている。27は幅広の折り返しの見られる折り返し口縁壺の口縁部破片で、頭部に緩やかな屈折が認められる。28はやや粗製の単純口縁壺の口縁部破片で、口縁端部に2個の円孔を開けられている。29は壺底部破片で、外面をヨコミガキで仕上げている。底部外面には、木葉痕が見られ粗くナデ整形が施されている。30は小型壺の胴部から底部にかけての破片で、底部外面に木葉痕が見られる。26～30は、すべて在地産の土器である。それは一応に破断面の摩滅が著しく、二次的な堆積によって2トレンチから出土したものであると思われる状況を示している。

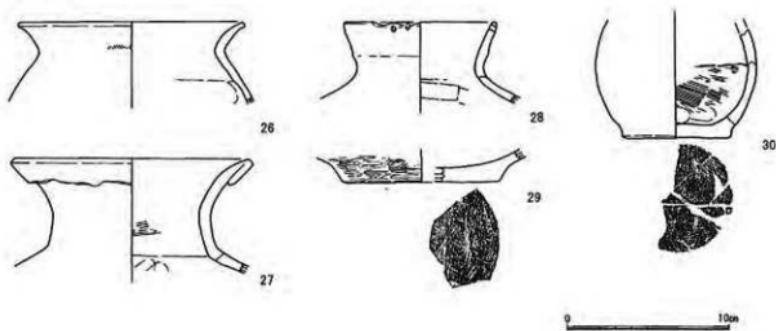
SB02-①



SB02-②



トレンチ



第36図 若宮遺跡出土遺物実測図③

(5) 年代

今回の調査で発見された2軒の竪穴住居と柱列は、その配置や形態から同一時期のものではないかと思われる。いずれの遺跡も遺物の出土数が少なく、年代の設定については、明瞭さに欠くものとなる。確実に遺構の使用時に係るものは、SB01出土の高坏だけであり、そのほかのものは、それぞれ覆土中からの出土であり、直接、遺構の年代を反映していない。

SB01出土の高坏（第34図1）は、坏部の深さが比較的浅く、口縁部が大きく開く形態のもので、やや不明瞭ながら坏部下端に稜を残す。これは、SB01に係る新段階の住居の柱穴からの出土で、住居構築時の土器として考えられる。S字甕（第34図3～第35図10）の中で、3～7は、搬入品として同一固体の可能性もある資料である。淵源地である尾張におけるS字甕C類である。これらに大きく脚部の開く高坏（第34図2）が共伴するのである。

SB01出土の土器は、高坏の型式などその型式組成から大廟Ⅲ式期（渡井1996）として捉えられるものである。そして、遺構の中での出土状況から判断される時期差がある程度認められるのである。

SB02出土土器（第36図15～25）は、壺、甕、高坏の組み合わせとなっている。

18、19は高坏の脚部破片であるが、19が開脚高坏になる可能性がある。開脚高坏は大廟Ⅲ式期を以って消失するもので、一定の出土数を示すのは、古墳時代前期前半である。

20の壺に見られる波状文は、一定の数量を占めるのが古墳時代前期前半段階まで、東海西部において古墳時代前期後半の加飾壺としての柳ヶ坪型壺に施文されるものの、駿河における類例は少ない。

これらの土器群にS字甕が破片資料ながら含まれる点を考慮すると、S字甕が普遍化する段階を評価する中で、SB02を大廟Ⅲ式期のものとして捉えられる。25の在来系のS字甕は、大廟Ⅲ式期段階に相当しており、小破片ながらその年代設定の証左となるものである。

トレンチ出土の土器（第36図26～30）は、27や28のような折り返し口縁壺や単純口縁壺などの壺類の頸部屈折が比較的明瞭となる段階から竪穴住居と同様に大廟Ⅲ式期の年代が考えられる。26は口縁部をヨコナデする古墳時代前期から登場する台付甕の影響を受けたものであろう。頸部に屈折部が認められ、口縁端部を肥厚させている。小型壺の胴部破片である30は、胴径に比べて広い底部を形成する弥生時代後期以来の伝統を保持するものである。主体的な出土を示すのは、弥生時代の伝統を色濃く残す大廟I～II式期段階である。他の出土土器よりやや古相を示すものであると言える。

以上のように、今回の出土土器の大半は、大廟Ⅲ式期のものとして捉えられるのである。遺跡の年代は、3世紀の後葉が当たられる。

<引用参考文献>

赤堀次郎1991『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター

富士市教育委員会1984『天間沢遺跡I』

富士市教育委員会1985『天間沢遺跡II』

富士宮市教育委員会1983『若宮遺跡』

富士宮市教育委員会1993『富士宮市の遺跡』

渡井英吾1996『東駿河における布留式併行期の様相(前)』『静岡県考古学研究』No.28

第11表 若宮遺跡出土土器觀察表

No.	出土地點	器種群別	目録 登録 区分	特　色	調査・文様	備　考
1	SBO1	高坪	(21.6)	黒土、研磨がよく、表面に白い反り。黑色砂粒が目立つ 成形焼成 色調	外面　白面部分ヨコガサギ以外タガ(2年) 内面　半片方向のタガミガサ	年輪1/4厚 内面　赤彩
2	SBO1	高坪	(14.2)	黒土、研磨がよく、表面に白い反り。 砂粒が目立つ、褐色を含む 音波	外面　ヘラカガギ 内面　ヨコハマテ・横いヨコナデ	脚部1/3存
3	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面、蓋部が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨハク(4年/cm) 内面　研磨焼成 内面ヨコナデ、頭部ヨビオサエ	S字裏入品
4	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面、蓋部が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨハク(4年/cm) 内面　研磨焼成 内面ヨコナデ、頭部ヒビオサエ	S字同一脚、S字裏入品 外面部有者
5	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面、蓋部が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(4年/cm) 内面　ナデ	S字同一脚、S字裏入品 外面部有者
6	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面、蓋部が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(4年/cm) 内面　ナデ	S字同一脚、S字裏入品 外面部有者
7	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面、蓋部が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨハク(4年/cm) 内面　研磨ヨコナデ	S字裏有脚 S字同一脚作?、S字裏入品
8	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面、蓋部が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨハク(4年/cm) 内面　ナデ	S字裏在庫?
9	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面、蓋部が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(4年/cm) 内面　ナデ	S字裏在庫
10	SBO1	台付甕		黒土、研磨がよく、表面が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(5年/cm) 内面　ナデ、抜底痕	S字裏在庫 外面部有者
11	SBO1	甕		黒土、研磨がよく、表面が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(7年/cm) 内面　ヨコナハメ	
12	SBO1	甕		黒土、研磨がよく、表面が目立つ 成形焼成 色調	外面　ヨコハケヨ(1年/cm) 内面　ヨコナハメ	II-2同一脚
13	SBO1	甕		黒土、研磨がよく、表面が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(5年/cm) 内面　ヨコハメ(10年/cm)	ナメ焼成の極?
14	SBO1	甕		黒土、研磨がよく、表面が目立つ 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(6年/cm) 内面　ヨコハメ(6年/cm) 一見ヨコカサ	内外面部有者
15	SBO2	壺?		黒土、研磨がよく、表面を少し含む 成形焼成 色調	外面　表面磨耗	一直口縁?
16	SBO2	高坪		黒土、研磨がよく、表面を少し含む 成形焼成 色調	外面　ナメヨリ	内外面部有者
17	SBO2	高坪?		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　頭部一部タガミガサが残る 内面　ナメミキ	口縁部外面部有者
18	SBO2	高坪	(10.2)	黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　タガミキ 内面　ヨコナハメ(6年/cm) 一見ヨコカサ	1/4以下存
19	SBO2	高坪		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ヨコハメ(10年/cm) 内面　ナメ	頭部高坪?
20	SBO2	壺?		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ナメヨリ (文様)状況 内面　ヨコハメ(7年/cm)	口縁部外面部有者
21	SBO2	台付甕		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(6年/cm) 内面　ナデ	外面部有者 S字裏入品
22	SBO2	台付甕		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(6年/cm) 内面　ナデ	外面部有者 S字裏入品
23	SBO2	台付甕		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(6年/cm) 内面　ヨコハメ(6年/cm)	外面部有者 S字裏入品
24	SBO2	台付甕		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　表面削除 内面　ナメ	S字裏入品
25	SBO2	台付甕		黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ナメハケヨ(6年/cm) 内面　ナメ	S字裏在庫
26	第2Tr	壺?	(13.7)	黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ヨコハメ 内面　ナデ	1/4以下存
27	第2Tr	壺	(14.6)	黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　表面磨耗 内面　ヨコハメガキ?頭部オサユ	1/4以下存 割れ口10件
28	第2Tr	壺	(9.3)	黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ヨコハメナデ 内面　ヨコハメヨコカサ?頭部ナデ 一見ヨコカサ	1/4以下存 口縁部有り2件
29	第2Tr	壺	(6.6)	黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　ヨコハメ 内面　ナメ	單耳口壺(小型壺)
30	第2Tr	壺	(6.5)	黒土、研磨がよく、表面を含む 成形焼成 色調	外面　表面磨耗 内面　木葉模	小型壺

第12章 范富遺跡出土石制日晷晷面

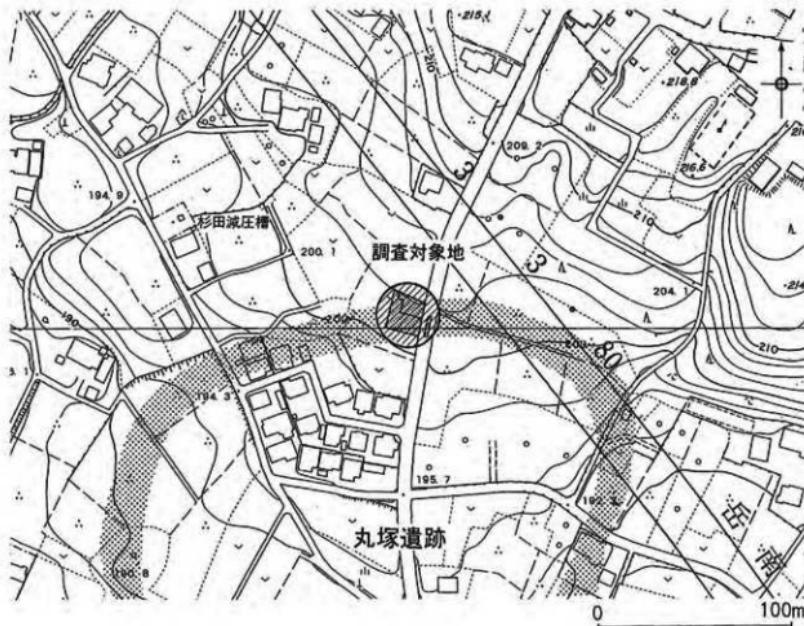
第11表 石古道跡山工石器類観察表								
No.	出土地点	器種	長 度 (cm)			材質	特 色	備 考
			走	幅	厚さ(g)			
21	SB02	嵌石	8.3	4.2	1.4	60.0	ホルンフェュルス	上面、下面に嵌打痕 二次的な被加熱

5 まるづかいさき
丸塚遺跡

所 在 地 富士宮市杉田1230番地の1
調 査 原 因 富士宮市消防団第13分団詰所建設に伴う埋蔵文化財発掘調査
調 査 期 間 平成18年7月3日～7月27日
調 査 面 積 約110m²
調 査 主 体 富士宮市教育委員会教育長 大森衛
発 掘 担 当 者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英吾

(1) 遺跡の位置と歴史的環境 (第37～39図)

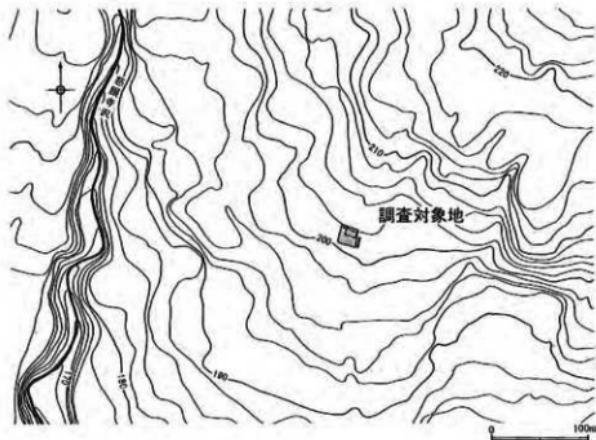
本調査地は富士宮市杉田1230番地の1に所在し、付近には茶畠や畠が広がりを見せる。地形的には、東に天間沢川、西に慈眼寺沢の2つの沢で挟まれた標高180～210mを測る丘陵上のほぼ中腹



第37図 丸塚遺跡調査区位置図

に立地する。杉田地区は古富士火山起源の古富士泥流、新富士火山起源の大渕溶岩流・入山瀬溶岩流上に形成されている。市内より湧き出る湧水は、性質の異なる古富士火山起源溶岩と新富士火山起源溶岩の境界面を流れている地下水脈が、地表面に露出する溶岩の境界面から湧き出す。このような場所がいくつか点在するこの地域は、古くより水を得やすい環境であった。自然環境に適応させて生活していた縄文時代の生活において、このような環境は生活する場として十分適する場所であり、そのことは杉田地区にみられる遺跡の分布状況より判断される。

丸塚遺跡の東側の天間沢川に沿う左岸の丘陵上には北から縄文時代早・中・後期の焼畑遺跡、安養寺が所蔵する市指定文化財の土偶が検出されたと伝わる縄文時代中・後期の杉田中村遺跡、縄文時代前・中期の寺地遺跡、右岸の丘陵上には縄文時代前期～後期の滝ノ上遺跡が立地する。

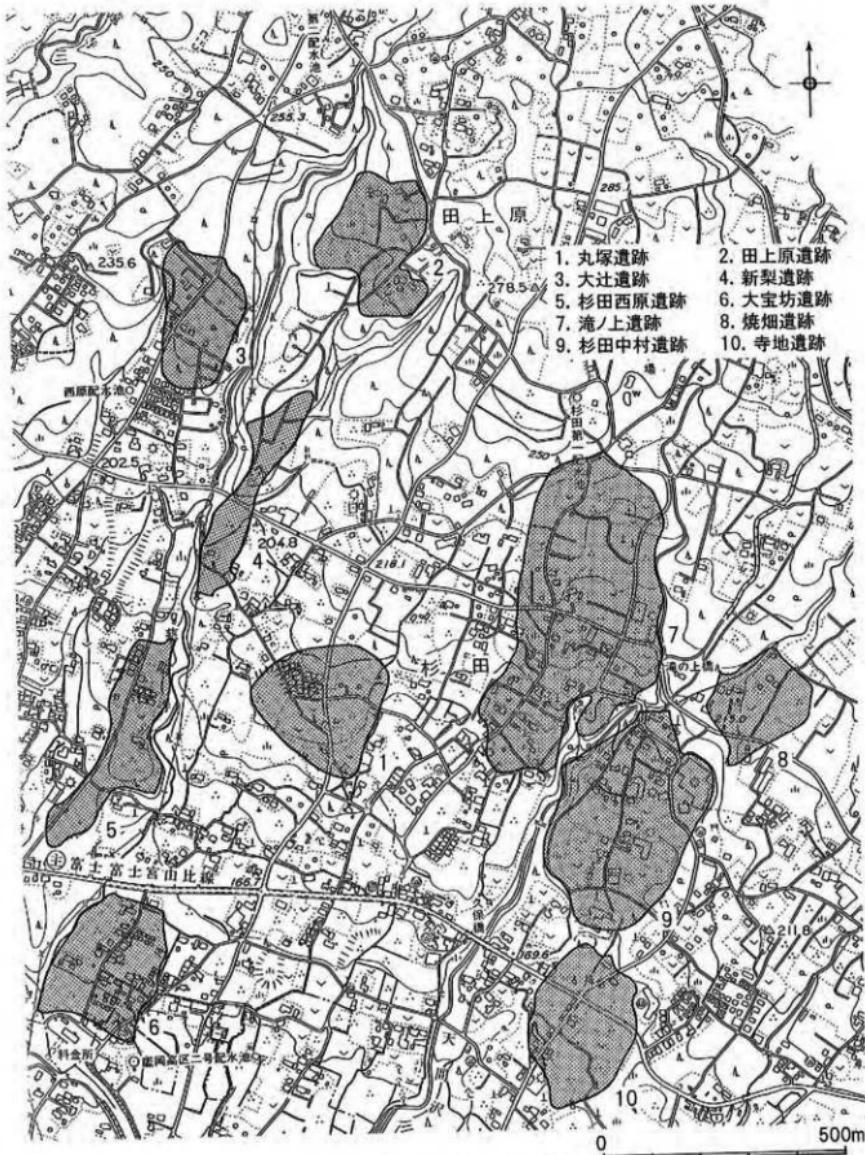


第38図 丸塚遺跡調査対象地周辺地形図

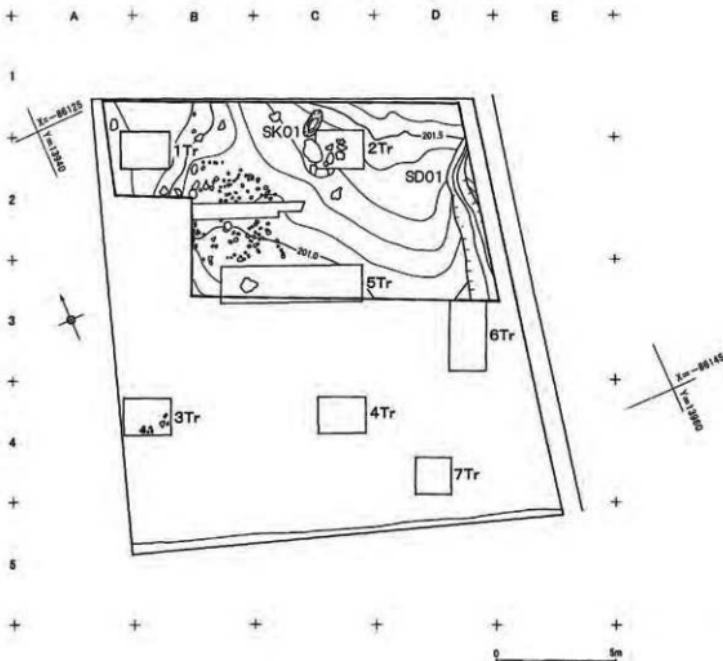
西側を流れる慈眼寺沢に沿って左岸の丘陵上には北から田上原遺跡、縄文時代早期～後期の新梨遺跡、南側には縄文時代中期の大宝坊遺跡、右岸の丘陵上には大辻遺跡、杉田西原遺跡が立地する。さらに、第39図には記載されていないが、本調査地より慈眼寺沢を約300m南下したところには、縄文時代早期の集落址である若宮遺跡をはじめ縄文時代早期・前期の代官屋敷遺跡が立地している。このように見ても本遺跡が立地する杉田・小泉地区は濃密な遺跡密集地域であり、縄文時代の早い段階より生活場に適した環境下であったことが遺跡分布状況より窺える。

(2) 調査の経過（第40図）

平成17年12月1日付けで富士宮市長小室直義氏（消防本部・警防課）より、富士宮市消防団第13分団詰所建設に伴う文化財所在の有無についての照会を富士宮市教育委員長宛に受けた。照会地は、縄文時代中期の埋蔵文化財包蔵地である丸塚遺跡分布範囲に隣接する場所に所在する為、



第39図 丸塚遺跡周辺遺跡分布図



第40図 丸塚遺跡調査区全体図

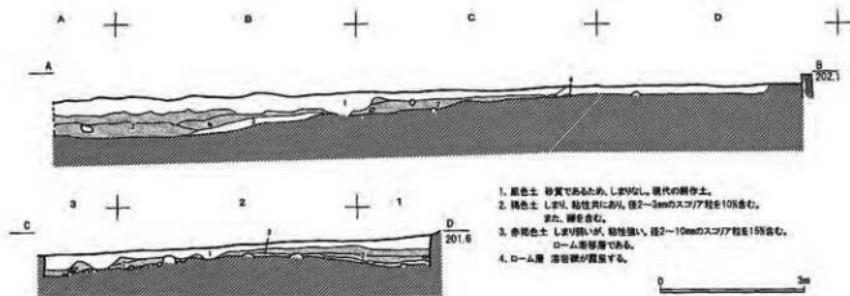
埋蔵文化財確認調査として平成18年3月14日～平成18年3月17日にかけて、埋蔵文化財の有無と遺跡の種別・年代の設定・遺物包含層までの深度などの情報を得る目的から開発範囲の約300m²にトレンチを7本（約30m²）設定し実施した。その結果、照会地に縄文時代早期後葉の遺物包含層が調査区西側の2/3の範囲で確認された。その旨を富士宮市長小室直義氏（消防本部・警防課）及び、静岡県教育委員会文化課宛に回答した。その後、本開発担当課である富士宮市役所警防課との協議を重ねた結果、現状維持による建設工事は困難であるとの結論に達し、平成18年7月3日～同年7月27日にかけて建物建設地において本調査を実施する運びとなった。本調査終了後には照会地に隣接する道路部分に対して防火水槽建設工事が行われた。約70m²を対象として防火水槽建設工事の立会い調査を実施しているが、すでに遺構確認面の削平がなされ、遺物・遺構は確認されなかった。以上のような経緯を経て報告書の刊行に至るまでの一連作業を富士宮市教育委員会文化課で行った。なお、本調査以後に行われ、本報告書刊行前に本調査地北側と隣接する地点において静岡県東部農業共済組合建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施している。この際

の報告については静岡県東部農業共済組合方との契約上、平成18年度に書名『丸塚遺跡』として発行している。

(3) 層序 (第41図)

層序は調査区北側壁面で確認した土層について標準土層として記載する。

1. 黒色土 (表土層) 砂質でしまりが非常に弱く、現代の耕作土である。
2. 褐色土 (遺物包含層) 粘性・しまりがある。径2~3mm程度のスコリア粒を10%、また礫を含む。
3. 赤褐色土 ローム漸移層である。径2~10mm程度のスコリア粒を15%含む。粘性が強いがしまりは比較的弱い。
4. ローム層 調査区東側では削平によって古富士泥流層が露呈する。



第41図 丸塚遺跡調査区標準土層図

(4) 遺構と遺物 (第42~45図、第13・14表、写真図版6)

A 遺構 (第42図)

自然流路 (S D 0 1) D-2・3グリッドに位置する。規模は長さ6.7mで、開口部0.5mである。開口部の主軸方向はN-47°-Wであり、屈折し流路が広がる部分ではN-5°-Wを指向する。遺物として、現代の陶磁器の破片及びガラス製品などが混在する状況からS D 0 1は近代以降の年代が与えられる。

土坑 (S K O 1) B-1グリッドに位置する。平面形は梢円形を呈する。規模は長軸1.16m、短軸0.46m、深さ0.21mを測り、主軸方向はN-55°-Eを指向する。覆土は上層が黒褐色土、下層が褐色土で幾分上層のはうが強い粘性を持つ。底部には古富士泥流起源のものとみられる巨

穢が見られる。遺物として覆土中より東海系条痕文土器が2点出土している。また、微細な炭化物も検出している。

B 遺物(第44~45図、第13・14表、写真図版6)

縄文土器を主体に陶磁器、黒曜石、貝岩が出土している。以下ではグリッド順に報告する。遺物の出土状況に関しては第43図で示す。

縄文土器(第44~45図22・23、第13表、写真図版6)

出土した縄文土器のほとんどのものに片面及び両面に貝殻状条痕を持つ。胎土には混入物や条痕を多用していることから、遺跡の主体年代は縄文早期後葉と推察された。また、形式については小崎氏のご指導により早期後葉の東海系条痕文土器であることが判明した。本調査から出土した遺物は、東海地方縄文早期後葉の土器(1群)、縄文中期の土器(2群)、陶磁器(3群)の3つに分類して報告する。また、1群について、口縁部や隆帯の施文法により上ノ山式土器、入海I式土器、縄文早期後葉の土器に細分化した。それぞれの形式の特徴については以下の通りである。

① 上ノ山式土器

愛知県の上ノ山貝塚を標識遺跡とした東海地方縄文時代早期後葉の土器形式である。擦痕を残した深鉢が主体であり、口縁に1条の隆帯をめぐらせ、隆帶上及び口縁に棒状工具または指頭によって連続の交互押捺文が施される特徴を持つ。

② 入海式土器

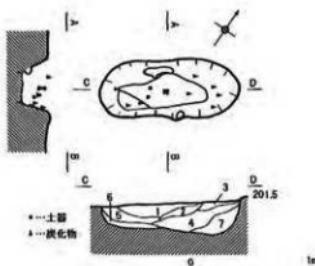
愛知県の入海貝塚を標識遺跡とした東海地方縄文時代早期後葉の一般に入海式土器はI式、II式に分類されている。I式は底部尖底である。入海式も上ノ山式土器と同様の隆帯を持つが、入海式土器は螺旋状に数段にわたりめぐらす。隆帶上には箒等によって連続の刻みが施されるものや棒状施文具による連続刺突が施される。

③ 縄文早期後葉の土器

胴部の破片資料であり、形式分類することが困難である。しかし、片面及び両面に貝殻条痕を持つ。また、胎土中に纖維多く含まれている。

④ 縄文中期の土器

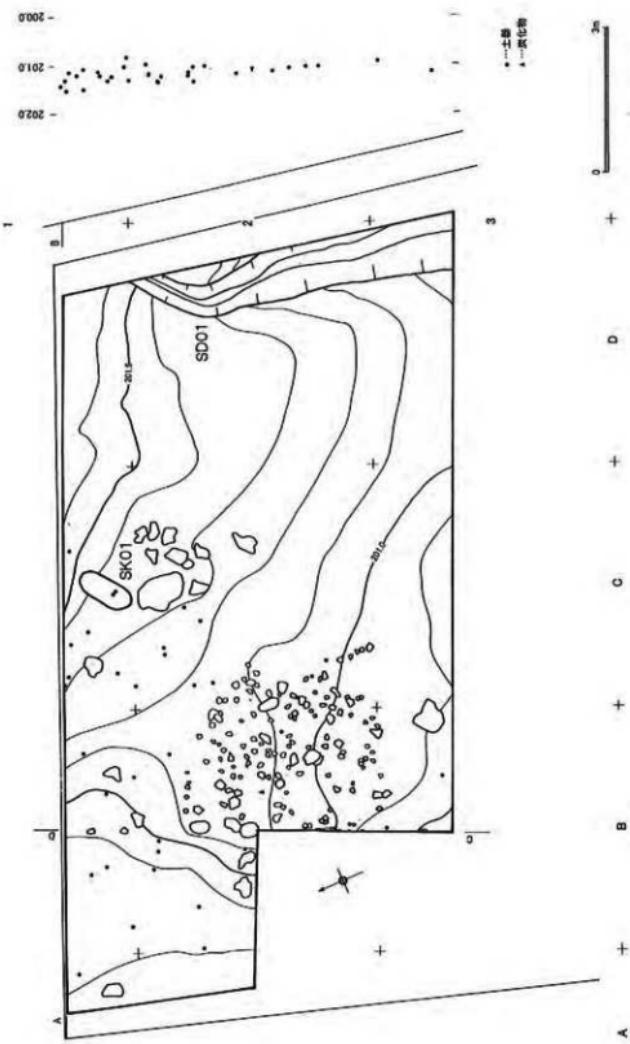
器壁が他のものよりも厚く、内外面ともに貝殻条痕を伴わないものである。文様はみられず、形式は不明である。

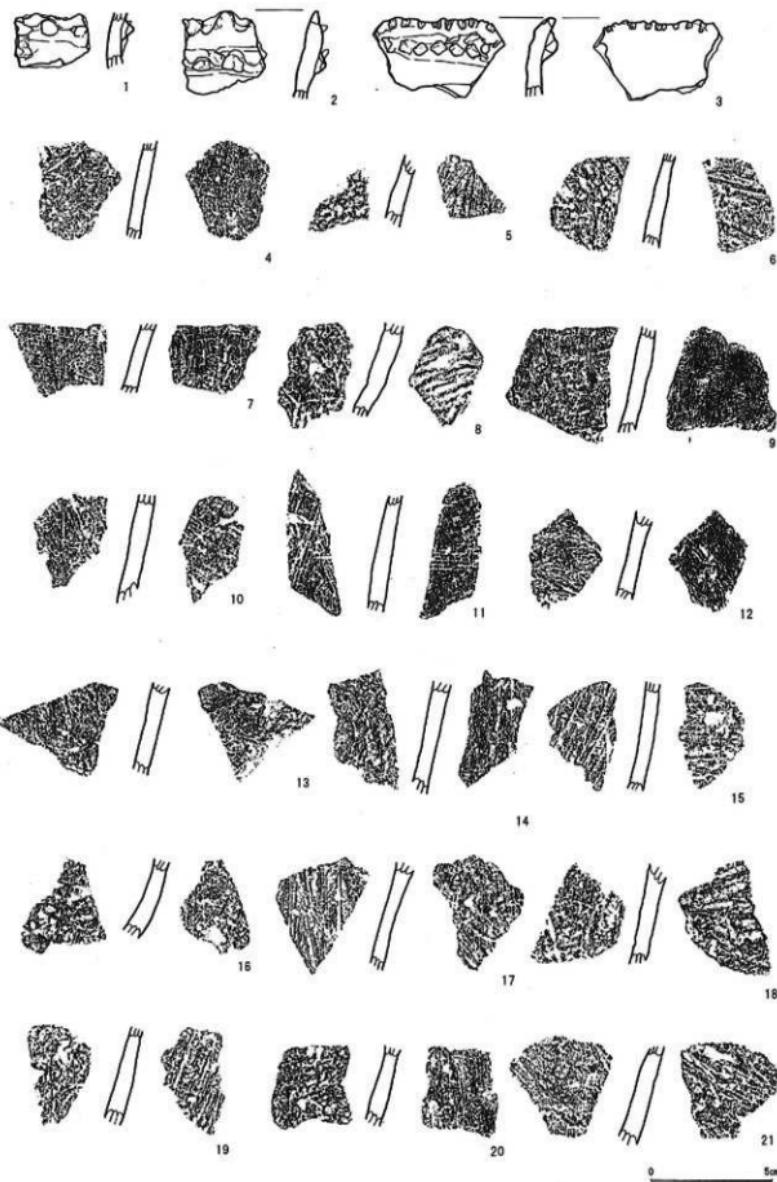


1. 黒褐色土 しまり強く、粘性若干あり。径1~2mmのスリガラ合む。
また、炭化物をわずかに含む。
2. 黒褐色土 1層と同様の、まだ粘性を保つ。径2~3mmのスリガラ合む。
3. 黑褐色土 热性が強まれば丹色1号と同様である。
4. 黑褐色 土層より少しは強い。径2~3mmのスリガラ合15%含む。
また、炭化物を多く含む。
5. 黑褐色土 しまり弱く、粘性なし。径1~2mmのスリガラ及15%含む。
また、径2mmの小石を含む。
6. 黑褐色土 しまり弱く色調の明るいが薄手。径2mmのスリガラ及2%含む。
7. 黑褐色 土層より色調共に強い。スリガラ合4%と同程度である。
また、4層より色調の明るみが増す。

第42図 丸塚遺跡SKO 1実測図

第43圖 丸塚遺跡遺物出土狀況





第44図 丸塚遺跡出土遺物①

第1群 東海地方縄文時代早期後葉の土器群（第44図1～22、第13表、写真図版6）

第1群1類 上ノ山式土器（第44図1～2）

1及び2はC-1グリッドから出土した上ノ山式土器である。1は口縁部付近の破片資料であり、一条の隆帯上に交互押圧がみられる。2は口縁部の破片資料である。口唇部及び一条の隆帯上に交互押圧がみられる。また、外面の隆帯直下に横位の擦痕がみられる。

第1群2類 入海I式土器（第44図3）

3はC-2グリッドから出土した入海I式土器である。口縁部の破片資料であり、口縁に近いところに一条の低い隆帯を持つ。隆帯上には棒状の工具による押圧がなされ、口唇部には籠状の工具による刺突文がなされている。

第1群3類 縄文時代早期後葉の土器（第44図4～22）

胎土の混入物や器面調整などから上ノ山式・入海式土器同様の東海地方縄文早期後葉のものと考えられるものである。

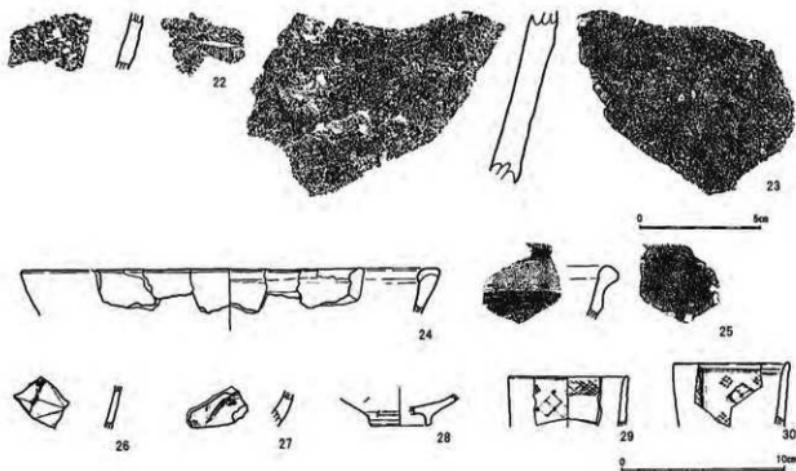
4はA-1グリッドより出土し、底部に近い部分の破片資料である。内面に貝殻状条痕がみられる。5はA-2グリッドより出土し、内面に強い貝殻状条痕、外面に擦痕がみられる。6～8はB-1グリッドより出土した。6は内面に強い貝殻状条痕、外面に擦痕がみられる。また、外面にはススの付着が、内面には炭化物の付着が確認された。7は内面に強い貝殻状条痕がみられ、8は底部付近の破片資料であり、表面よりも内面に強い貝殻状条痕土器がみられる。9・10はB-2グリッドより出土した。9は内外面には擦痕がみられ、10は内外面には貝殻状条痕がみられる。11はB-3グリッドより出土し、内外面には貝殻状条痕がみられる。12～14はB-4グリッドから出土している。すべて胴部の破片資料である。12、14は内外面に擦痕、13は外面のみに擦痕がみられる。15～17はC-1グリッドより出土した。共に胴部の破片資料である。15は内外面に貝殻状条痕がみられるまた、内面には炭化物が付着する。16は炭化物の付着し、17は内面に比較的強い貝殻状条痕がみられる。18～21はC-2グリッドより出土した。すべて胴部の破片資料である。18、19は内面に貝殻状条痕がみられ、20は内面に貝殻状条痕、外面に擦痕がみられる。また、21は内外面には擦痕がみられる。

第2群 縄文時代中期の土器（第45図23・24、第13表）

縄文時代早期後葉の土器の胎土とは異なり、器壁の厚みを持つものである。文様は見られず形式は不明である。23は胴部、24は口縁部の破片資料である。

第3群 陶磁器（第45図25～30、第14表）

25～29は瀬戸・美濃産の磁器であり、いずれも染付けによる技法を用いている。25・26は碗の破片資料である。28・29は箱型湯呑口縁部の破片資料である。28の復元口径は7.3cm、29の復元口径は6.8cmと推定される。年代は、18世紀後半があたえられる。



第45図 丸塚遺跡出土遺物②

(4) まとめ

富士宮市内において縄文時代早期の土器構成は関東系の土器形成が一般的に波及する。縄文時代早期について遺跡の数は比較的多いが、縄文時代早期後葉の東海系土器を中心とした土器構成をなす遺跡はこれまで発見されていない。このような点からみても市内における縄文時代早期後葉を窺う上で今回の調査で検出された上ノ山式・入海式土器は重要なものであると言える。

本調査地の旧地形は入組んだ谷地形であることが調査で確認され、遺物出土に関してはこの谷地形に沿って堆積している様子が第43図より読み取ることができる。このような遺物の出土状況や旧地形などから考察すると、本調査で得られた遺物は本調査地の上方の地点から移動して現在の場所に二次堆積した遺物であると言える。出土資料は少ないものの本調査より得られた遺物が单一の時期であることなどから、短期間の経営であったのだろう。したがって、本遺跡はキャンプサイト的性格を持つ遺跡であったことが推察される。本遺跡の周辺には、縄文時代早期前半の集落跡とされる若宮遺跡や前期より営まれるとされる滝ノ上遺跡など比較的定住性の高い遺跡が本遺跡に近接する。それらの遺跡との年代がそれほど離れている訳ではないため、これらの相互の繋がりなども注目される。今後のさらなる資料の増加を期待したい。

最後に、本調査より出土した遺物について池谷信之氏・小崎晋氏よりご教示を受け賜った。文末ではあるが御礼申し上げる。

<引用参考文献>

- 八幡一郎1972『濃尾平野の遺跡遺物』『日本中部山地に於ける縄文早期文化の研究 上』
- 富士宮市教育委員会1982『代官屋敷遺跡－西富士道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（1）－』
- 静岡県1990『静岡県史 資料編1 考古一』
- 知多市教育委員会1991『二股貝塚』
- 静岡県1992『静岡県史 資料編3 考古三』
- 富士宮市教育委員会1993『富士宮市の遺跡－富士宮市遺跡詳細分布調査報告書－』
- 戸沢光則1994『縄文時代研究辞典』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所1994『焼場遺跡A地点－平成4・5年度東駿河湾環状道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
- 富士宮市都市開発部水とみどりの課1995『富士宮市の自然 第二次富士宮市域自然調査研究報告書』
- 富士宮市教育委員会1995『富士山のなりたち』
- 富士宮市教育委員会2000『富士宮市遺跡地図－第3版－』
- 財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2005「仁田館」「来光川遺跡群Ⅰ－平成11～16年度一級河川来光川河川改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

第13表 丸塚遺跡出土遺物観察表①

No	形式	年代	出土地點	部位	特色	調査・文様	備考
1 表1 上	東3 周早(後)	C-1	口縁部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~2')が多、長石(径1')、鐵錫、 に多い、黃鉄		1/4以下
2 上	周早(後)	C-1	口縁部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~2')、長石(径1.5')、金雲母、鐵錫、 に多い、黃鉄	外画 横版	1/4以下
3 表2 入1	周早(後)	C-2	口縁部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~2')、長石(径1')が多、金雲母、鐵錫、 に多い、黃鉄	内画 原版	1/4以下
4	周早(後)	A-1	胸部	新土 色調 焼成 色調	石英(径0.5~2')、長石が多、金雲母が少、鐵錫、 に多い、黃鉄	内画 条文	1/4以下
5	周早(後)	A-2	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5')が多、長石(径0.5~3')、金雲母、鐵錫、 (内)灰鉄 (外) 錫	外画 強い条文 外画 横版	スス付着
6	周早(後)	B-1 混乱	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~2')が多、長石(径2')、金雲母が少、鐵錫、 に多い、黃鉄	内画 花形物が付着 外画 スス付着	1/4以下
7	周早(後)	B-1	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~2')が多、長石(1~2')、金雲母、鐵錫が少、 燒成 に多い、黃鉄	内画 条文	1/4以下
8	周早(後)	B-1	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英、長石(径0.5~2')が多、金雲母、鐵錫、 (内)に多い、黃鉄、(外)に多い 鐵錫	内画 条文 内外面 岩子スス付着	1/4以下
9	周早(後)	B-2	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~2')が多、長石(径1')、金雲母が少、鐵錫、 に多い、黃鉄	内外面 岩子スス付着	1/4以下
10	周早(後)	B-2 混乱	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英、其石(径0.5~2.5')が多、金雲母、鐵錫が少、 燒成 (内)に多い、(外) 錫	内画 条文	1/4以下
11	周早(後)	B-3	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5')が多、長石、金雲母(多)、鐵錫、 (内)に多い、黃鉄、(外) 混黄錫	内外面 条文	1/4以下
12	周早(後)	B-4	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5')、長石(径0.5~1.5')が多、砂粒、金雲母、鐵錫が多、 燒成 普通	内画 横版	1/4以下
13	周早(後)	B-4	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5')、長石(径3')、金雲母が少、鐵錫が多。	鐵錫	1/4以下
14	周早(後)	B-4	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5')、長石(径0.5~2.5')、金雲母が多、鐵錫が少、 (内)に多い、黃鉄、(外) 混黄錫	内外面 原版	1/4以下
15	周早(後)	C-1	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5')、長石(径0.5~2')、金雲母、鐵錫が多。	内外面 条文	スス付着
16	周早(後)	C-1	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径2')、長石(径0.5~2')、砂粒、金雲母、鐵錫が少 燒成 普通	内画 花形物付着	1/4以下
17	周早(後)	C-1	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径3')、長石(径1')、金雲母、鐵錫 (内)に多い、黃鉄、(外) 錫	内画 条文	1/4以下
18	周早(後)	C-2	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~2')、長石(径1.5')が多、金雲母が少、鐵錫が多 燒成 普通	内画 条文	1/4以下
19	周早(後)	C-2	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~1')が多、長石(径1')、金雲母、鐵錫 (内)に多い、黃鉄、(外) 混黄錫	外画 横版	スス付着
20	周早(後)	C-2	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~1')が多、長石(径1')、金雲母、鐵錫 (内) 黑色、(外) に多い、黃鉄	1/4以下	
21	周早(後)	C-2	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、石英(径0.5~1')、長石(径0.5~2')、鐵錫多、長石、金雲母、鐵錫水多 (内)に多い、(外) 錫	内外面 原版	1/4以下
22 表4 周早(後)	表探	胸部	新土 色調 焼成 色調	石英(径1~3')、砂粒(径3')、鐵錫(径3')、鐵錫多			
23	溝 中	B-3	胸部	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい、其石(径1')、石英(径0.5~2')、鐵錫多	無文	1/4以下
24	溝 中	表探	口縁部	新土 色調 焼成 色調	赤色粘土、石英、其石多、黑色粘土(径1'以下)、赤色粘土(径0.5~1') 燒成 普通 (内)に多い赤色	無文	1/4以下

表1 上…上ノ山式
表2 入1…入2ノ山式
表3 漢文時代中層
表4 漢文時代中層

第14表 丸塚遺跡出土遺物観察表②

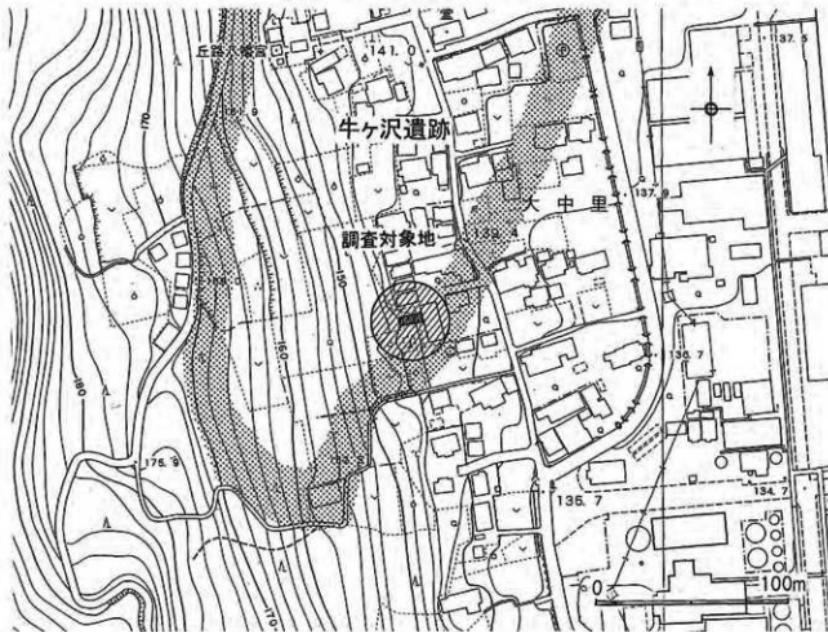
No	出土地點	種別 器種	口径 高さ 底径	特色	調査・文様	備考	
25	表探	国産陶器		新土 色調 焼成 色調	きめ細かい 研質	漏斗・美濃產 1/4以下	
26	表探	国産磁器碗		新土 色調 焼成 色調	きめ細かい 焼質	漏斗 1/4以下	
27	表探	国産磁器碗		新土 色調 焼成 色調	きめ細かい 焼質	漏斗 1/4以下	
28	表探	国産磁器碗	3.3	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい 焼質	漏斗 1/4以下	
29 B-4 (TTR) 表土中	国産陶器 箱型器	(7.2)	新土 色調 焼成 色調	きめ細かい 焼質	漏斗 1/4以下	口部1/4以下	
30	表探	国産陶器 箱型器	(7.2)	新土 色調 焼成 色調	古め細かい 焼質	漏斗 1/4以下	口部1/4以下

うしがざわいせき
6 牛ヶ沢遺跡

所 在 地 富士宮市大中里108の2
調 査 原 因 富士川河口断層帯の活動履歴調査に伴う事前の発掘調査
調 査 期 間 平成18年12月4日～12月8日
調 査 面 積 54m²
調 査 主 体 富士宮市教育委員会教育長 大森衛
発 掘 担 当 者 富士宮市教育委員会文化課学芸員 渡井英裕

(1) 位置と環境（第46～51図）

牛ヶ沢遺跡は、羽鮈丘陵の裾部に展開する潤井川右岸に形成された沖積地内の微高地に位置している（第46図）。調査地点は、緩やかに潤井川側へ傾斜する斜面地で、その西側に羽鮈丘陵の斜面を見上げる場所にある。そこは、羽鮈丘陵の末端部に当たり、丘陵の基盤となる黄褐色ローム層や大沢ラビリ層の分布域であると共に、潤井川の作用による黄褐色砂層の堆積層の分布も認めることができる地形的な変換点であり、特異な地形環境に形成された遺跡として捉えられるのである。そのため、調査区の東側に平坦面が見られるものの、その西側は、急激な斜面地を形成



第46図 牛ヶ沢遺跡調査区位置図



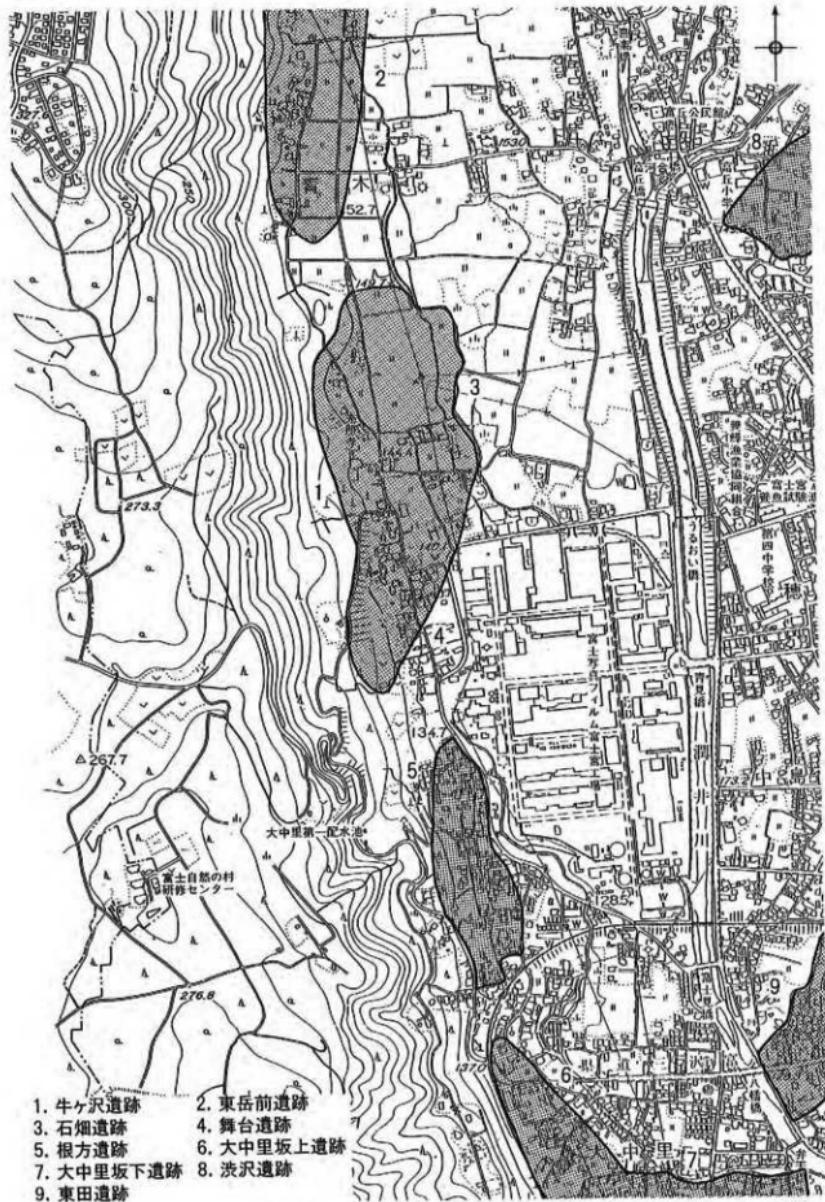
第47図 牛ヶ沢遺跡周辺地形図

するものである。幅5m程で比高差1.5mを測るのである。遺構の分布は、東側の平坦地に対してその主体を示し、古墳時代の遺物包含層も同じ範囲にその分布が認められる。それは、沖積平野の末端部に当たるため、潤井川による川の作用を直接受けており、これら遺物包含層や今回の報告事例に限定されて遺跡が形成されている。地質では、不安定な環境にあるが、限定された遺跡形成として特徴的な性格を持った遺跡であると言える(第47図)。

調査地点の西側には、標高277mを測る羽鮈丘陵が聳えており、その比高差が137mを測るものである。潤井川右岸の沖積地内に点在する微高地のひとつに位置する遺跡であるが、その立地環境から継続的な遺跡経営を実施できる場所にあるとは言い難い遺跡でもある。遺物包含層とした黒色土の遺物は、羽鮈丘陵に形成されている河岸段丘上の遺跡から流出して2次的な堆積物としての遺物として捉えることも可能な状況にある。

調査地点から500m程東側で潤井川が南流し、南側200mの地点に潤井川の支流となる清水川の水源となる大中里湧水群のひとつが位置する。また、遺跡の北側には渋川が羽鮈丘陵側から潤井川に流れ込んでいる。かつて、各湧水の水量が比較的豊富であったと言われている(富士宮市1988)ことを考慮すると、遺跡の周辺を取り囲む中小河川と湧水地の存在が浮き彫りにされる。

このような、遺跡の立地環境の中で、周辺には古墳時代前期以降の遺跡が目立った分布を示している(第48図)。そして、それらは、比較的継続性が弱い点で共通するのである。牛ヶ沢遺跡(1)の今回の調査地点より一段高い河岸段丘上の地点では、古墳時代前期の土器が数多く採集されている。また、遺跡の北側に近接して位置する石畳遺跡(3)でも古墳時代前期の土器が採



第48図 牛ヶ沢遺跡周辺遺跡分布図

500m

集されている（第49図）。この石畳遺跡や牛ヶ沢遺跡の周辺には、丘陵部の南北に長い微高地上に明善谷戸遺跡、東岳前遺跡（2）、石畳遺跡、舞台遺跡（4）、牛ヶ沢遺跡、根方遺跡（5）、大中里坂上遺跡（6）、大中里坂下遺跡（7）などが連なるような分布を示している。これらの遺跡は、その分布から潤井川および大中里湧水群に依存する遺跡群であり、

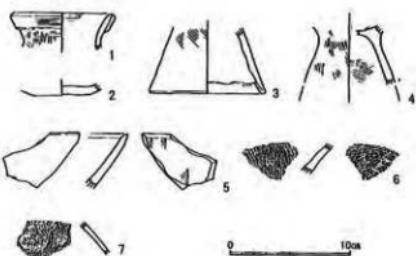
古墳時代前期の遺物の分布がやや目立つものである。発掘調査が実施されている大中里坂下遺跡では、縄文時代中期から晩期初頭までの遺物の出土が知られ、その縄文時代の繁栄を伝えているが、この遺跡においても、弥生時代後期と古墳時代前期の土器が出土している。この遺跡は、潤井川の沖積地を望む北側に傾斜する緩斜面地に位置しており、西側に閉鎖的な丘陵地形を取る他の一連の遺跡とは異なる環境にあるが、古墳時代前期の遺物分布域を形成する点では注目されるのである。その広がりはさらに南側に位置する滝戸遺跡へと続く。これらの遺跡における古墳時代前期は、その後半段階の資料が出土していることで注目されるもので、富士山西南麓において、この牛ヶ沢遺跡から滝戸遺跡と月の輪平遺跡周辺にかけての星山～羽扇丘陵において目立った分布を示す。それは、富士市域における遺跡分布を通して指摘されることで、富士山南麓の富士市増川の宮添遺跡周辺の分布と海岸の砂丘列上に集落を形成した三新田遺跡などを同時期の遺跡として取り上げられるものであるが、比較的限定された範囲における分布として共通する。この西南麓から南麓にかけての遺跡分布は、近接して水田可耕地を有する遺跡群と有しない遺跡群とに分けて捉えられるものであるが、後者の代表となる月の輪平遺跡は、雜続性の強い集落經營を行なっている。

今回の発掘調査で発見された平安時代後半の牛ヶ沢遺跡の集落跡について、関連する遺跡を周辺で見てみると、その数の極めて少ないと分かる。富士市市域では、神社に関連した浅間大社内にある浅間大社遺跡と大宮城跡において、この段階の遺跡の開始が知られるのみである。同じ潤井川流域では、富士郡衙に係る遺跡群が形成されていた東平遺跡周辺に当たる中行遺跡において若干の土器が採集されている。

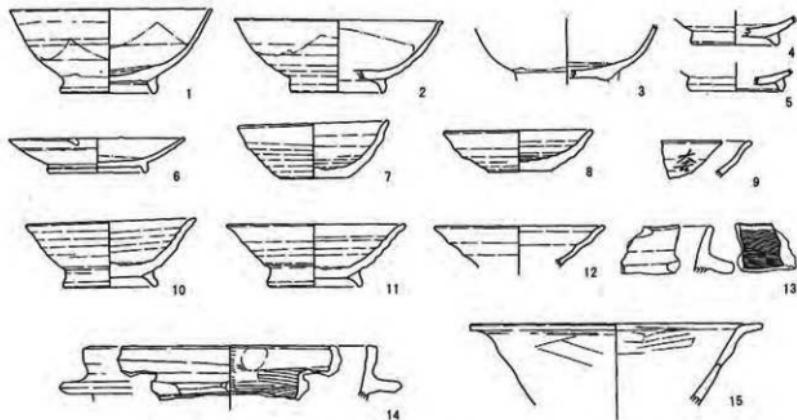
富士山南麓では、浮島ヶ原を望む丘陵部にある福宜の前遺跡において集落遺跡が調査されている（第50図）。また、同時期の土師器と灰釉陶器が横穴式石室から出土している大坂上遺跡や赫夜姫古墳（第51図）が同地区に位置している。いずれも石室の再利用の跡として捉えられるものである。

平安時代後半において、更に注目される遺跡としては、富士川河口部分に展開する富士川町の破魔射場遺跡が取り上げられる。堅穴住居や掘立柱建物などからなる10～11世紀の集落遺跡が発掘調査されており、この地域における当該期の遺跡としては集落景観が分かるもので、特筆される。

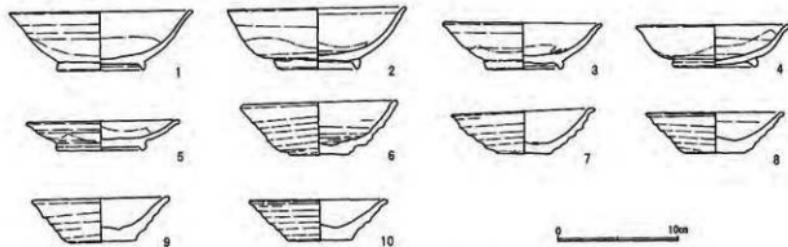
このように、平安時代後期10世紀～11世紀にかけての遺跡は、富士地区全域を対象としても、その分布は、特定の地域に限られていることが分かる。その歴史的な現象を通して牛ヶ沢遺跡の集落跡の評価を考えなくてはならないのである。



第49図 石畳遺跡採集遺物実測図



第50図 富士市祢宜ノ前遺跡第6号住居址出土遺物実測図

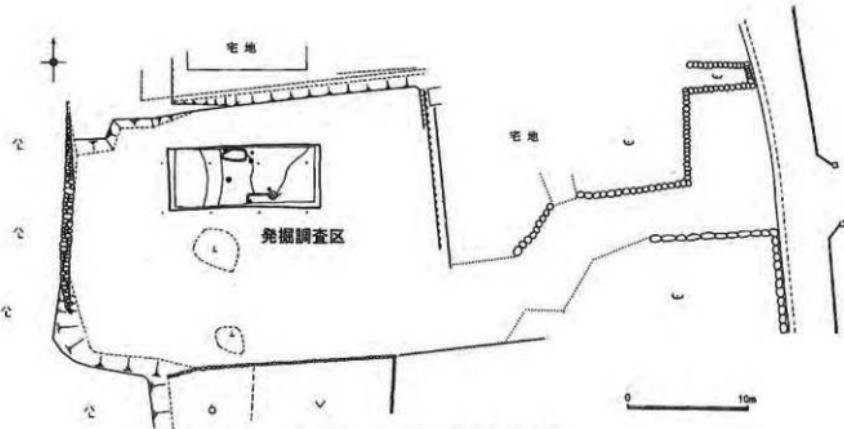


第51図 富士市赫夜姫古墳石室内出土遺物実測図

(2) 調査の概要（第52・53図）

発掘調査は、独立行政法人産業技術総合研究所による断層帯の活動履歴調査に係るトレンチ掘削に伴うもので、幅5m程の調査区に対して2006年12月4日～12月8日にかけて実施した。調査の面積は、54m²を測る（第52図）。調査対象地の周辺は、かつて宅地であり、緩やかな傾斜地を示している。現状は荒蕪地と墓地である。宅地であったことから対象地の東側は、その大半を後世の造成工事により埋め戻されており、従来の地形を示していないものである。

調査は、その埋め戻しに係る客土の除去から開始した。調査区の中央付近から確認面が西側の丘陵部にかけて大きく立ち上ることが判明したため、その西側の掘削は、できるだけ旧地形に合わせて掘り進めた。調査区は、その中央部から西側で急傾斜地となり、東側で平坦地を形成する。遺構の確認面は、土層の堆積状況により、西側で大沢ラビリ層、東側で黒色土（古墳時代遺物包含層）となる。それは、調査区が地形的な変換点に当たるためであり、それが地質環境の違

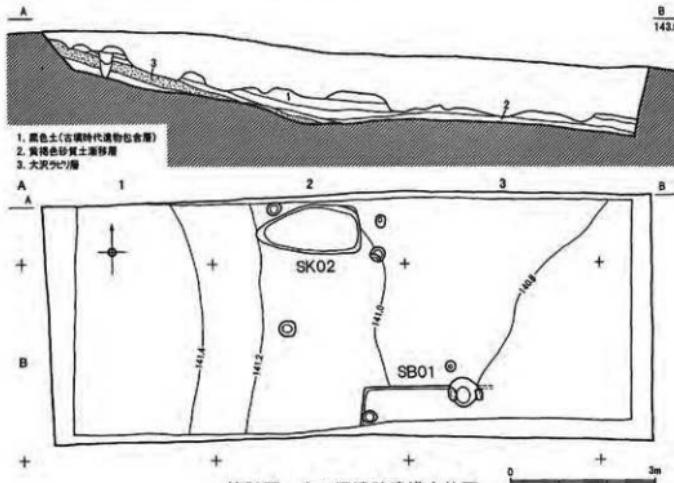


第52図 牛ヶ沢遺跡調査区周辺図

いを示すと共に、遺構の分布域も規定している。また、この部分は羽鮈丘陵裾部に展開する断層部分にも相当しており、複雑な地形環境の中で構成された遺跡であることが指摘されるのである。

このようにして発見された遺構は、竪穴住居址1軒、土坑1基、ピット5個であり、古墳時代前期の遺物包含層を掘り込んで、構築されている。発掘調査は、任意に設定した4mグリッドを基準として進め、平安時代の集落に係る竪穴住居址と土坑から取り掛かり、遺物包含層の調査を実施して終了している（第53図）。

グリッドは、小規模な調査区に対応させて、それに区画が合うように設定しているが、グリッドの軸方位は、真北を指している。グリッドは、北から南へA・B列、西から東へ1・2・3列として、それぞれの列の交差を以って名称とした。



第53図 牛ヶ沢遺跡遺構全体図

調査区で見られる土層としての層相からは、フジグロ層～大沢ラビリ層となる基盤層が丘陵側で確認され、谷側においてそれらの層の上に潤井川の作用によって黄褐色砂質層が堆積して平坦地が形跡されている様子が分かる。この中で、その堆積がほぼ全城で確認されている黒色土は、黄褐色砂質層の堆積以降にその堆積が判明している土層であり、前述のように少量ながら古墳時代前期の遺物を包含する層でもある。旧地形に沿うような堆積から、丘陵上からの流入土かと思われ、上段の遺跡に関連する遺物包含層として捉えられるものである。

(3) 遺構（第53～56図、写真図版7）

発見されている遺構は、竪穴住居址1軒、土坑1基、ピット5個である（第53図）。竪穴住居はカマド部分の一部が検出されたものであり、多くは調査区南側の区域外に広がる。ピットは径20cm～30cm、深さ15cm～45cmを測るもので、形状、規模にあまり規則性はない。それぞれ関連するような配置は示しておらず、建物等になるものではない。

S B 0 1 (第54・55図)

調査区の南壁際において発見された竪穴住居で、B-2・B-3グリッド内に位置する。発見されたのは、竪穴の北側の一部だけで、カマドが確認されている。後世の削平が進んでおり、その残存状況はそれほどよくない。特に、標高を減じる谷側に当たる竪穴の東側においてそれが顕著で、掘り込みの大半がすでに消失している。確認された竪穴住居は、その掘り込みが深さ0.28mを測り、東西方向で一辺3.6mの規模を持つものである（第54図）。竪穴住居北壁から推定すると、竪穴住居の軸方向は、N-1°-Eで、ほぼ北を向く。それは、丘陵裾部に平行するものもある。

覆土は、西側部分を中心に、一部残存しており、黒色土で構成される。その堆積はレンズ状を示すと思われるもので、自然堆積の様相を示す。

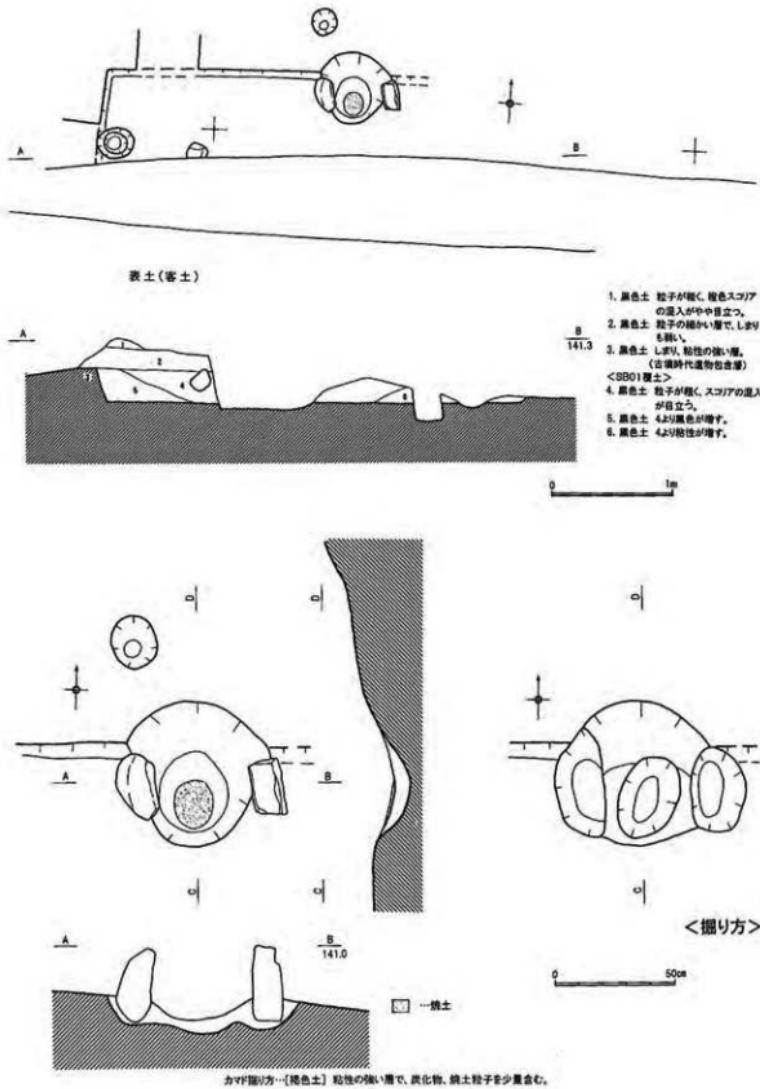
床面は、顕著な掘り方が見られないもので、黄褐色砂質土を直に床面としている。

床面において竪穴住居に付属する施設等は、カマドを除いて明らかではないが、西壁際にピットが1個発見されている。径0.3m、深さ0.37mを測るものであるが、具体的な用途については分からぬ。また、竪穴の外側、屋外のカマド北西側においてピットが1個確認されている。径0.21m、深さ0.14mの小さなものであるが、焼土の混入が覆土中に認められ、カマドとの関連が想定されるものである。但し、その年代については、よく分からぬ部分が多く、近年の削平に際してカマド部分の破壊とピット状の掘削としてその跡が残ったものであると捉えることもできる。

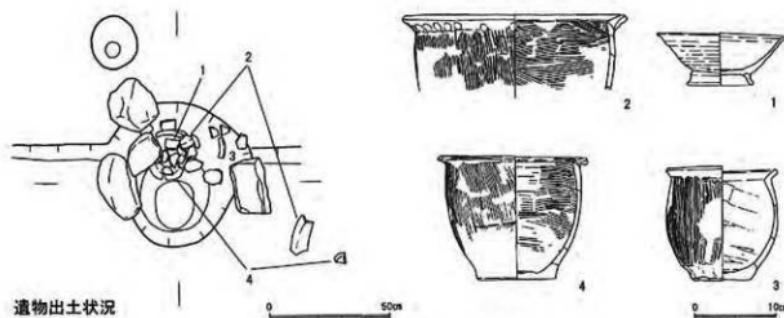
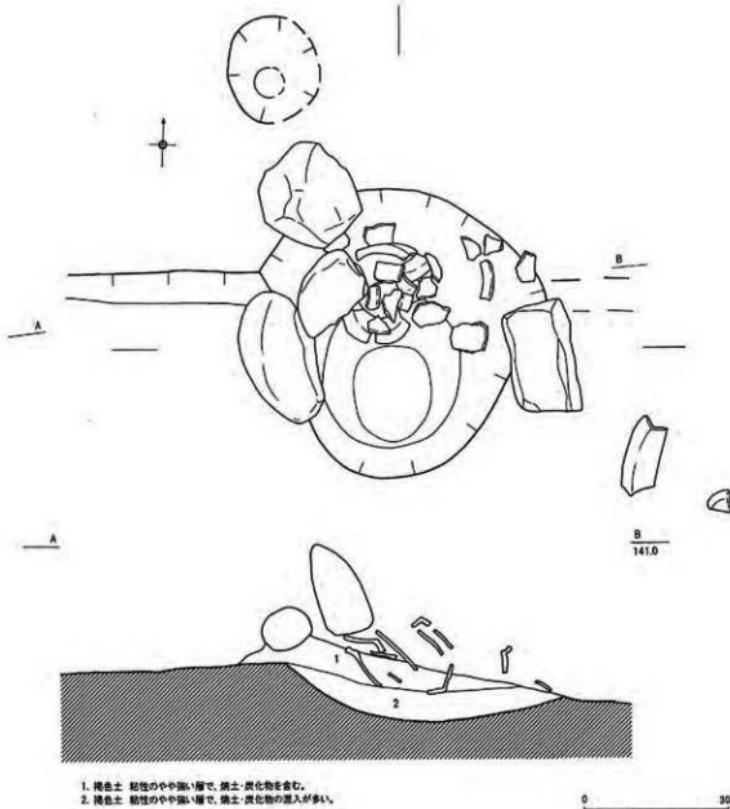
カマドは、北壁のほぼ中央部に位置すると思われるもので、17cmほど屋外に張り出させて構築している（第55図）。径0.7m程の規模を示し、袖部と燃焼部と思われる焼土の分布が確認されている。天井部や煙道部などははっきりと残っていない。粘土により構築されたものであると思われるが、純粹な白色粘土は確認していない。カマド内は、粘性の強い褐色土に覆われており、構築材のひとつとして捉えられるものである。

燃焼部は、床面から約0.1m掘り込まれ、皿状の土坑を示す。それに伴う焼土は径0.2m、厚さ1.5cmの範囲に広がる。

袖部として認識されるのは、床面に設置された玄武岩の地山の礫に掘り、両袖とも原位置で発見されている。礫は、長さ30cm、幅13cmほどを測る角礫で、幅50cmの間隔で袖石としている。本来、この袖石を芯として、粘土等でそれを覆って袖部とするが、関連するものは明瞭な出土を示していない。袖部・天井部・掛け口等各部位における構築材は、カマドに対する意図的な破壊



第54図 牛ヶ沢遺跡SB01実測図



第55図 牛ヶ沢遺跡SBO 1カマド実測図

行為を経ても、それほど堅固な用材ではなかったため、住居廃絶後に流失してしまったのではないかと考えられるのである。

カマドの掘り方は、各袖石に係るピットと燃焼部の橢円状の土坑として確認されている。袖石に伴うピットは、西側が幅0.21m、長さ0.45m、深さ0.11mを測り、東側が幅0.23m、長さ0.35m、深さ0.11mを測る。両者との床面からの掘り込みの深さは同程度あり、袖石を10cmほど埋め込んで固定し、20cmを床上に露呈させてカマドを構築している様子が知られる。その他は、径0.4mの土坑として深さ約5cmを掘り込んでいる。

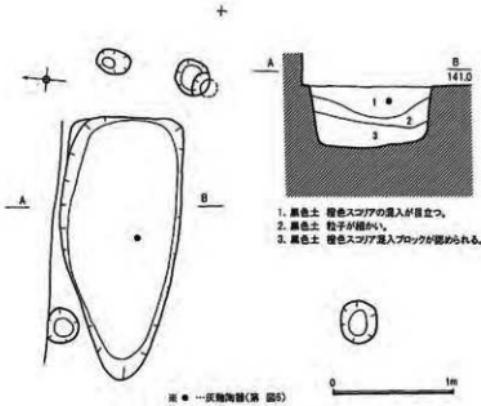
今回の調査における遺物は、このカマドに係るものがその大半を占めている。個別の遺物解説は後述するが、その出土状況をここで紹介する（第56図）。

カマドの煙道と掛け口の間で壺類を主体とした土器の出土が見られる。出土地点周辺の土層からも推測されるように、それらの土器は原位置を示しているものではないことが分かる。そのため、土器の周りには、後出の大型礫が点在している様子が知られる。No.4の壺は、カマドに関連したと思われるものである。煮沸の痕跡が残る。掛け口に添えられていたものであろう。燃焼部と掛け口の関係から想定すると、竪穴の埋没等の伴い北壁側に少し押し出されてものと考えられる。

カマドに直接関連しない壺類であるNo.1は、住居廃絶以降の混入であろう。また、同時に、煤などの付着の乏しいNo.2とNo.3も同様の出土状態であると言える。ただし、その出土がNo.4と混在している様子から、住居の構築時と廃絶時の違いを最大として、大きな時期差はないものとして捉えている。

SKO2（第56図）

地形に対し直交して築かれた無花果型の形状を示す土坑であり、長さ2.15m、最大幅1.0mの規模を測る。中央やや北よりの場所で最深部を示し、深さ0.5mを測る（第56図）。形状は、標高に合わせて南側に向かってその幅を減じ、深さも浅くする。土坑の中央付近から北側は、幅1.0mほどで均等な値を示すもので、方形を指向している。中央部から北壁にかけての底面はほぼ平坦であるのに対して、南側は地形に沿ってその底面も徐々に傾斜する。底面における比高差は、41.3cmを測る。SKO2の位置する場所は、丁度、地形、地質の変換点であると共に、断層の直上に位置している。そのため、その底面は北側が砂質層であり、南側は暗褐色土層となる。更に、砂質層をその基盤とする部分については、断層の影響を受け不安定な底面を形成する。現状では、断層に



第56図 牛ヶ沢遺跡SKO2実測図

沿うように底面における陥没が確認されている。

S K O 2 に伴う覆土は、3層に分けられる。最下層（第3層）は、明らかな人為的埋め戻しによるもので、黒色土がブロック状となって含まれている。上層の第2層についても黒色土で構成され、平面的な堆積を示すことから同様のものと捉えられる。第1層は、橙色スコリアの混入の目立つ黒色土で土坑全体を覆う。

この土坑の具体的な用途については、よく分からぬが、第1層中から出土している灰釉陶器（No.6）の年代から平安時代のものであることと、前述のS B O 1 とは年代が異なることが指摘される。

S K O 2 周辺でピットが4個発見されているが、それぞれ規則性が無く、形状の類似性も乏しいもので、相互の関連は極めて薄いものと考えられる。

(4) 遺物（第57・58図、写真図版8）

発掘調査で発見されている遺物は、土器、陶磁器である（第57図）。S B O 1 から出土している遺物は、カマド部分からの出土品を中心とした良好な一括資料としての捉えることができるものである。

S B O 1（第57・58図）

1～5は、S B O 1 出土の土器類である。1～4がカマド周辺で発見されたものである（第55図）。1は高台付の壺で壺部と高台部の一部を欠損するものの全体の形態が分かるものである。欠損部分が意図的に欠いているのかどうか、判断し難い状況にある。その破断面の摩滅が比較的目立つものとなっている。特に口縁部においては、その体部に対して弧状に欠損している部分が認められ、意図的に打ち欠きの痕ではないかと思われる状態にある（第58図）。その部分の破断面は明らかに他の割れ口より摩滅が進行しており、破損した段階の違いをよく表している。但し、破断面自体の整形がそれほど丁寧ではない点から、その部分が用途を転用しているなど、直接、容器の機能を反映しているとは判断し難いものである。2～4は、甲斐型の壺で、胎土に石英と雲母の混入が目立つ。2は口縁部の肥厚が頗る長胴壺の胴部上半～口縁部破片で、胴部内外面をハケ整形で仕上げている。外面の一部に煤の付着が見られる。3は口縁端部内面を肥厚させている小型壺で、胴部内面をナデ整形する。4は、頸部の屈折が明瞭な小型壺で、底部の一部を欠損するものの、ほぼ全体の形態が分かるものである。外面の胴部上半に煤の付着が目立つ。カマドに直接関連した壺ではないかと考えられる。

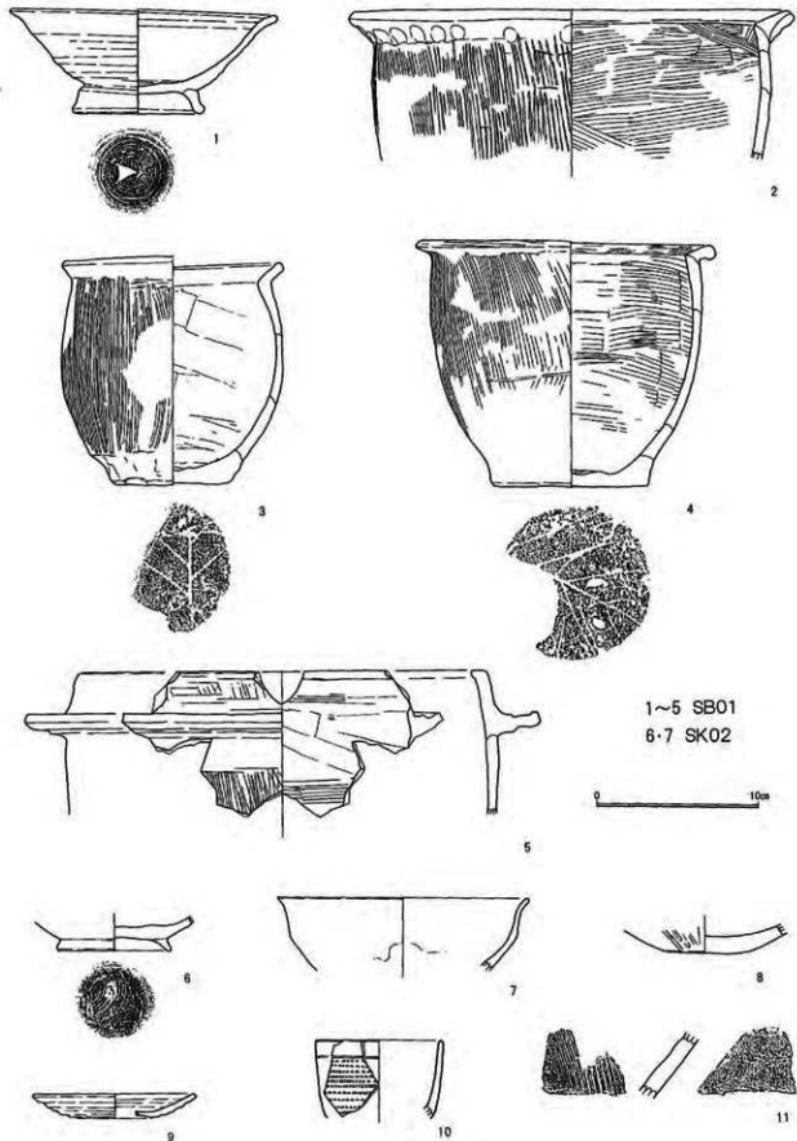
5はS B O 1 の覆土中からの出土した羽釜の口縁部破片で、甲斐型壺の一形式である。口縁部付近の破片資料で、全体の形は分からないが、胴部は内外面共ハケメ整形で仕上げられている。口縁部はやや内傾し、その端部を面取りする。鋤は明瞭にヨコナデが施されほぼ水平に付されている。外面に煤が付着する。

S K O 2（第57図）

灰釉陶器が2点出土している。6は遺構の覆土上層から出土している高台部破片で底部に糸引き痕を残す。高台は短く外方に開き、その端部を尖り気味に丸くする。7は壺部の小破片で灰釉が内外面に施されている。壺部の中位に弱い稜を有するものである。

8～11は、遺構以外の遺物包含層および表土中からの出土である。8は、壺の底部破片で、塔あるいは直口壺などが想定されるものである。胎土はきめが粗く、特徴的に石英と火山灰と考えられる白色砂粒を含む。

9～11は表土中から出土した近世の陶磁器である。9は瀬戸・美濃産の陶磁器で灯明皿となる。



第57図 牛ヶ沢遺跡出土遺物実測図

内面に重ね焼きの痕跡を残す。10、11も同様に瀬戸・美濃産で、10がヨロイ茶碗、11は擂鉢の破片である。3例とも18世紀後半以降の製品で、9が18世紀末～19世紀、10が18世紀後半のものと思われる。

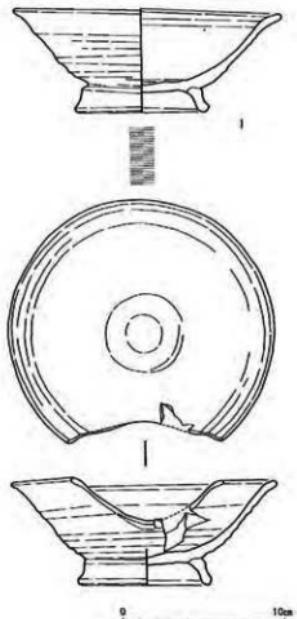
(5) 年代

出土遺物から判断される年代としては、高台付の壺と甲斐型の甕との共判が知られるSB01の一括資料が注目される。甕類は甕、小型甕、羽釜から構成されるものである。甕は口縁部を外側に肥厚させ末広口縁型と称されるもので、甲斐型土器編年XIII期（山梨県考古学協会1992）以降の製品である。小型甕は2型式の存在が知られるが、その出土状況から時期差としても捉えられるものもある。器高に比べて口縁の幅が短い4は、平坦面を形成する口縁内面の状況が甕（2）とよく似ているが口縁部は肥厚させていない。胴部中位に最大径を持つ小型甕（3）は、頸部の屈折が緩やかで口縁端部を肥厚させる点や煮沸の痕跡が不明瞭な事など他の甕とは異質な甕である。但し、3と4は胴部上半の器厚が頸部に向かって増やしている点ではよく似ている。羽釜はXII期以降に登場する形式である。鋤の形状や内外面のハケ調整、胎土が甲斐型甕特有の雲母や石英を含む点などからXIII期には5のような型式は消失しているようである。以上のように甕類は、すべて甲斐型のもので占められて、甲斐型土器編年のXIII期～XIV期に収まるもので構成されていることが分かる。そして、小型甕の口縁部の肥厚がまだ弱い点を評価すると、その年代の中心はXIII期にあるものと思われる。

これらの土器群の中に1の高台付の壺が含まれる。土師器における付け高台を付すものは、灰釉陶器の模倣品として成立したものと考えられるが、丁度、8世紀以来の地域型壺類の消滅時期にも呼応して登場する。高台付壺は、底部回転糸引き後無調整の壺類が大半を占める器種構成の中で一定量を占めるものもある。登場時期は、駿河～伊豆の土器編年に即してみれば、その第VI期（池谷1995）となる。

以上の事象を総合すると、SB01から出土している土器群は10世紀第2四半期の年代が与えられるものである。灰釉陶器による年代では、折戸53号窯式期に相当する。

この一括資料に対して、村山浅間神社遺跡竪穴住居1出土土器は、壺類以外、類似した形式（型式）組成を示すことが指摘される。村山浅間神社遺跡出土の土器も甲斐型土器編年第XIII期として捉え、10世紀前半の年代が考えられている（富士宮市教育委員会2005）。両者の形式組成の中で、大きな違いは、壺類の構成であり、甲斐型の壺で占められる村山浅間神社遺跡例と高台付壺の出土を見ている牛ヶ沢遺跡SB01例との違いである。それは、第50図に載せた富士市福宜ノ前遺跡第6号住居址における一括資料からその違いが更に鮮明となる。



第58図 牛ヶ沢遺跡SB01
出土高台付壺（No.1）実測図

祢宜ノ前遺跡第6号住居址は、黒塙90号窯式期～折戸53窯式期前半代の灰釉陶器と回転糸きり無調整の坏、高台付坏の共伴が知られる一括資料である。この中に甲斐型の羽釜が含まれている。この羽釜は、甲斐型土器編年XI～XIII期のものとして捉えられるものである。この第6号住居址出土の灰釉陶器の年代観から考えると、村山浅間神社遺跡竪穴住居1との大きな時間的な違いは認められない。

富士地区における9世紀後半から10世紀前半の土器編年は、富士宮市泉遺跡第1号住居址、富士市岩倉B遺跡S B 1→村山浅間神社遺跡竪穴住居1、泉遺跡第3号住居址、富士市祢宜ノ前遺跡第6号住居址、富士市岩倉B遺跡S B 2→牛ヶ沢遺跡S B 0 1、富士市赫夜姫古墳、富士市中桁遺跡第13号住居跡、同遺物集中地点への段階的な変化が想定される。その中で、村山浅間神社遺跡竪穴住居1と祢宜ノ前遺跡第6号住居址との型式組成に表れるように、坏類の大きな変換期がそこに認められるのである。それは前段階からの在地的な様相を継承する村山浅間神社例と新たな様式を導入した祢宜ノ前例との違いとして評価されるものである（註1）。それが遺跡の性格による違いとして反映されるものなのは、今後の課題であるが、祢宜ノ前遺跡例を初源として、高台付坏は祢宜ノ前遺跡→牛ヶ沢遺跡S B 0 1へと型式変化する。

S K 0 2出土の灰釉陶器は、東山72号窯式期段階のものであろう。S B 0 1より後出のものである。2つの遺構は共存しない。

註

1. 伊豆の土器編年においては、その第VI期を2系統の坏類の共伴段階としている（池谷1995）。第VI期は、灰釉陶器が折戸53号窯式期を主体として黒塙90号窯式期から東山72号窯式期の一部を含む段階のものであり、やや時間的な幅を持たせているが、三島市桶田5号住居址例などで良好な一括資料が知られ、具体的な型式組成として提示されている。

<引用参考文献>

池谷初恵1995「第3節 伊豆国における奈良平安時代の土器様相」『大場川遺跡群』三島市教育委員会

富士宮市1988『富士宮市の自然』

富士宮市教育委員会2005『村山浅間神社調査報告書－遺跡範囲確認調査編－』

山梨県考古学協会1992『甲斐型土器－その編年と年代－』

第15表 牛ヶ沢遺跡出土土器観察表

No.	出土地点	器種器形	口径 器高 底径	特色	調整など	備考
1	SBO1	坪	16.5 6.4 8.2	胎土 きめが細かく、白色砂粒、白色砂粒を含む 焼成 やや軟質 色調 黄褐色	ロクロ成形 付け高台 外面 高台部 ヨコナゲ 底部糸引き未調整 内面 表面磨耗	ほぼ完存 口縁部意図的に欠損？注口
2	SBO1	裏	(27.7)	胎土 きめが粗く、石英、基母の混入が多い 焼成 やや軟質 色調 (外)に赤褐色 (内)灰褐色	口縁部 ヨコナゲ、外面ヨビナゲ 外面 クサハケメ(4本/cm→5本/cm) 内面 ヨコハケメ(5本/cm)	口縁部1/3存
3	SBO1	裏	13.7 14.0 7.5	胎土 きめが粗く、石英、雲母の混入が多い 焼成 普通 色調 に赤褐色	口縁部 ヨコナゲ 底部 木葉底 外面 クサハケメ(4本/cm) 内面 扇ナゲ 腹部ヨビナゲ	1/3存
4	SBO1	裏	18.0 15.0 9.8	胎土 きめが粗く、石英、雲母の混入が多い 焼成 やや軟質 色調 (外)灰褐色 (内)に赤褐色	口縁部 ヨコナゲ 底部 木葉底 外面 クサハケメ(4本/cm) 内面 ヨコハケメ 底部ヨビナゲ	ほぼ完存 外面螺付着
5	SBO1	羽釜	(25.4)	胎土 きめが粗く、石英の混入が目立つ 焼成 普通 色調 に赤褐色	口縁部 外面ヨコナゲ、内面板ナゲ 外面 クサハケメ(4本/cm→6本/cm) 内面 ヨコハケメ 羽釜 ヨコナゲ	小破片 羽釜(32.0) 羽釜ヨコナゲ
6	SK02	碗	(15.5)	胎土 きめが細かく、白色砂粒を含む 焼成 硬質 色調 灰白色	ロクロ成形 輪ぬけ掘れ？	小破片 灰釉陶器
7	SK02	碗	7.0	胎土 粒度で白色砂粒を含む 焼成 硬質 色調 灰色	ロクロ底形 付け高台 外面 高台部ヨコナゲ 底部糸引き未調整 内面 重ね焼き底	底部金剛 灰釉陶器
8	包含層	表？	(5.0)	胎土 粒子が粗く、石英、白色砂粒が多い 焼成 普通 色調 (外)に赤褐色 (内)に赤褐色	外面 クミガキ 底部ナゲ 内面 表面剥離、ハケメが残る	底部破片 破断面摩滅
9	表土	裏	(10.1) (1.5) (4.7)	胎土 粒度で白色砂粒を含む 焼成 硬質 色調 に赤褐色		灯明瓦 瀬戸・美濃產 18世紀末～19世紀初
10	表土	碗	(7.9)	胎土 ややきめが粗く、石英を含む 焼成 硬質 色調 淡黄色・黒褐色	外面 連続斜突文	瀬戸・茶碗 瀬戸・美濃產 18世紀後半
11	表土	鉢		胎土 石英、白色砂粒、赤色砂粒を含む 焼成 硬質 色調 に赤褐色	内面 刻み目(条線)	無記 瀬戸・美濃產 近世

7 浅間大社遺跡

(確認調査)

所在地 富士宮市宮町1番1号
調査原因 消火栓貯水槽埋設及び参拝者駐車場の整地
調査期間 平成15年11月12日～27日
調査面積 60.5m²
調査主体 富士宮市教育委員会教育長 大森衛
発掘担当者 富士宮市教育委員会学芸員 渡井英誉

(第VI次調査)

所在地 富士宮市宮町1番1号
調査原因 静岡県指定有形文化財富士山本宮浅間大社社殿防災施設工事
調査期間 平成17年8月1日～9月30日
調査面積 343m²
調査主体 富士宮市教育委員会教育長 大森衛
発掘担当者 富士宮市教育委員会学芸員 渡井英誉

(第VII次調査)

所在地 富士宮市宮町1番1号
調査原因 祈祷者昇降口建設
調査期間 平成19年8月27日～9月12日
調査面積 21m²
調査主体 富士宮市教育委員会教育長 佐野敬祥
発掘担当者 富士宮市教育委員会学芸員 渡井英誉

(1) 遺跡の位置と環境 (第59図～第61図)

浅間大社遺跡は、富士山南西麓の標高約120m付近に位置し、浅間大社の境内地を遺跡範囲としている(第59図)。浅間神社遺跡周辺の地質は、新富士火山の火山麓扇状地と潤井川の谷底平野・氾濫原とが接する付近となっている。浅間大社境内の東端には、富士山の湧水地である湧玉池(国指定特別天然記念物)があり、富士山溶岩流から水が湧き出て湧玉池となり、神田川となって潤井川に注ぎ込んでいる(第60図)。湧玉池の他にも、浅間大社周辺の市街地には湧水地が点在し、大岩・小泉地区と同じく湧水地の数の多い地区である。

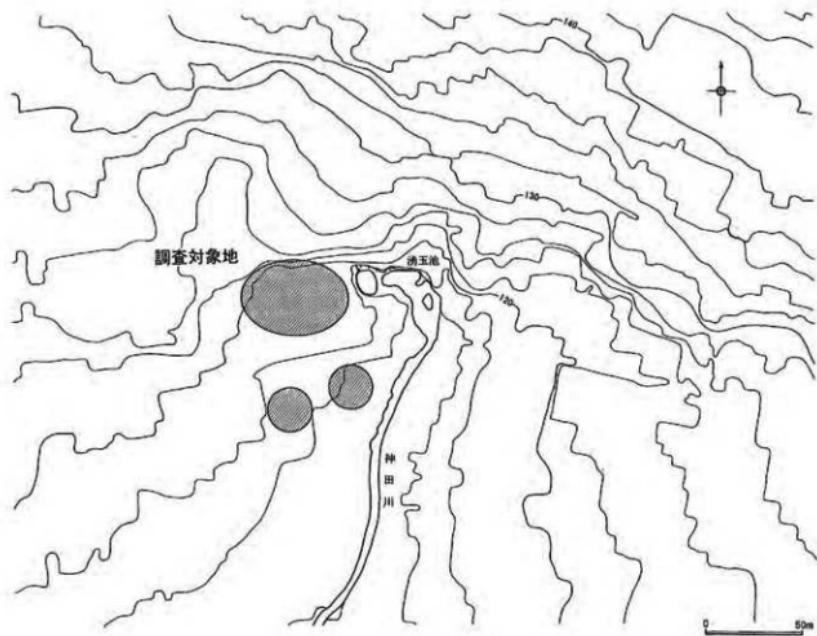
浅間大社境内地は市街地の中心にあり、東隣には近接して、浅間大社の大宮司であった富士氏の居館跡である大宮城跡(8)がある(第61図)。大宮城跡は、これまでの調査により古代末期から戦国時代末期にいたるまでの建物跡や構・戦国時代の堀等が、多量の貿易陶磁器や国産陶磁器・建築材などと共に発見され、富士山信仰の中心地である浅間大社遺跡(1)と共に、古代末から中世にかけての富士宮の歴史を紐解く上で重要な遺跡である。大宮城跡と浅



第59図 浅間大社遺跡調査区位置図(1)

間大社遺跡は、神田川対岸の微高地上に位置し、中世の大宮市はこの南面で行われ、富士山登頂を目指す富士行者達を迎えて発展した。

浅間大社は、社伝によると、大同元年(806)に坂上田村麿が山宮から大宮に遷したことによる。山宮の地とは、現在富士宮市山宮に鎮座する山宮浅間神社を指すと考えられ、大宮とは、現在の浅間大社周辺と考えられている(宮地他1928)。かつて両神社は、「山宮」と「里宮」として春と秋に神靈を送り迎えする「山鉢巡幸」が行われるという関係にあった。山宮浅間神社は浅間大社から直線距離で約2.7km離れている。現在も社殿ではなく、溶岩流の末端である丘陵上に磐座を設けるのみで古い形態の信仰の様子をとどめていると言われるが、これまで調査は行われておらず、詳細は不明となっている。

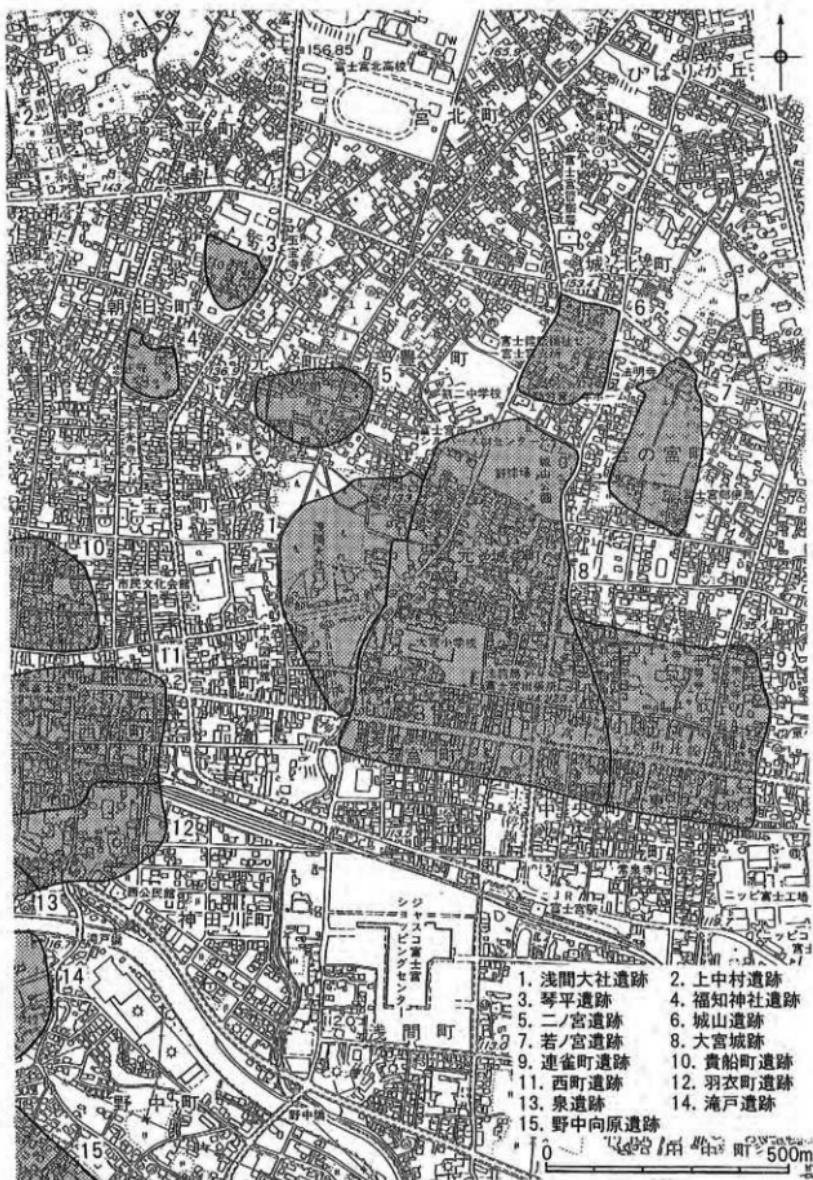


第60図 浅間大社遺跡周辺地形図

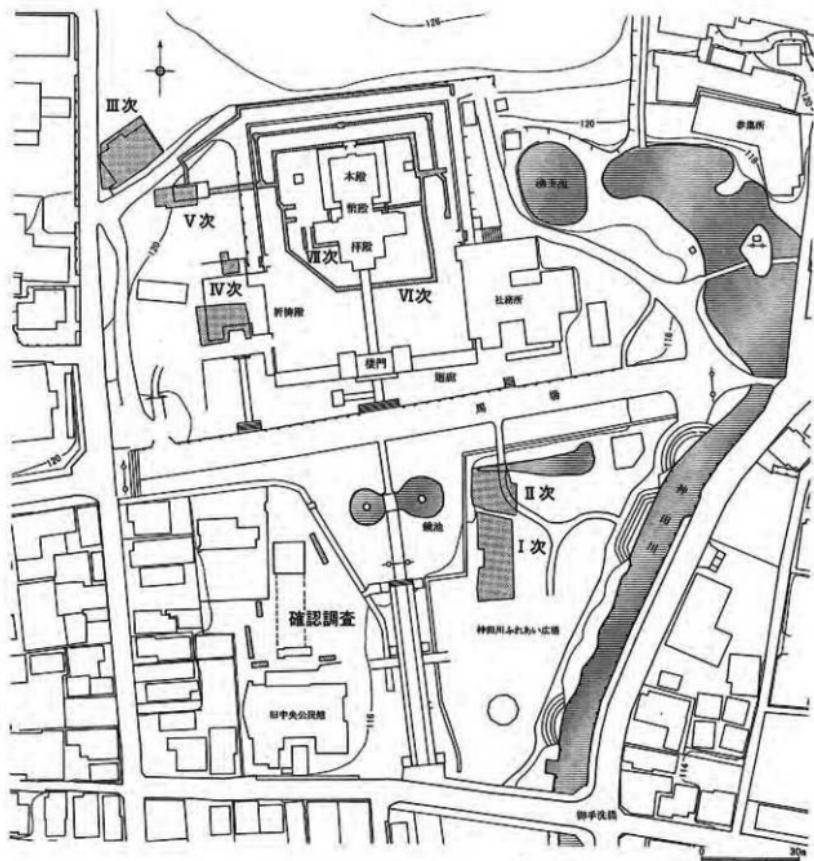
(2) 調査の概要（第62図）

浅間大社遺跡に対しては、これまで8回の調査が行われている（第62図）。第Ⅰ次・第Ⅱ次調査では、西を参道と東を神田川とに挟まれた低地に中世から近世にかけて使用されたと考えられる溝が発見された。第Ⅲ次調査では、境内地西端の傾斜変換点付近で竪穴住居跡、すぐ南の第Ⅳ次調査地点では、掘立柱建物が確認され、12世紀前半～13世紀の年代があたえられている。第Ⅴ次調査地点は、第Ⅲ次調査地点と第Ⅳ次調査地点との間にあたり、土坑群と集石が発見され、12世紀後半～13世紀の年代が与えられている。大宮城跡では、貿易陶磁器をはじめ、国産陶磁器や石臼などといった12世紀から16世紀にかけての生活什器が多量に出土しており、かわらけを主として出土する浅間大社とは遺物の種類に偏りがある。

本報告は、平成15年度に行われた確認調査地点と、平成17年度に行われた第VI次調査地点、平成19年度に行われた第VII次調査地点である。確認調査は、A区（消火栓貯水槽埋設）とB区（参拝者駐車場設備）とで行われたが、後にA区は第V次調査区となり、本報告は、B区調査地点である（以下確認調査地点）。確認調査地点は、北を馬場と東を参道に挟まれた箇所で、旧宮司社宅と旧中央公民館の間は微高地となっている。第VI次調査地点と第VII次調査地点は、確認調査地点と馬場を挟んで北側のさらに微高地となる本殿を取り囲む回廊内である。確認調査と第VII次調査はトレンチ調査で行われ、第VI次調査では、工事に伴う立会い調査によつ



第61図 浅間大社周辺遺跡分布図



第62図 浅間大社遺跡調査区位置図(2)

て行われた。なお、確認調査地点については、参拝者用駐車場建設の際、遺構確認面まで削平が及ばないと判断されたため、遺構の平面的な調査にとどめている。

(3) 遺構

A 確認調査（第63図～第66図）

調査は、調査対象地に対して任意にトレンチを設定して行った（第63図）。遺構は、1トレンチ（1Tr）～3トレンチ（3Tr）で発見され、4トレンチ（4Tr）と5トレンチ（5Tr）では確認されなかった（第64図）。4トレンチでは、表土下に赤褐色粘質土を検出した。この粘質土からは常時水が染み出ており、神田川に向かっての低湿地にあると考えられた。

5トレンチでは地山を検出したのみであった。

なお、図に示す標高値はすべて同じである。

SKO 1 (第64・65図)

SKO 1は、2トレンチ南側で発見された。東側の一部のみ検出された状況で、トレンチ外の西側にも広がると考えられる。検出された範囲では、長軸1.6m、短軸0.42mの土坑に人頭大以上の石が詰められており、中には拳大の石も見られた。石は、土坑の内側に向かって並べられていたようであった(第65図)。前述のように、平面的調査にとどめたため、遺構の深さなどは不明である。遺構は、かわらけなどを含む4層(第64図)に覆われていた。

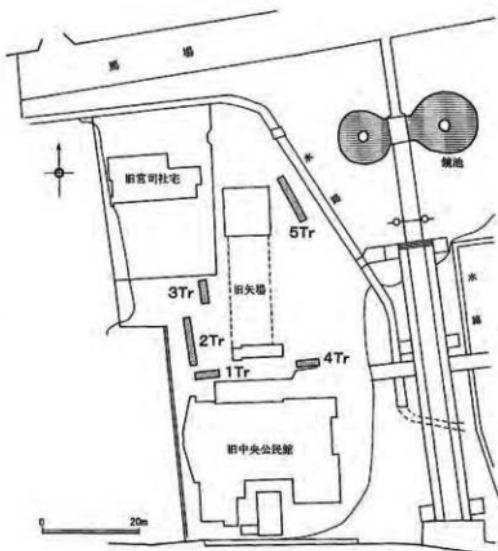
SKO 2 (第64・65図)

SKO 2は、3トレンチの中ほどに発見された。土坑範囲は東側にも広がると考えられる。規模は、長軸0.97m、短軸0.84mである。SKO 2周辺には、ピットらしき落ち込みも確認されている。トレンチ3は、遺構確認面までの厚さが1トレンチや2トレンチにくらべ薄くなってしまい、標高値的にみるとSKO 2を覆う2層とトレンチ2で確認された3層とが同一層である可能性がある(第64・65図)。そのため、出土遺物はなく、詳細は不明だが、後述するSXO 2と同時期の可能性がある。

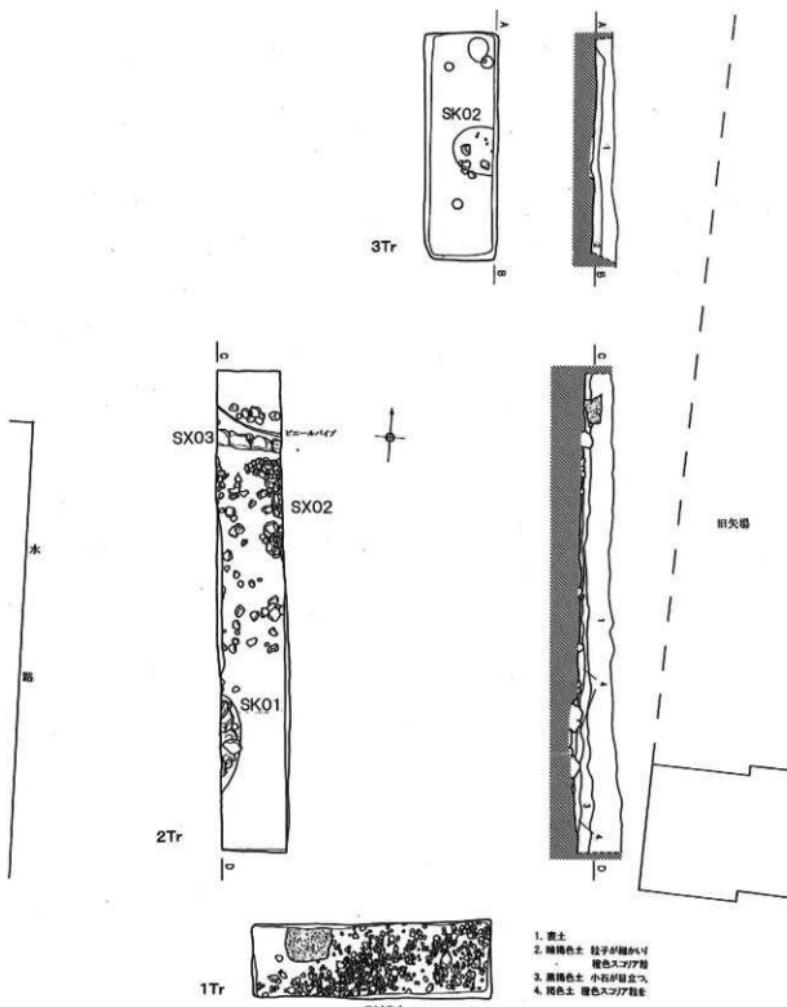
SXO 1 (第64・66図)

SXO 1は、1トレンチで発見された石敷遺構である。調査当時は地山の石とも考えられたが、トレンチ北西隅に砾の空白が見られることや、遺物が多く挟まっていることなどから、遺構として捉えた。この石敷遺構は、径2・3cmから拳大の溶岩砾を主体とする砾の分布で、幅約1.3mで北東—南西方向に広がっていた(第64・65図)。中には扁平な砾や人頭大の砾も見られた。砾の間には、かわらけや中世国産陶磁器なども含まれており、この遺構が概期の遺構であると考えられた。

この遺構は、かわらけなどの遺物包含層に覆われて発見されたので、前述のSKO 1と同時期の可能性が窺える。この遺構もまた、平面的調査にとどめたため、遺構の掘り込みなどは不明であるが、砾は地山である茶褐色粘質土に直接乗っているように見えた。



第63図 浅間大社遺跡確認調査トレンチ設定図



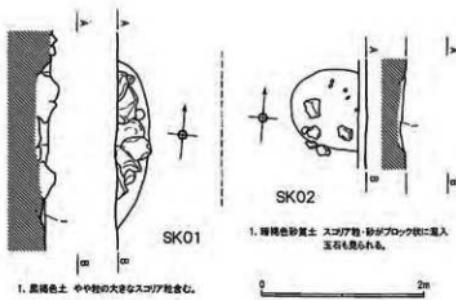
第64図 浅間大社遺跡確認調査全体図

S X 0 2 (第64・66図)

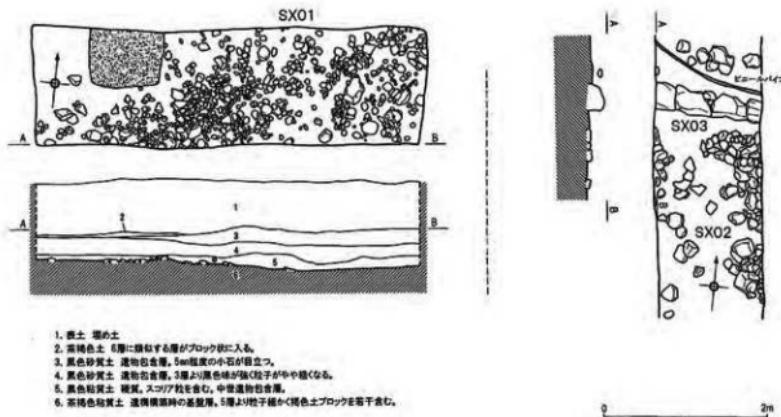
S X 0 2 は、2トレンチの北側に発見された集石である。柱大程度の溶岩礫を主体とする集石で、中には人頭大のものも含まれる。石列である後述する S X 0 3 によって切られている。礫は、平面的ではなく上下に積み重なっており、トレンチの東側に厚く、西側ではまばらとなる。南側の S K 0 1 の方へも点在する。遺物はなく、時期は不明だが、中世の遺物包含層ではない3層に覆われており、また S X 0 3 に切られていることからすると、S K 0 1 と同時期かもしくはそれよりやや新しい時期の遺構である可能性もある（第64・65図）。

S X 0 3 (第64・66図)

S X 0 3 は、2トレンチの北側に東西方向に伸びる石列である。トレンチの東西にもさらに伸びている。溶岩礫を切石としており、一つの石の大きさは、長さ約45cm、幅約30cmで、厚さは地上に出ていている部分で約21cmである。石列の面は南方向にそろえられており、南面を意識している様子がわかる。S X 0 2 を切っている。S X 0 3 の北側に通



第65図 浅間大社遺跡確認調査SK01・02実測図



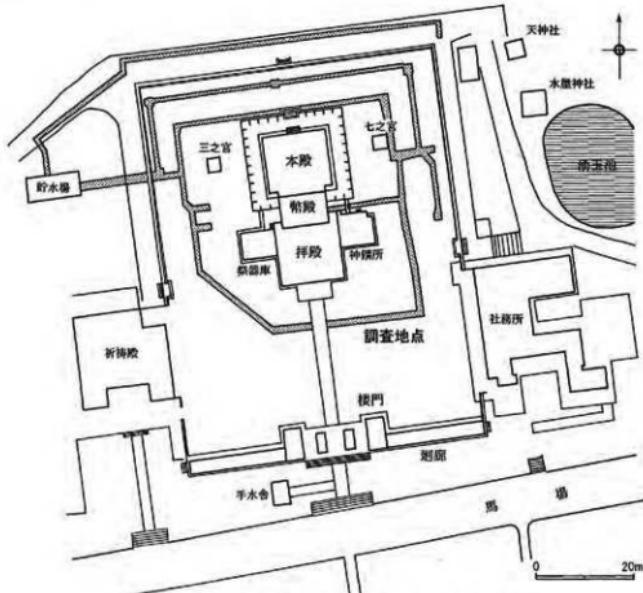
第66図 浅間大社遺跡確認調査SX01～03実測図

る現代のビニールパイプは、このSX03沿いに東西に伸びているようであった（第64・65図）。遺物の出土はなく、時期は不明だが、中世の遺物包含層でない3層を切って構築されており、SK01・SX01・SX02よりも時期は新しいと考えられる。礎の様子も他の遺構のものより黒色が強く、異質な印象を受けた。

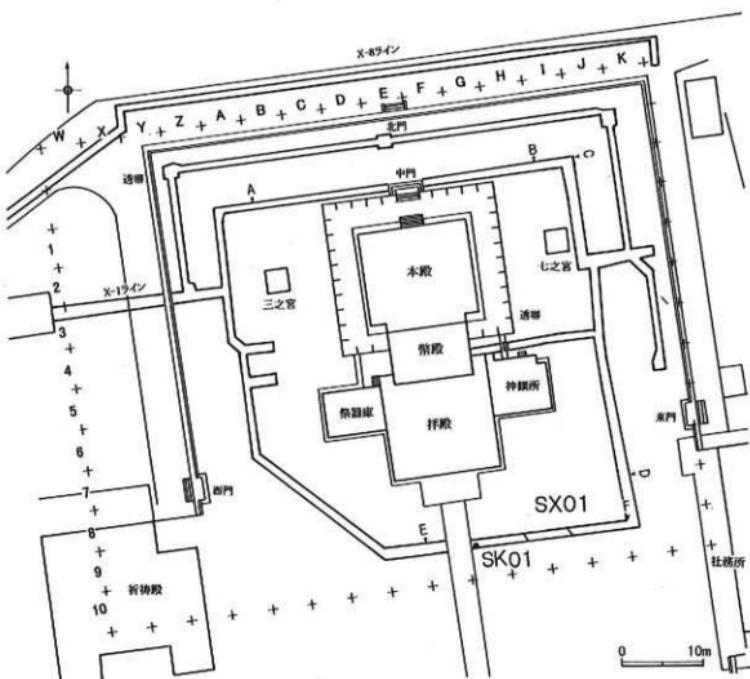
B 第VI次調査（第67図～第70図）

第VI次調査は、国指定重要文化財及び県指定有形文化財となっている浅間大社本殿・拝殿・幣殿の防災設備設置工事に伴って行われた。そのため、調査地点は、社殿を取り囲むように消火設備などが埋設された箇所となっている（第67図）。調査は立会い調査で行われたため、調査対象地に対して任意で簡易の5mグリッドを設けることによりグリッドごとに遺物を取り上げ、土層の調査をすることでその層位関係をおさえた（第68図・第69図）。グリッド番号は、各グリッドの図上左上の交点をあてた。

第69図は、各グリッドの土層柱状図である。高さは幅の2倍に強調してある。作図箇所は各グリッドの開始点から幅1mとした。本殿北側のB-1からH-1グリッドまでは、表土下に地山（VI層）となる黄褐色砂質土層が確認されたのみで、遺物包含層は確認されなかった。同じ様相は、A-1からA-5グリッド付近まで続いている。I-1グリッドから南側とA-6グリッドから東側にかけては、遺物包含層となる褐色砂質土層（II層）が確認された。遺物はほとんどがかわらけ片である。社殿正面のE-10グリッドから東側へJ-9グリッドでは、II層の下に遺物が増加するIII層が見られるようになり、さらにE-10・J-9グリッド



第67図 浅間大社遺跡第VI次調査調査区位置図



第68図 浅間大社遺跡第VI次調査遺構分布図

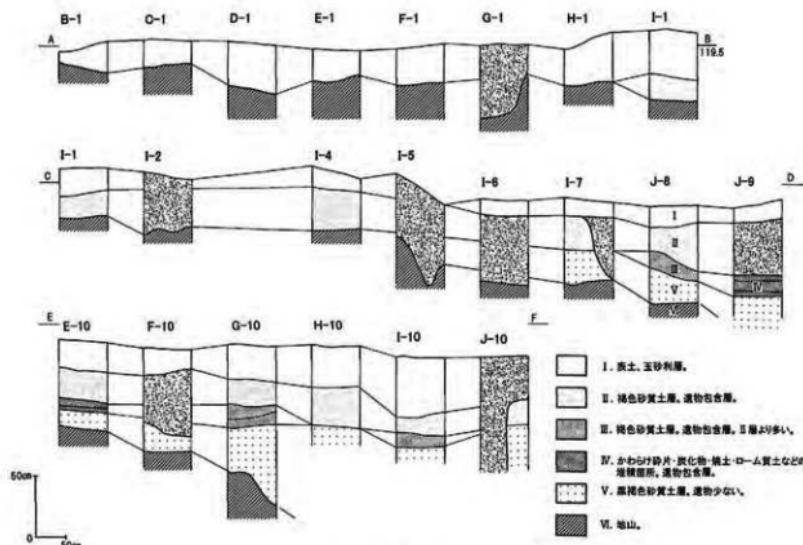
ではかわらけ碎片・炭化物・焼土・ローム質土からなる硬化面(IV層)が確認された。このIII層・IV層は、ほぼ水平に堆積しており整地層の可能性がある。そのため、浅間大社本殿・幣殿は、山側の北西部分を地山まで削平し作り出した平坦面の上に建立され、拝殿から南側は、地山層の上にかわらけ片を含む砂質土を整地層とする平坦面の上に建立されている可能性があると考えられる。

SK01 (第70図・写真図版8)

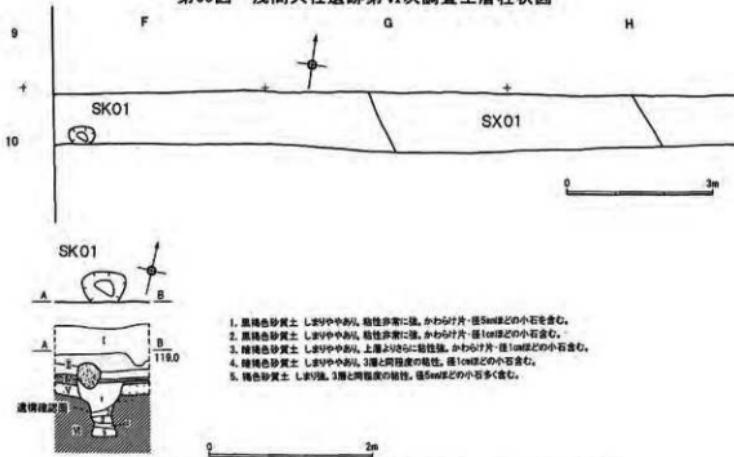
SK01は、F-10グリッドで発見された土坑である。発見された時にはすでに地山まで掘り抜かれた後であった。遺構確認面での規模は、長軸0.55m、短軸0.47mで、不整円形とみられ、トレンチ南側にも広がっている。SK01は、炭化物などを含む硬化層であるIV層の下層を掘り込んでおり、IV層の上層に覆われているようであった。覆土にはかわらけ片が含まれているが、細片のため詳細な時期は不明である。SK01西側は、参道の石敷があるため未調査だが、SK01周辺はIV層が分布している範囲である。

SX01 (第70図)

G-10グリッドで確認された落ち込みである。平面的な調査のみであるため、遺構の詳細は不明だが、第76図8のS字状口縁台付甕を探集している。G-10グリッドから東側へはV



第69図 浅間大社遺跡第VI次調査土層柱状図

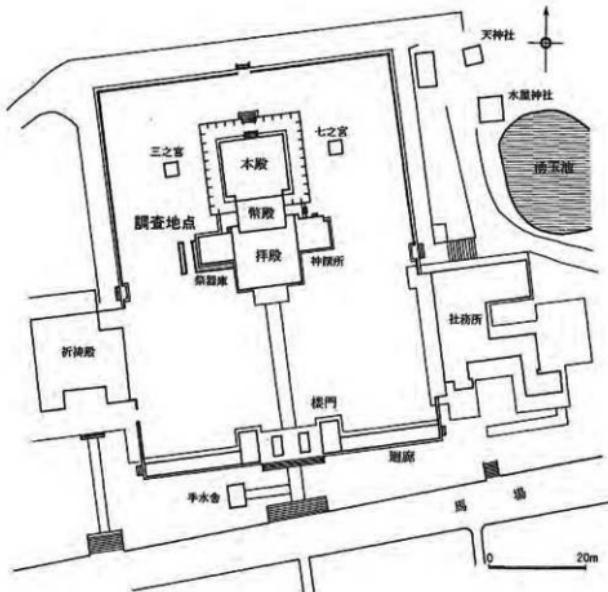


第70図 浅間大社遺跡第VI次調査SK01・SX01実測図

層の堆積が厚くなり、地山も徐々に標高を下げている。SX01はその辺りに構築されているようで、中世の段階より遡る古墳時代の遺構の存在が窺える。

C 第VII次調査（第71図～第74図）

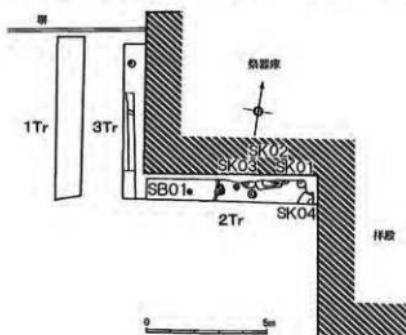
第VII次調査は、これまでの調査の中で最も社殿に近い箇所の調査となった（第71図）。調査



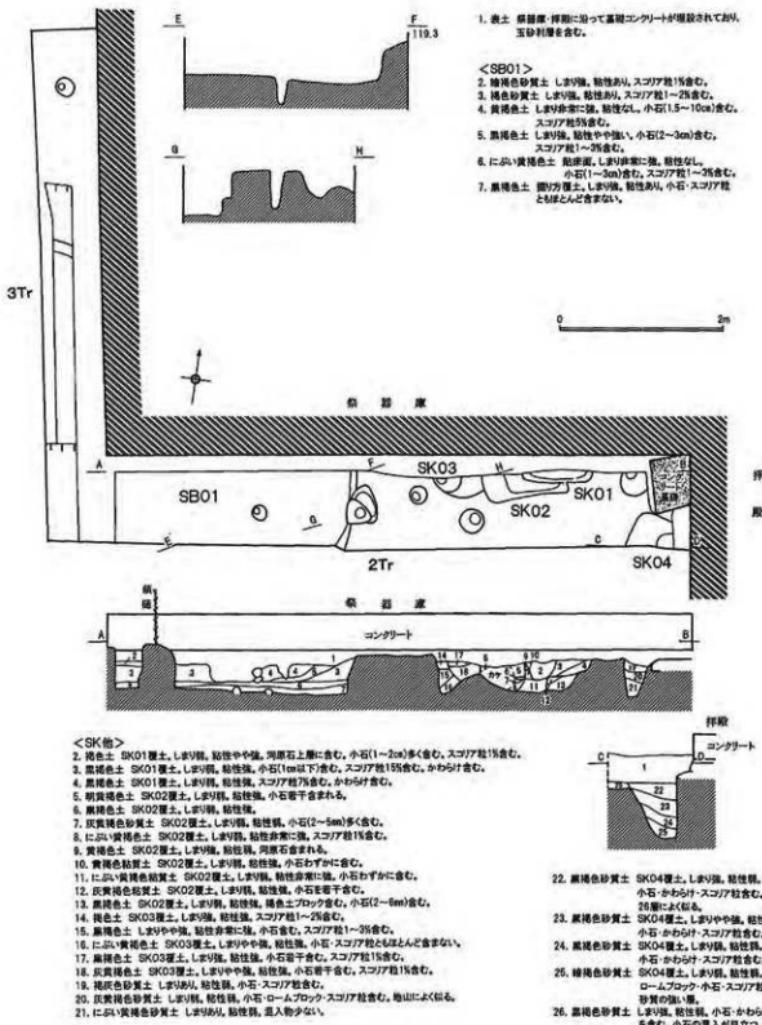
第71図 浅間大社遺跡第VII次調査調査地点位置図

区は、拝殿と祭器庫の西側にあたる。拝殿の建造年代は不明であるが、寛永十年(1633)当時の様子を描いたと思われる規模と現在の拝殿の規模がほぼ同じであるという(富士山本宮浅間大社2005)。現在の祭器庫は、拝殿東側の神饌所と共に大正十五年(1926)に新設されたものである。前出の寛永十年の絵図には、拝殿西側に独立して「御炊殿」とある建物が描かれており、また、明治二十三年(1890)発行の「官幣大社富士山本宮浅間神社境内全図」(富士宮市教育委員会1992)では、拝殿西側には「神饌舎」とある建物が社殿とが接しており、祭器庫はみられない。第VII次調査区は、これら建物との関連が深い地点である。

調査地点では、一部に現代の排水管(1トレンチ)や、水道管(3トレンチ)等の埋設が確認されたが、2トレンチ(2Tr)から3トレンチ(3Tr)にまたがって、古墳時



第72図 浅間大社遺跡第VII次調査遺構分布図



第73図 浅間大社遺跡第VII次調査遺構実測図

代の竪穴住居1軒(SB01)、2トレンチ東側には中世の土坑(SK01~04)・ピットが確認された(第72図)。これらの配水管などの埋設箇所は、未調査となっている。また、2トレンチ東側では、中世の土坑やピットを覆うように、かわらけの小破片を多く含むしまりの非常に強い層(第73図26層)が分布しており、整地層である可能性も考えられた。この整地層は、社殿正面で確認された第VI次調査のIII層及びIV層に対応する可能性がある。

SB01(第73・74図、写真図版9)

SB01は、2トレンチと3トレンチにまたがる形で発見された。古墳時代前期の竪穴住居跡である。調査時には確認できなかったが、1トレンチ(1Tr)南東隅にもその範囲が及んでいたかもしれない。遺構の規模は推定で6.5m×5mで、形状はやや隅丸方形になるかと思われる。貼り床は確認された遺構内に良好に残存し、非常にしまりが強い在褐色土である。標高値は118.8m付近でほぼ一定である。柱穴であるピットは、遺構内に1箇所確認された。ピットの規模は0.18m×0.18mのややゆがんだ円形を呈している。ピットの深さは0.35mである。残存する壁高は、貼り床面から0.29mである。調査範囲では炉跡は発見されなかった。なお、3トレンチでは、埋設された水道管などにより未掘部分がある。

遺物は、覆土中より古墳時代前期の土器壺・壺・小形器台(第82図)が出土した。

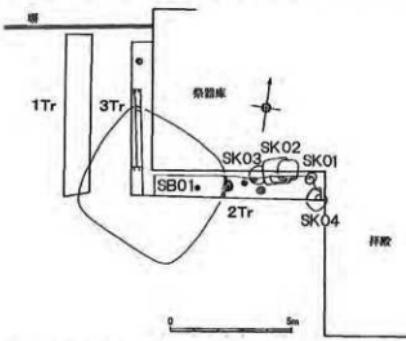
SK01~SK03(第73図)

SK01~SK03は、SK01→SK02→SK03の切りあい関係が見られる土坑である。いずれも、遺構は北側に広がるが、祭器庫の下となり未調査である。周辺は、表土から遺構確認面までの深さが浅く、また祭器庫のコンクリート基礎や玉砂利層などが堆積しており、当初搅乱と認識していた。しかし、かわらけを中心とした遺物が多く出土していたことと、コンクリート破片などといった新しいものを含まない覆土が確認され、遺構としたものである。そのため遺構内の遺物としてとりあげていない遺物も多くある。SK02・SK03については遺構内遺物を確認している。

SK01は、西側の壁を掘り飛ばしている。土層によって復元される規模は、調査部分での長軸0.76m、短軸0.15mで方形を呈する。覆土の状況はSK04に似ている。遺構の深さは0.2mである。SK02は、SK01に切られている。規模は、調査部分での長軸1.04m、短軸0.29mで方形を呈する。遺構の深さは0.35mである。覆土からは、かわらけ片が出土している。覆土は、埋め土とみられる黄褐色から灰黃褐色を呈する粘質土(10~12層)が含まれるなど、SK01とは様相を違えている。SK03は、SK02に切られている。残存する規模は、長軸0.61m、短軸0.25mで円形を呈する。遺構の深さは0.39mで、遺構底面は凹凸が見られる。覆土からは、かわらけ片が出土している。

SK04(第73図)

SK04は、2トレンチ南東隅で発見されたものである。SK01



第74図 浅間大社遺跡第VII次調査遺構範囲想定図

からは約0.9m離れた場所にある。遺構は坪殿の下から2トレンチ南側へ広がる。調査部分での規模は、長軸0.56m、短軸0.37mで方形を呈する。遺構の深さは0.66mである。覆土からは、かわらけ片が出土している。覆土は、自然堆積と思われ、下層につれ遺物量は減った。覆土の状況はSK01に似ている。

(4) 遺物（第75～84図、第16～27表、写真図版9・10）

A 確認調査（第75図、第16・17表）

確認調査では、中世の国産陶磁器、かわらけ、近世以降の遺物が検出されている。中世及び、近世土器共に遺物の出土は見られるが遺物量は少ない。

① 中世（第75図1～12・14～22、第16表）

国産陶磁器（第75図1～12・19～22、第16表）

1はA区の1トレンチより検出された同安窯系の青磁碗である。文様として櫛描文が描かれている。年代は12世紀後葉に推察される。

2～7は瀬戸・美濃産の陶磁器である。2は碗形鉢、3は花瓶である。ともに14世紀後半～15世紀初頭に推察される。4は15世紀中頃の縁軸小皿、5は15世紀代の盤、6・7は15世紀後半～16世紀初頭の擂鉢と推察される。8は常滑産の片口鉢であり、12世紀中頃～13世紀後半のものと推察される。9・10は甕である。9は1125～1220年代の常滑産の甕である。口縁の内部に沈線が認められる。10は渥美産の甕で、外面には調整痕として押印文が認められる。1150～1175年代のものと推察される。

11は龍泉窯系の青磁碗である。口縁部付近に飛雲文が描かれている。年代は12世紀～13世紀代と推察される。

12は15世紀後半代の輸入磁器皿である。見込み部に十字花文が描かれている。口縁は端反り高台輪積み痕が認められる。

19～22はB区の2トレンチより検出された。19は15世紀後半～16世紀初頭のもので、擂り面の摩滅が著しい。20・21は片口鉢である。21は1350～1450年代の常滑産のものと推察される。かわらけ（第75図14～18・23、第16表）

図示が可能な5点について記載する。全様を確認できるものは2点のみであった。

15は柱状高台、16は中型かわらけである。底径が8.2cmと広く、器高は1.7cmと低い形態をする。17は中～小型かわらけである。16よりも器壁に厚みを持たないが、形態的には似ている。18は擂乱より検出された。全体に厚みを持ち、ぼてっとした感を受ける。23はB区の2トレンチより検出されたかわらけの口縁部の破片資料である。口径を計る12.7cmで大型のかわらけであり、全面に金属鋆が付着している。これらのかわらけは形態より、いずれも13世紀代と推察される。

② 近世（第75図、第16表）

風炉（第75図13、第16表）

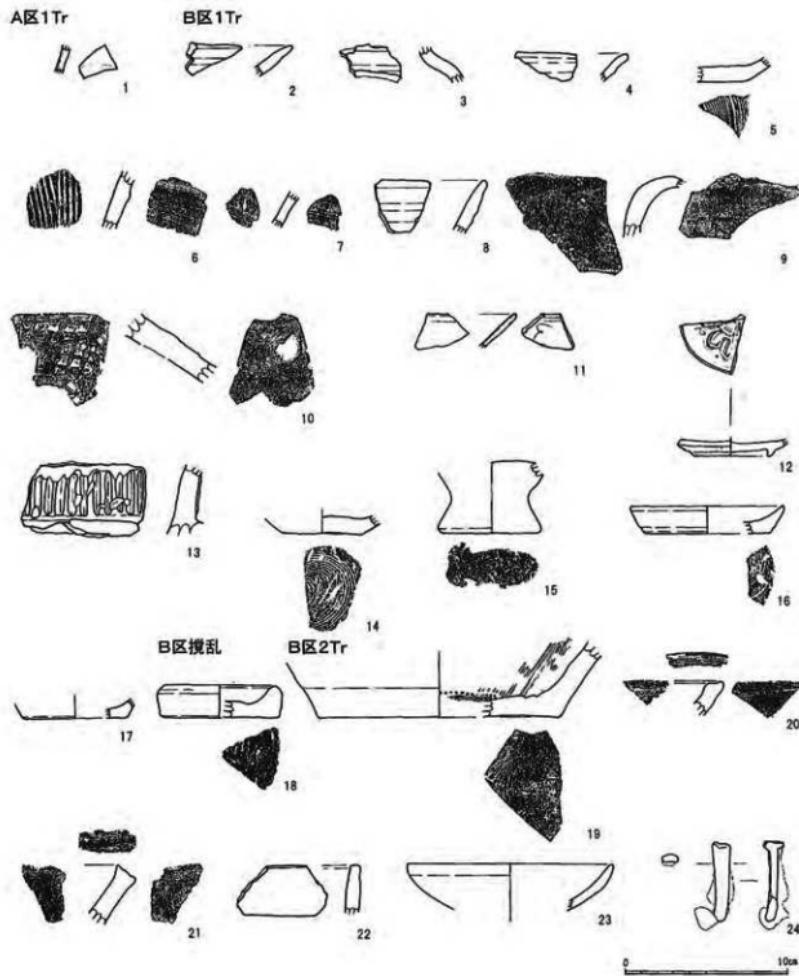
13は風炉である。体部の破片の瓦質土器であり、15世紀代と推察される。

瓦質土器（第75図22、第16表）

22は茶釜形の瓦質土器である。

金属製品（第75図24、第17表）

24は2トレンチの集石土坑の覆土中より検出された和釘である。長さ3.2cm、幅0.7cm、重さ3.25gを測る。



第75図 浅間大社確認調査出土遺物実測図

第16表 浅間大社遺跡確認調査出土遺物観察表

No.	出土地点	種別 器種	口径 器高 底径	特色	調査・文様・ 成形法など	備考
1	A区 1Tr	貿易陶磁 青磁碗		胎土 きめ細かい、ピンホール 燒成 硬質 色調 灰オーブ	柳葉文	12c後葉の『同安窯系青磁碗』
2	B区 1Tr	国産陶器 碗形鉢		胎土 長石・赤色粒子・雲母含、ビンホール、貫入 燒成 やや硬質 色調 灰白		瀬戸・美濃產 編年 後1期またはII期(14c後半~15c初頭) 灰釉
3	B区 1Tr	国産陶器 花瓶		胎土 石英・長石・赤色粒子含、ビンホール、貫入 燒成 やや硬質 色調 灰オーブ		瀬戸・美濃產 編年 後1期またはII期(14c後半~15c初頭) 灰釉
4	B区 1Tr	国産陶器 綠釉小皿		胎土 長石・雲母含、ビンホール、貫入 燒成 やや硬質 色調 オーブ		瀬戸・美濃產 編年 後IV期古(15c中頃) 灰釉
5	B区 1Tr	国産陶器 盤		胎土 きめ細かい、長石・赤色粒子・雲母含、ビンホール、貫入 燒成 やや硬質 色調 灰オーブ	手の成形	瀬戸・美濃產 編年 古瀬戸後夏~IV期(15c代)
6	B区 1Tr	国産陶器 捲物		胎土 きめ細かい、石英・長石・雲母含 燒成 硬質 色調 灰赤灰		瀬戸・美濃產 編年 後IV期(15c後半~16c初頭)捲物
7	B区 1Tr	国産陶器		胎土 石英・赤色粒子含 燒成 硬質 色調 灰		瀬戸・美濃產 編年 後IV期(15c後半~16c初頭)捲物
8	B区 1Tr	国産陶器 片口鉢		胎土 石英・長石・砂粒含 燒成 硬質 色調 灰		常滑產 編年 片口鉢1類(12c中~13c後半)
9	B区 1Tr	国産陶器		胎土 きめ細かい、石英・長石・雲母含、ビンホール、貫入 燒成 硬質 色調 灰	内面口縁に沈線	常滑產、 編年 1b~4形式(1125~1220年) 灰釉、口縁部堆墨
10	B区 1Tr	国産陶器 甕		胎土 きめ細かい、石英・雲母含 燒成 硬質 色調 灰	押印文	瀬戸產 編年 2形式(1150~1175年)
11	B区 1Tr	貿易陶磁 青磁碗		胎土 きめ細かい 燒成 硬質 色調 灰	飛雲文	12c後半~13c前葉の『龍泉系青磁碗』
12	B区 1Tr	国産陶器 染付皿		胎土 きめ細かい 焼成 硬質 色調 灰		見込み記号花文
13	B区 1Tr	国産陶器 風炉		胎土 長石・赤色粒子・砂粒・雲母含 焼成 やや軟質 色調 灰		15c代
14	B区 1Tr	かわらけ	4.8	胎土 きめ細かい、黒色粒子・雲母含 焼成 やや軟質 色調 にぶい煙	手の成形 糸切り無調整	低1/2
15	B区 1Tr	かわらけ	6.6	胎土 きめ細かい、赤色粒子・黒色粒子・砂粒・ 雲母含 焼成 やや軟質 色調 灰		柱状高台 高台1/2
16	B区 1Tr	かわらけ	(10.0) 1.7 (8.2)	胎土 石英・長石・黒色粒子・黒色粒子・雲母含 焼成 やや軟質 色調 にぶい煙	手の成形 糸切り無調整	1/4以下
17	B区 1Tr	かわらけ	(1.2) (6.3)	胎土 石英(少)・長石(少)・黒色粒子・雲母含 焼成 やや軟質 色調 接		
18	B区 捨乱	かわらけ	(6.9) (7.4) (2.1)	胎土 きめ細かい、赤色粒子・黒色粒子・砂粒・ 雲母含 焼成 やや軟質 色調 接	手づくね	1/4以下 灯明皿に転用
19	B区 2Tr	国産陶器 捲物	(14.8)	胎土 石英・長石・砂粒・赤色粒子・雲母含 焼成 硬質 色調 にぶい炎掛		瀬戸・美濃產 編年 古瀬戸後IV期(15c後半~16c初頭) 灰釉、摺り削ぎ落着しない、1/4以下
20	B区 2Tr	国産陶器 片口鉢		胎土 石英・長石・砂粒・赤色粒子・雲母含 焼成 普通 色調 灰		常滑產 編年 7~9形式(1350~1450年)
21	B区 2Tr	国産陶器 片口鉢		胎土 石英・長石・砂粒・雲母含 焼成 硬質 色調 にぶい炎掛		
22	B区 2Tr	国産陶器 茶釜土器		胎土 赤色粒子・砂粒・雲母含 焼成 硬質 色調 灰白		
23	B区 2Tr	かわらけ	(12.7)	胎土 灰石・長石・赤色粒子・黒色粒子含 焼成 普通 色調 灰		口縁1/4以下

第17表 浅間大社遺跡確認調査出土金属製品観察表

No.	種別	出土地点	材質	法量			備考	残存状況
				長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)		
24	釘	27r 集石土坑	鉄	3.2	0.7	3.25	和釘か?	良好

B 第VI次調査（第76～81図、第18～24表、写真図版8～10）

浅間大社遺跡第VI次調査では土師器、須恵器、かわらけ、国産陶磁器、金属製品、土製品等が検出されている。そのうちの多数をかわらけが占めている。第V次調査では確認できなかった4～6世紀代（古墳時代）の遺物が出土している。

① 古墳時代（第76図、第18表）

古墳時代の遺物は93片検出されている。そのうち、比較的良好な状態のもので実測可能であった12点について記載する。

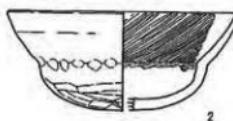
土師器（第76図1～8・11、第18表）

1はA・B-8・9グリッドより検出された6世紀代の腰東甕である。口径は20.0cmを測る。2・3はB-9グリッドより検出された。2は小型の丸底甕であり、口径は14.4cmを測

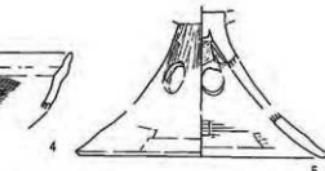
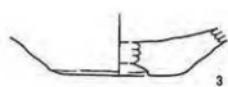
A-B-8-9



B-9



J-4



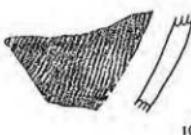
I-4-5



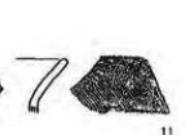
I-6



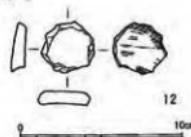
SX01



表採



I-4-5



10cm

第76図 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図①

る。外面に多量のスグが付着している。形式は大席IV式に相当し、古墳時代前期と推察される。3は平底甕である。年代は4～5世紀に相当する。4・5はJ-4グリッドより検出された。4は有段口縁鉢であり、形式は大席III～IV式に相当し、古墳時代前期と推察される。口径は16.6cmをはかる。5は高杯の脚部である。年代は他の土師器同様に古墳時代前期と推察される。

6はI-4・5グリッドより検出された甕である。7はI-6グリッドより検出された甕の口縁部の破片資料である。形式は中見代III式に相当する。須恵器を模倣した甕の口縁であることが考えられる。

8はSXO1より検出された在地系のS字状口縁部台付甕である。

11は表探資料である。古墳時代前期に相当すると考えられる。

須恵器（第76図9・10、第18表）

須恵器甕の破片が3点検出されているが、残存状況の良い2点を図示する。

9・10はSXO1より検出されたもので、外面に施釉が認められる。産地に関しては細かい破片資料であるため不明である。

土製品（第76図12、第18表）

土製品は1点確認されている。12はI-4・5グリッドより検出された土製円盤である。西駿河系または、古墳時代中期の壺胴部下半の破片を二次利用したものである。打ち欠きがなされているのみであり、研磨などは見られない。

② 古代・中世（第77～80図1～95・98～100、第19～22表、写真図版9・10）

第III・IV次調査において12世紀から15世紀代までの包含層が神社周辺に広がることが確認されている。第VI次調査においても第III・IV次調査同様の遺物構成であり、主として12世紀～13世紀代にかけてのかわらけが非常に際立って見られる。以下では古代～近世の土師器、かわらけ、国産陶磁器について記述する。

土師器・かわらけ（第77～80図1～95・98～100、第19～22表、写真図版9・10）

本調査において、土師器・かわらけは、ロクロ成形によるものが多数を占める。採集されたかわらけのほとんどは口縁部・底部のみの破片資料であるため、法量については一般的に分類の際に必要な口径等の情報を計測することはできなかった。

1はB-8グリッド、2・3はB-C-9・10グリッドから検出されている。1は小振りの柱状高台であり、高台部のみがほぼ完存する。高台の特徴より1は柱状高台の初期段階よりやや発達した形であり、12世紀後半のものと考えられる。2は口縁部の破片である。口径は10.3cmと推定されるかわらけである。口縁部付近に一つの段を持ち、口縁は細長い楕円型になる。3は土師器であり、体部に比べやや厚い底部をもつ。体部は直線的に立ち上がる。

4はC-8・9グリッドより検出されたかわらけで、底部から内側に湾曲しながら立ち上がり、体部中に弱い屈曲をもつ。

5～8・98はD-E-9・10グリッド、9・10はE-9グリッド、11・12はE-9・10グリッドより検出されている。5は平らな底部をつくり出し見込部にナデ調整が施されている。6は、5同様に平らな底部をつくり、体部は40度程度の角度をもって外反しながら立ち上がる。また、5よりも厚手につくられている。7・8は柱状高台である。7は、見込み部に凹みをもつ。高台は末広状に張り出し、全面に煤が付着する。8は末広に張り出す高台直上に深い窪が付く。体部はやや外反しながら立ち上がる。9は底部から緩やかな外反しながら

立ち上がる。11は底部から外反しながらやや内側に反り立ち上がる。体部の傾きから浅い小皿だと想定される。12は底面から緩やかに屈曲しながら外側に立ち上がるため擬似高台をつくりだす。98は口縁部の破片である。外面に朱書きと考えられる文字が書かれているが、主体の文字部分は欠損しているため解読は困難である。

13~24はF-10グリッドより検出されている。15は擬似高台をつくり、体部は直線的に立ち上がる。17は底部及び体部同様に比較的薄いつくりで、体部は内湾するように立ち上がる。18は底部から約50度の角度で直線的に開き、断面が逆三角形をなすため見込部が深くなる。19は18よりもやや角度をもって直線的に開く。底部には板状圧痕がみられる。20は底部が肥厚し、中央部に高まりをもつ。体部は直線的に開き、体部中で屈曲する。21は肥厚な底部で、底部中央に高まりを持つ。体部は直線的に立ち上がる。22・23は足高高台である。22は低い貼付高台が欠損する。23は肥厚な底部より末広に開く高台が貼り付けられ、体部は直線的に立ち上がる形態をとる。24は柱状高台である。高台は末広にやや外側に広がり、体部は緩やかに内湾しながら立ち上がる。坏部については浅い形態をする。

25・26はF・G-10グリッドより検出されている。25は口縁部であり、口径は11.0cmとされる推定されるかわらけである。口縁部の形態より体部は直線的に立ち上がり、口唇部は丸い。26は小型のかわらけであり、見込部がわずかに高まりを持つ。体部は引き出し気味に外反しながら立ち上がる。

29・30はG-5・6グリッド、31はG-10グリッドから検出されている。29はかわらけであり、体部に比べてやや厚い底部をもち、体部は外反気味に立ち上がる。30は土師器皿である。体部の低い部分に稜が認められる。31は柱状高台である。高台上に付く坏部が末広に張り出す。

27・28がSK01より検出されている。27は底部が肥厚し、見込み部が高まりを持つ。体部は内側に引き出し気味に立ち上がり直線的に外反するかわらけである。28は柱状高台であり、低い高台である。体部は直線的に外側に開くため、坏部は浅い形態である。

32はH-1グリッドから検出された足高高台である。全体的に薄いつくりであり、硬質に焼かれている。

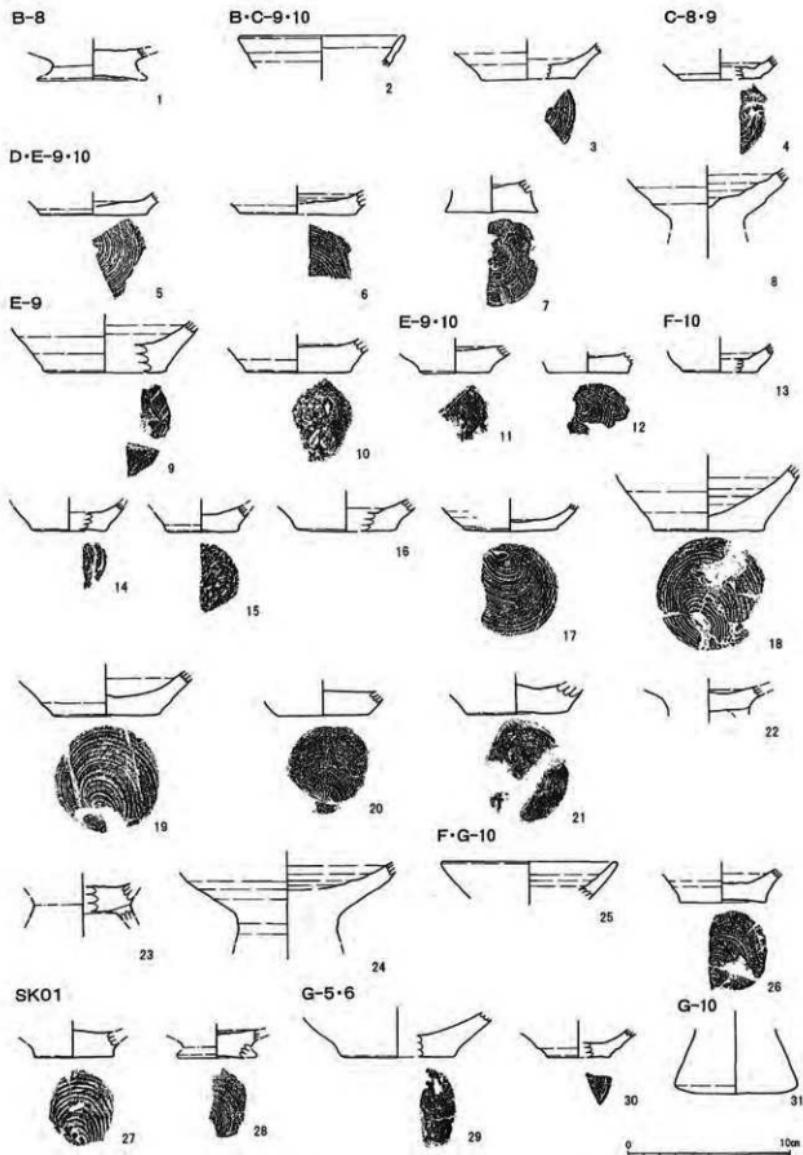
33~38はI-4・5グリッド、39~40はI-5グリッド、41~51・100はI-5・6グリッド、52~57はI-6グリッド、58~60はI-6・7グリッド、99はI-9・10グリッドより検出されている。この区域が、本調査の中でもっと多くの遺物が採集された区域である。

36・43・44はかわらけ内部に高まりが残されている。35は底部からやや直立気味に立ち上がり体部下半から急な外反をみせる。39は足高高台で口径が6.0cmと推定され、比較的小振りのものである。37・38・51・53は大小バラエティーある形態をした柱状高台である。37・51は高台に段を持たず、38・53は高台に段を有する。坂本氏の分類(1986)などより37・51が発達して、38・53のような形態になると推察される。40は体部が直線的に立ち上がり、42は全面が磨滅しており内外面の調整は確認することはできない。体部は直線的に立ち上がる浅い小皿である。45は口径8.8cmのかわらけである。底部は体部と比べるとやや肥厚し、体部は内湾状に立ち上がり、体部中で屈曲する。また、口唇部は尖がる。45は33・64と同形態だと思われる。46はやや厚い底部を持ち、擬似高台をつくる。体部は直線的に立ち上がる。47は口縁部の破片である。口縁部の形態より直線的に立ち上がり、口縁部下位にわずかな段をつくり口縁部が外反させている。48は足高高台の脚部である。脚部の形態から脚部は末広に張り出す。脚

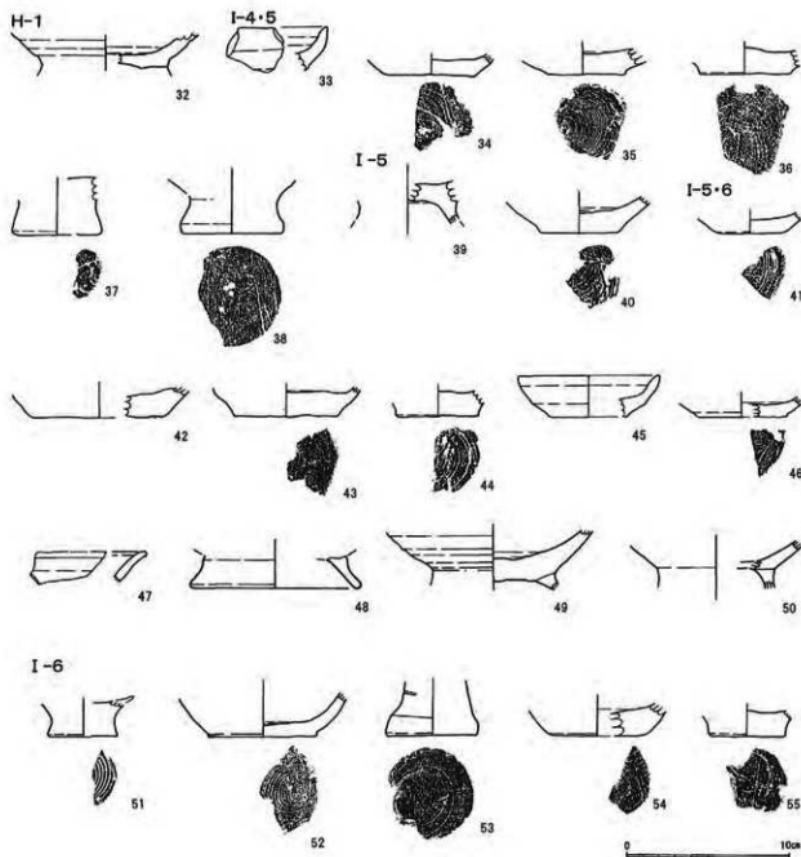
部先端は丸状である。49は足高高台である。脚部は末広に張り出し、坏底部は肥厚し、坏部は内湾しながら立ち上がる。100は甲斐型土器である。胎土はきめ細かく、浅黄橙をする。にはヨコナデ調整され、腰部には甲斐型土器特有のナナメヘラケズリがみられる。

52は体部よりもやや肥厚した底部を持つ。体部は擬似高台様をつくり、内湾状に立ち上がる。56は底部が肥厚し、見込部に低い高まりが見られる。体部は直線的に外反し、途中で屈曲し立ち上がる。57は口径が11.1cmと推定される土師器である。古代の系統を持ち、かわらけの段階のものではないと推察される。硬質に焼かれた体部は約55度前後の角度を持ち、直線的に開き、下半部には稜が確認できる。58はきめ細かく、粉っぽい。体部は内湾しながら立ち上がる。59は底部に厚みをもたず、見込部中央に高まりを持つ。体部は内湾気味に立ち上がり、体部下半部に稜をもつ。60は口径が14.6cmと推定される土師器坏である。体部は高台部よりやや外側に直線に近い形で広がる。口唇部には玉縁がつくられ、底部には板状压痕が残されている。体部には東？とも解説できる文字が墨書きされているが、文字の半分を欠損しているため、文字の特定はできなかった。墨書き土器は市内において村山浅間神社・初田遺跡に次ぐ三例目である。60の土師器坏は玉縁を持つ点と胎土の特徴から甲斐型土器の終末段階と推察される。坂本（1986）・森原（1994）両氏の甲斐型土器の時期設定より、10世紀中～11世紀前半に位置づけられる。また、富士宮市に隣接する富士市の中折遺跡（2004）第13号住居跡より出土している玉縁を持つ土師器がK-90～O-53段階の灰釉陶器皿と供伴して出土している。この2つの見解より、60の土師器坏は10世紀中頃～10世紀末の年代が与えられる。99は竹管状工具による縦線・横線が体部に刻まれているかわらけである。

61・62はI・J-5グリッドから検出されているかわらけである。61は見込部に成形段階にできたと考えられる凹みがみられる。底部は厚みをもたず、体部から直線的に立ち上がる。62は底部が肥厚し、見込部に高まり持つ。体部は直線的に外反し、底部はわずかに上底となる。63・64はJ-1グリッド、65～76はJ-4グリッド、77はJ-5・6グリッド、78～80はJ-7グリッド、81はJ-8・9グリッド、82はJ-9・10グリッドから検出されている。J区より検出した遺物の底部は肥厚するものが大半を占め、見込部が高まるものとそうでないものとがある。63は見込部に高まりを持ち、体部は25度前後の角度で直線的に立ち上がる。体部の広がりから外側に強く外反するため法量は浅いと思われる。64は口径が9.0cmと推定されるかわらけである。底部からやや弱く内側に湾曲しながら立ち上がり、体部中位で屈曲する。65は見込部がやや回む形態をする。体部の立ち上がりは直線的なものと考えられる。66は体部が直線的に開き、体部中に段をもつ。67は全体的に薄めにつくられている。体部は内湾状に立ち上がる。68は見込部に低い高まりをもち、体部は内湾する。69は体部が直線的に開く。71は口縁部片である。口径14.4cmと推定されるかわらけである。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部がわずかに外反する。口唇部は尖がる。内面に稜がみられる。70は底部が肥厚し、見込部に高まりを持つ。体部は内側に湾曲し、外反する。72・73はかわらけの口縁部片である。72は口径16.0cmと推定される。体部は内湾状に立ち上がり、体部中で弱く屈曲する。口唇部は面取りをされている。73は口径12.6cmと推定される。口縁部の形態により体部は内湾状に立ち上がり、口唇部は尖る。74は柱状高台である。底部は肥厚し、見込部には強い高まりがみられる。体部は底部より内側にやや内湾状に外反し、体部中で屈曲してほぼ直線的に立ち上がる。口縁部を欠くがおそらく、見込部の高さと同じもしくは見込部のほうが高い形態をもつものである。75は底部に肥厚し、底部は強い高まりを持つ。擬似高台をつくり直線的に立ち上がる。

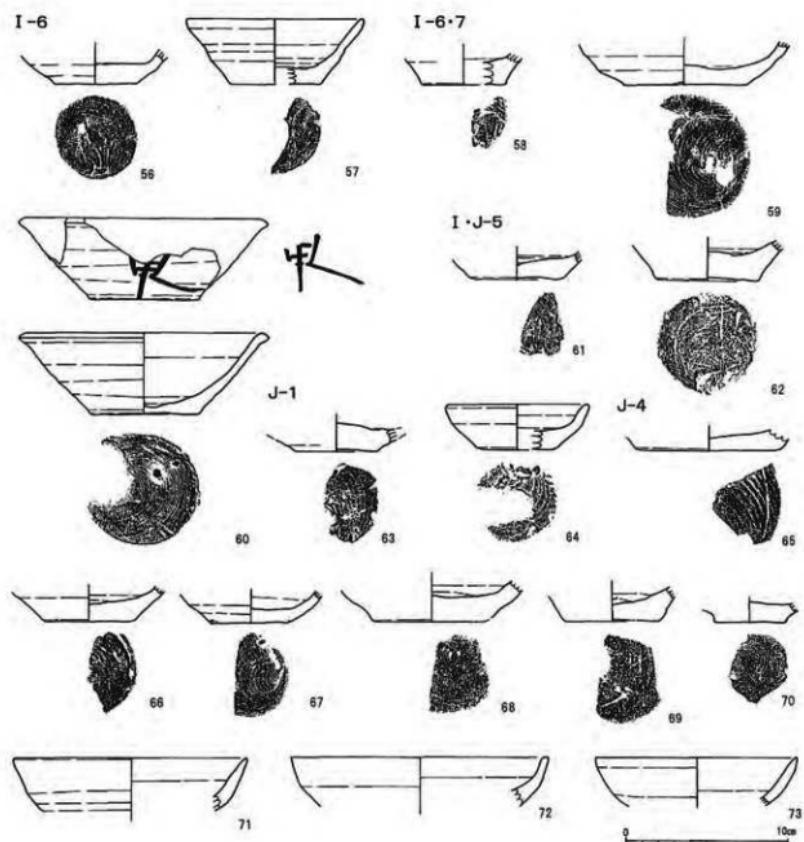


第77図 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図②



第78図 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図③

76は口径5.6cmと推定される小型のかわらけである。底部が体部よりも比較的厚みがあるが、全体的に厚ぼったい。体部は内湾するように立ち上がり、口唇部は尖る。77は足高高台である。内側に湾曲してから外側に開く貼付け高台をもち、坏部は内湾するように立ち上がる。78は体部が内湾するように立ち上がり、擬似高台をつくる。内面には稜がみられる。79は比較的厚い底部を持ち、見込部に弱い高まりをもつ。体部は外反しながら60度弱の角度で立ち上がる。80は柱状高台の高台部である。底径5.2cmと比較的に小さい。高台の形態より坂本氏の分類(1986)ではⅢ類に相当する。81は底部がやや肥厚し、見込部には高まりを持つ。内面には幅の狭いロクロ目が残している。体部は40度程度の角度で直線的に立ち上がる。82の

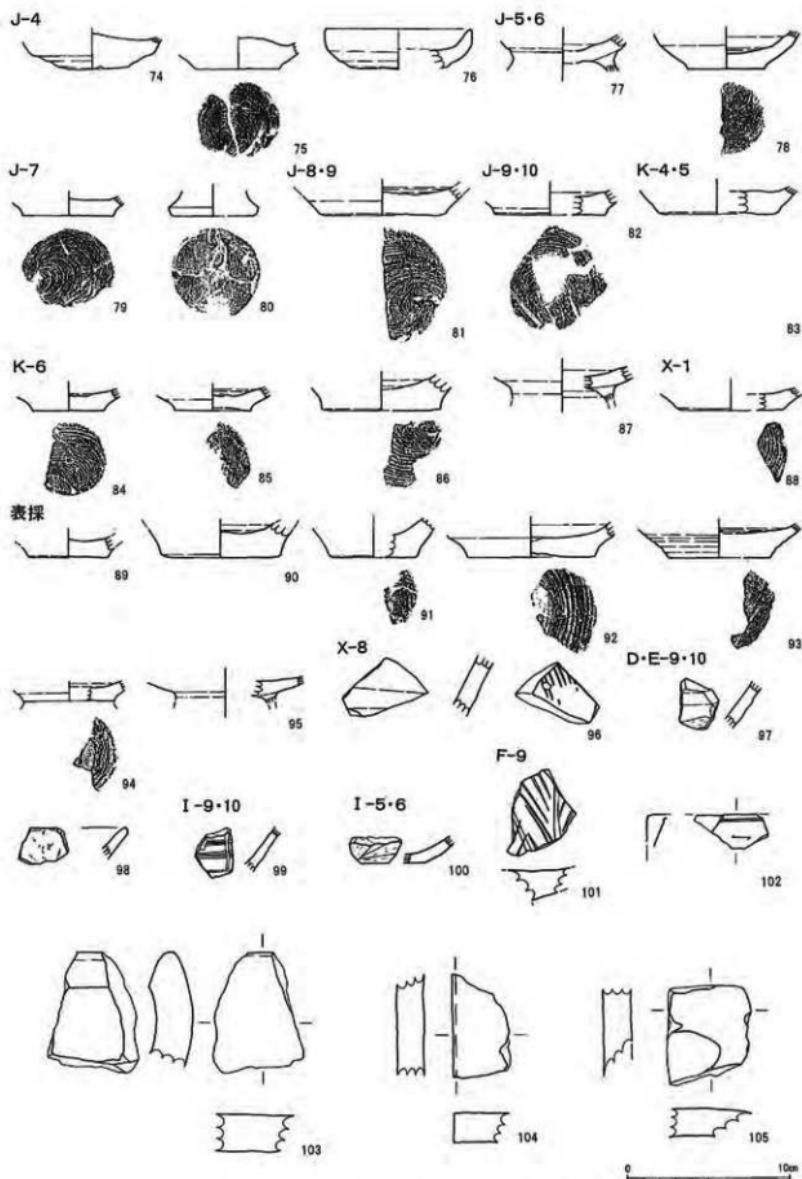


第79図 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図④

体部は内側に湾曲し、擬似高台をつくりだし外反する。

83はK-4・5グリッド、84はK-6グリッドから検出されている。83は底部が肥厚し、わずかに底上げする。また、糸切り痕が残される。体部は直線的に立ち上がる。84は内側に湾曲し立ち上がる。体部途中で屈曲しながら立ち上がると想定される。85は擬似高台をつくり、直線的に広がる。見込部中央に高まりがみられる。全体的に粗悪なつくりである。86は底部が肥厚し、体部は引き出し気味に立ち上がる。87は足高高台である。脚部は垂直気味に開き、坏部は25度程度の角度で立ち上がる。

88はX-1ラインより検出されている。体部に比べるとやや厚手につくられた底部であり、



第80図 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物実測図⑤

体部は直線的に開く。

89～95は表掲資料である。89は見込部にわずかな高まりを持つ。体部は外反しながら立ち上がる。90は底部の見込部中央に高まりを持つ。体部は内側にわずかに湾曲し、外反する。91は擬似高台をつくり、体部が直線的に立ち上がる。92は底部より内側に内湾しながら体部中で屈曲して立ち上がる。底部には糸切り痕が残される。93は体部が40度程度の角度で外反しながら立ち上がる。94・95は足高高台である。94は全体的に薄めにつくられている。脚部はやや末広に開き、坏部は20度の角度で直線的に立ち上がる。95は坏部から付け高台部分が欠落したものである。体部と同様の厚みをつくる底部から湾曲しながら立ち上がり、体部中に弱い稜をもつ。

国産陶磁器（第80図96・97、第22表）

96はX-8ラインより検出された擂鉢の破片である。胎土や釉薬など特徴から常滑産と推察される。97はD-E-9・10グリッド検出された常滑系の片口鉢である。外面にヘラ削りがみられる。形式は片口鉢I類に相当し、13世紀前半ものである。

③ 近世（第80図101～105、第81図、第22～24表）

第VI次調査の中で近世以降の遺物として石製品、金属製品が確認された。古代・中世の遺物と比較すると乏しい遺物量である。以下では図示が可能な陶磁器1点、石製品4点、金属製品10点について記載する。

国産陶磁器（第80図101、第22表）

101はF-9グリッドから検出された青磁盤・大皿底部の破片である。産地は肥前の波佐見及び三股青磁窯で焼かれた1630～1640年代のものと推察される。見込み部にはヘラを用いた「片切り彫り」の技法を用いている。

石製品（第80図102～105、第23表）

石製品は5点確認されている。産地はいずれも不明であり、近世段階のものと推察される。

102はF-10グリッド、103はI-5・6グリッド、104はJ-8グリッド、105はX-1ラインである。

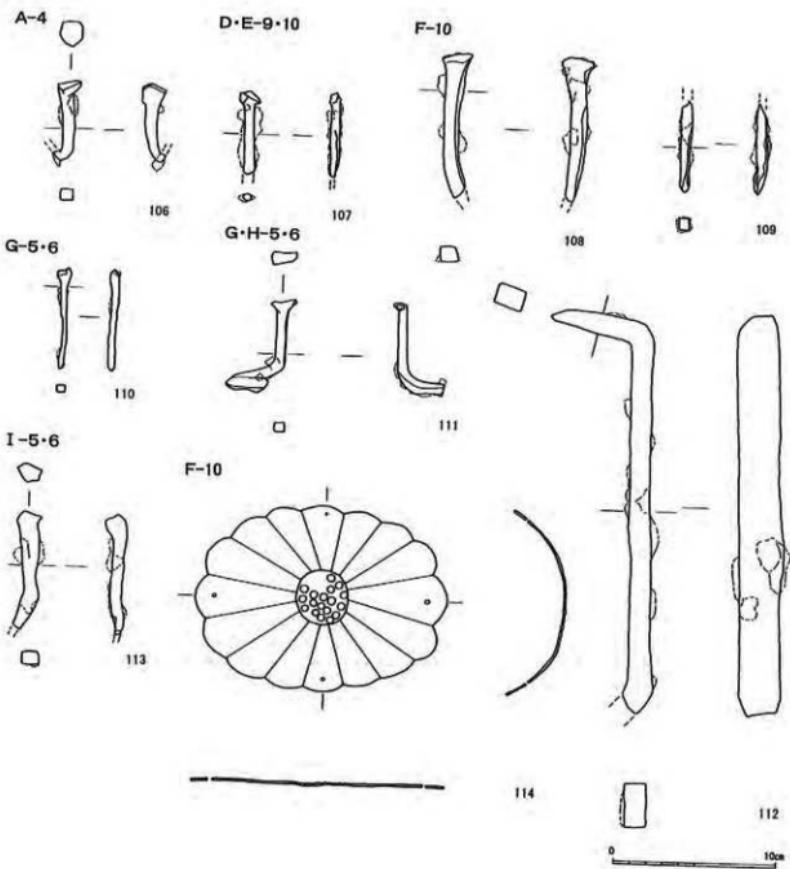
102は硯の破片資料であり、削痕が前面に確認できる。103～105は平瓦の破片資料である。

金属製品（第81図106～115、第24表）

鉄製品は現代のものを除き、9点が確認された。いずれも近世の鉄製品だと推察される。106～112は和釘である。106はA-4グリッドより検出される。長さ3.2cm、幅0.5cm、重さ2.3gであり、脚部が欠損している。107はD-E-9・10グリッドより検出される。長さ3.4cm、幅0.4cmで頭部の形態より蟹目釘と考えられる。108・109はF-10グリッドより検出されている。108は長さ6.0cm、幅0.5cm、重さ9.8g、109は長さ3.8cm、幅0.3cmで頭部及び脚部が欠損している。110はG-5・6グリッドより検出される。110は長さ4.2cm、幅0.4cmで脚部が欠損している。111はG-H-5・6より検出される。長さ3.0cm、幅0.4cmで頭部及び脚部が欠損している。113はI-5・6グリッドより検出される。5.0cm、幅0.6cmで脚部が欠損している。

112は鎌である。G-H-5・6グリッドより検出される。長さ16.4cm、幅9.0cmで片刃が欠損されている。

114はF-10より検出される。長さ7.6cm、幅10.5cm、重さ32.9gの銅製の飾金具の一種である。



第81図 浅間大社遺跡第VI次調査出土金属製品実測図

第18表 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表①

No.	出土地名	種別 器種	口径 器高 底径	特色など	断面・文様	備考
1	A-B-8.9 耕土	土師器 甕	(20.0)	粘土 きめ細かい、石英(多) 焼成 普通 色調 にぶい緑	外面 口縁部ヨコハケメ(7本/cm)→ヨコナデ 内面 ヨコハケメ(3本/cm)	8c代の『歌東隻』
2	B-9 耕土	土師器 壇	(14.4) (6.0)	粘土 きめ細かい、石英・長石・有色鉱物含 焼成 硬質 色調 (内)にぶい褐色・(外)にぶい緑	外面 上半ナナメヒガキ、下半 ナデ 接合部外面 剥離痕 内面 ヨコハケメ	外面多量のスス付着 古墳時代前期の『小型丸底 壇』大崩IV式
3	B-9 耕土	土師器 甕		粘土 石英・長石・赤色粒子含 焼成 普通 色調 にぶい緑	内外面 ナデ	4~5cの『中平底』 圓底
4	J-4	土師器 鉢	(16.6)	粘土 きめ細かい、石英・砂粒含 焼成 普通 色調 褐黄緑	外面 体部ヨコハケメ 内面 体部タテハケメ(10cm)	『吉良口跡林』 1/4以下
5	J-4	土師器 高环	(15.3)	粘土 きめ細かい、石英(多) 焼成 硬質 色調 (内)黒褐色・(外)にぶい緑	外面 上半タケヘラケズリ→タテミガキ、 下半ヨコヘラケズリ 内面 ヨコヘラケズリ	脚部のみ
6	I-4-5	土師器 甕	(11.5)	粘土 粗面な粘土・石英(多) 焼成 硬質 色調 (内)灰・(外)にぶい黄緑		
7	I-6 耕土	土師器 甕		粘土 きめ細かい、長石・有色鉱物含 焼成 硬質 色調 にぶい赤褐色・(内)明赤褐色	内外面 ヨコミガキ	『須恵器模倣壺口縁(はそり)』 TKI3段階(中見代田式)
8	SX01	土師器 甕		粘土 粗面な粘土・石英・長石含 焼成 硬質 色調 (内)にぶい褐色・(外)にぶい緑	外面 ナナメハケメ(8本/cm) 内面 ヨコハケメ(5本/cm)	『S字状口縁部付壺在地系』
9	SX01	須恵器 甕		粘土 きめ細かい、石英(多)・長石(多)・有色鉱物含 焼成 硬質 色調		外面全面施釉
10	X-5	須恵器 甕		粘土 きめ細かい・石英・長石・有色鉱物含 焼成 硬質 色調		
11	表探	土師器 甕		粘土 きめ細かい・長石・砂粒含 焼成 やや硬質 色調 (内)灰褐色・(外)にぶい緑	外面 タテハケメ(5本/cm) 内面 ヨコハケメ(5本/cm)→ヨコナデ	古墳時代前期 外面スス付着
12	I-4-5	土製品		粘土 きめ細かい・石英・赤色粒子含 焼成 普通 色調 淡黄緑	外面 ヨコハケメ→ナデ消し	土製円錐 表盤部下平の破片(西陵河系 または、中崩の器)を二次利用

第19表 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表②

No.	出土地点	種別・器種	口径 器高 底径	特色	調整・文様・成形法など	備考
1	B-B	かわらけ	(2.0)	断土：きめ細かい、黒色粒子・雲母含 被成：普通 色調：濃	口加成形	柱状高台 高台ほぼ完存
2	B-C-9-16	かわらけ	(10.3) (2.0)	断土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子(縦)含 被成：やや硬質 色調：濃	口加成形	口縁1/4以下
3	B-C-9-10	かわらけ	(5.8)	断土：粗い・砂粒(多)・黒色粒子(多)含 被成：普通 色調：濃	口加成形 系切り無調整	1/4以下
4	C-B-9	かわらけ	(5.0)	断土：黒色粒子(多)・砂粒・赤色粒子・雲母含 被成：普通 色調：濃	口加成形 系切り無調整	1/3
5	D-E-9-10 土中	かわらけ	(6.6)	断土：きめ細かい・長石・黒色粒子・砂粒・赤色砂子・雲母含 被成：やや良 色調：濃	口加成形 系切り無調整	底面板状圧痕
6	D-E-9-10 土中	かわらけ	(7.0)	断土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子・雲母含 被成：普通 色調：濃	口加成形 系切り無調整	底部1/4以下
7	D-E-9-10 土中	かわらけ	(5.7)	断土：きめ細かい、黒色粒子(多)・雲母(少)含 被成：普通 色調：濃	口加成形 系切り無調整	底部1/4 内外面X2付着 高台1/2
8	D-E-9-10 土中	かわらけ		断土：きめ細かい・長石・黒色粒子・赤色砂粒・雲母含 被成：普通 色調：濃	口加成形	柱状高台裏 1/4以下
9	E-9 土中	かわらけ	(7.0)	断土：きめ細かい・長石・黒色粒子・赤色砂粒・雲母含 被成：普通 色調：濃	口加成形 系切り無調整	底面板状圧痕 普通
10	E-9 土中	かわらけ	(6.5)	断土：きめ細かい・砂粒(多)・黒色粒子(多)・赤色砂粒・雲母含 被成：普通 色調：濃	口加成形	1/3
11	E-9-10 土中	かわらけ	(4.2)	断土：きめ細かい・長石・黒色粒子・赤色砂粒(多)・雲母含 被成：普通 色調：濃	口加成形	1/4以下
12	E-9-10 灰化土中	かわらけ	(5.3)	断土：きめ細かい・長石・黒色粒子・雲母含 被成：軟質 色調：濃	口加成形 系切り無調整	内面X3付着(少)
13	F-10	かわらけ	(4.7)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子・雲母含 被成：軟質 色調：濃	口加成形	底面板状圧痕 1/3
14	F-10	かわらけ	(4.6)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：軟質 色調：濃	口加成形	外面崩壊 1/4以下
15	F-10	かわらけ	(4.5)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子・雲母含 被成：軟質 色調：濃	口加成形	摩耗著しい 1/2
16	F-10	かわらけ	(6.2)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：軟質 色調：濃	口加成形	内外面崩壊 1/4以下
17	F-10	かわらけ	(5.8)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：やや硬質 色調：濃	口加成形 系切り無調整	1/2
18	F-10	かわらけ	6.9	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：普通 色調：濃	口加成形 系切り無調整	底存
19	F-10	かわらけ	6.5	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：普通 色調：濃	口加成形 系切り無調整	底完存
20	F-10	かわらけ	(6.6)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：やや軟質 色調：濃	口加成形 系切り無調整	内外面X3付着 底付着
21	F-10	かわらけ	(6.0)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：軟質 色調：濃	口加成形	内外面摩耗著しい 底1/2
22	F-10	かわらけ		断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：普通 色調：濃	口加成形	底台欠損 底高台
23	F-10	かわらけ		断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：やや軟質 色調：濃	口加成形	底高台 内外面X3付着 1/4以下
24	F-10	かわらけ		断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：普通 色調：濃	口加成形	柱状高台 外側タール付着 1/4以下
25	F.G-10	かわらけ	(11.0)	断土：きめ細かい・黒色粒子・赤色粒子含 被成：軟質 色調：濃	口加成形	口縁1/4以下

第20表 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表③

No.	出土地点	種別・器種	口径高 底径	特色	調整・文様・成形法など	備考
26	P.G-10	かわらけ	(5.3)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 燒成 普通 色調 淡青緑～緑	ロウ成形 糸切り無調整	表面板状灰痕 底面ぼかし
27	SK-01	かわらけ	4.9	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 燒成 普通 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	底面ぼかし
28	SK-01	かわらけ		胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 燒成 普通 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	柱状高台 底面ぼかし
29	G-5-6	かわらけ	(7.0)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 燒成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	底1/4
30	G-5-6 排水中	かわらけ	(4.0)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 普通 色調 淡青緑～緑	ロウ成形 糸切り無調整	1/4以下
31	G-10	かわらけ	(7.5)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 燒成 軟質 色調 緑	ロウ成形	柱状高台 高台1/4以下
32	H-1 排水	かわらけ		胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	1/3
33	I-4.5	かわらけ		胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	口縁1/4以下
34	I-4.5	かわらけ	(5.6)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	外面タール付着 底1/4
35	I-4.5 排水	かわらけ	(4.6)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	底面ぼかし
36	I-4.5 排水	かわらけ	(5.6)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	内外面タール付着
37	I-4.5	かわらけ	(5.6)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	柱状高台 高台1/4以下
38	I-4.5	かわらけ	4.8	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	柱状高台 外面タール付着 底3/4
39	I-5 排水	かわらけ	(6.0)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	足高高台 内外面タール付着 底1/4以下
40	I-5	かわらけ	(4.8)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	全面タール付着 底1/4
41	I-5.6 排水	かわらけ	(4.2)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	全面面質 底1/4
42	I-5.6 排水	かわらけ	(8.0)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじみ・黄澄	ロウ成形	崩壊著しい 底1/4
43	I-5.6 排水	かわらけ	(6.4)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじみ・黄澄	ロウ成形 糸切り無調整	1/4以下
44	I-5.6 排水	かわらけ	(5.6)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	
45	I-5.6 排水	かわらけ	(8.8) 2.6 (4.8)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	口縁1/4以下
46	I-5.6 排水	かわらけ	(5.5)	胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形 糸切り無調整	1/4以下
47	I-5.6 排水	かわらけ		胎土 きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 緑	ロウ成形	
48	I-5.6 排水	かわらけ		胎土 粗い黒色粒子・砂粒・赤色粒子含 焼成 普通 色調 緑	ロウ成形	足高高台 内面タール付着 底1/4
49	I-5.6 排水	かわらけ	7.4	胎土 きめ細かい、黒色粒子・砂粒・赤色粒子含 焼成 細末用 色調 緑	ロウ成形	足高高台 外面タール付着 底1/4
50	I-5.6 排水	かわらけ		胎土 黒色粒子・砂粒(多)・赤色粒子 焼成 普通 色調 緑	ロウ成形	足高高台 底1/4以下

第21表 浅間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表④

No.	出土地点	種別・器種	口径 高さ 底径	特色	調査・文様・成形法など	備考
51	I-5.6 耕土	かわらけ	(2.2)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	柱状高台 内外面タル付着 底台/4以下
52	I-6 耕土	かわらけ	(6.6)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：普通 色調：黒	□成形 系切り無調整	底1/4
53	I-6 包含層	かわらけ	5.4	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	柱状高台 外面タル付着、外面磨滅 底完存
54	I-6 耕土	かわらけ	(6.3)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	黑色處理？ 1/4以下
55	I-6 耕土	かわらけ	(4.4)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	外面・割れ口にタル付 着底1/2
56	I-6 かわらけ		5.0	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	内外面タル付着 底完存
57	I-6 かわらけ		(11.1) 4.1 (5.6)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形	1/3
58	I-6.7 かわらけ		(3.3)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：軟質 色調：黒 施成：底にひびき黄褐	□成形	外面磨耗 1/4以下
59	I-6.7 耕土	かわらけ	(7.6)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	外面わざわざにタル付 着底2/3
60	I-6.7 耕土	土師器 坪	(14.6) 5.0 6.6	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：普通 色調：黒	□成形 系切り無調整 系切り無調整	審音路「東」底3/4
61	LJ-5 かわらけ		(5.9)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	内外面タル付着 底1/4以下
62	LJ-5 かわらけ		6.2	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：普通 色調：黒にひびき黄褐	□成形 系切り無調整	外面磨滅 底完存
63	J-1 かわらけ		(5.1)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：普通 色調：黒	□成形 系切り無調整	内外面タル付着 底1/2
64	J-1 耕土～褐色	かわらけ	(8.5) 2.8 (4.2)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：普通 色調：黒にひびき青脛	□成形 系切り無調整	1/3
65	J-4 かわらけ		(8.4)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	内外面及び割れ口 ター ル付着 底1/4以下
66	J-4 かわらけ		(5.0)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	内外面タル付着 底1/4以下
67	J-4 かわらけ		(5.0)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	底2/3
68	J-4 かわらけ		(7.6)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形	底2/3
69	J-4 かわらけ		(6.0)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形	内外面タル付着 底2/3
70	J-4 かわらけ		(4.0)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	底2/3
71	J-4 かわらけ		(14.4)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子・雲母含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形	
72	J-4 かわらけ		(16.0)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形	口縁1/4以下
73	J-4 かわらけ		(12.6)	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形	内外面タル付着 底3/4
74	J-4 かわらけ		4.6	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形	底1/4以下
75	J-4 かわらけ		5.2	胎土：きめ細かい、黒色粒子・赤色粒子含 施成：やや軟質 色調：黒	□成形 系切り無調整	底完存

第22表 淺間大社遺跡第VI次調査出土遺物観察表⑤

No.	出土地点	種別・器種	口径 高さ 底径 (5.6)	特色	調整・文様・成形法など	備考
76	J-4	かわらけ	(6.0)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 燒成 容器 色調 細	ロクハ成形	内面タール付着
77	J-5.6	かわらけ	(4.7)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 燒成 やや軟質 色調 硬質	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	足高台 内外面タール付着 1/4
78	J-7	かわらけ	5.6	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	底1/2
79	J-7 焼土	かわらけ	5.6	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	底全周
80	包含層	かわらけ	5.2	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	全面タール付着
81	J-8.9 焼土	かわらけ	(7.7)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 普通 色調 細	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	底1/2
82	J-9-10	かわらけ	6.9	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 細	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	底タール付着 底2/3
83	K-4-5	かわらけ	(7.3)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形	内外面タール付着 1/4以下
84	K-6 焼土	かわらけ	(4.5)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	外表面スリ付着(黒色殆 ど)
85	K-6 焼土	かわらけ	(4.7)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	底1/4
86	K-6 焼土	かわらけ	(7.4)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	底1/4
87	K-6 焼土	かわらけ	(7.3)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形	足高台 高台1/4以下
88	X-1 焼土中	かわらけ	(6.0)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	外表面X付着 1/4以下
89	表探	かわらけ	4.9	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 浅質硬	ロクハ成形	全面磨滅 底1/2
90	表探	かわらけ	7.3	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 柔軟 色調 浅質硬	ロクハ成形	全面磨滅 底2/3
91	表探	かわらけ	(5.4)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形	底1/4以下
92	表探	かわらけ	(8.0)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	内外面X付着 1/3
93	表探	かわらけ	(6.3)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形 柔軟 色調 にじる・質硬	内外面タール付着 底1/4
94	表探	かわらけ	(5.4)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形	底1/4 足高台
95	表探	かわらけ	(5.4)	胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 やや軟質 色調 にじる・質硬	ロクハ成形	1/4以下 足高台
96	X-8 国産陶器 福鉢			胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 普通 色調 硬質	ロクハ成形	常滑窯か? 製造あり
97	D-E-9-10 国産陶器 片口鉢			胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 硬質 色調 硬質	外側 下部ココヘラケズ り	常滑窯か? 四輪轆轤
98	D-E-9-10 焼土中	かわらけ		胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 普通 色調 にじる・質硬	ロクハ成形	墨書き土器(朱書き?)
99	I-9-10 焼土	かわらけ		胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 普通 色調 にじる・質硬	外側 竹管状工具による 痕跡・横線	
100	I-5-6 土器器			胎土 合め細かい、黒色粒子・赤色粒子含 焼成 普通 色調 深質硬	外側 下部ナナメヘラケ ズ 内面 ヨコナデ	甲型型?
101	I-9 坪			胎土 合め細かい、 焼成 硬質 色調 明緑灰	ロクハ成形	肥前窯(波佐見、三段青 窯室等) 17世紀前半、初期伊万里 底1/4

第23表 浅間大社遺跡第VI次調査出土石製品観察表

No.	種別	器種	出土地点	法量			色調	胎土	備考	焼成
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
102	石製品	瓦	I-10	(4.6)	(2.1)	(1.2)	10.3			産地不明
103	石製品	瓦	I-5-6			2.2	98.8	灰	石英・長石含	平瓦か?
104	石製品	瓦	J-8			1.7	35.3	灰	石英・長石・有色鉱物・砂粒含	平瓦か?
105	石製品	瓦	X-1 掘土			1.7	49.2	暗灰	砂粒(多)	平瓦か?
										普通

第24表 浅間大社遺跡第VI次調査出土金属製品観察表

No.	種別	出土地点	材質	法量			備考	残存状況
				長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)		
106	釘	A-4 掘土	鉄	3.2	0.5	2.3	和釘・脚部欠損	良
107	釘	D-E-9-10 掘土	鉄	3.4	0.4	0.4	蟹目釘か?・脚部欠損	良
108	釘	F-10 掘土	鉄	(6.0)	0.5	9.8	脚部欠損	良
109	釘	F-10 掘土	鉄	(3.8)	0.3	2.1	頭部・脚部欠損	良
110	釘	G-S-6 掘土	鉄	4.2	0.4	1.4	脚部欠損	良
111	釘	G-H-S-6 表覆	鉄	4.0	0.4	5.5	和釘	良
112	鋸	G-H-S-6 掘土	鉄	(16.4)	9.0	108.2	片刃欠損	良
113	釘	I-S-6 掘土	鉄	(5.0)	0.6	4.5	和釘・脚部欠損	良
114	飾金具	I-10	銅	7.6	10.5	32.9		良

C 第VII次調査（第82～84図、第25～27表）

浅間大社遺跡第VII次調査では古墳時代の土師器をはじめ、古代～中世にかけてのかわらけ、国産陶磁器、金属製品が検出されている。

① 古墳時代（第82図、第25表）

古墳時代の遺物は245片検出されている。そのうち、実測可能である15点について報告書に記載する。

土師器（第82図、第25表）

1～3は1トレンチより検出された。これらすべて搅乱中からの出土である。1は土師器塙の口縁～頸部に相当する破片である。外面にはタテヘラミガキが施されており、内面の口唇部及びタテヘラミガキが施されている間にヨコヘラミガキが認められる。2は壺の底部である。内面には僅かにヨコハケメが認められる。3は複合口縁壺の口縁部の破片である。口唇部が面取りされており、面取りされた口唇部にも内面と同様のヨコハケメが施されている。

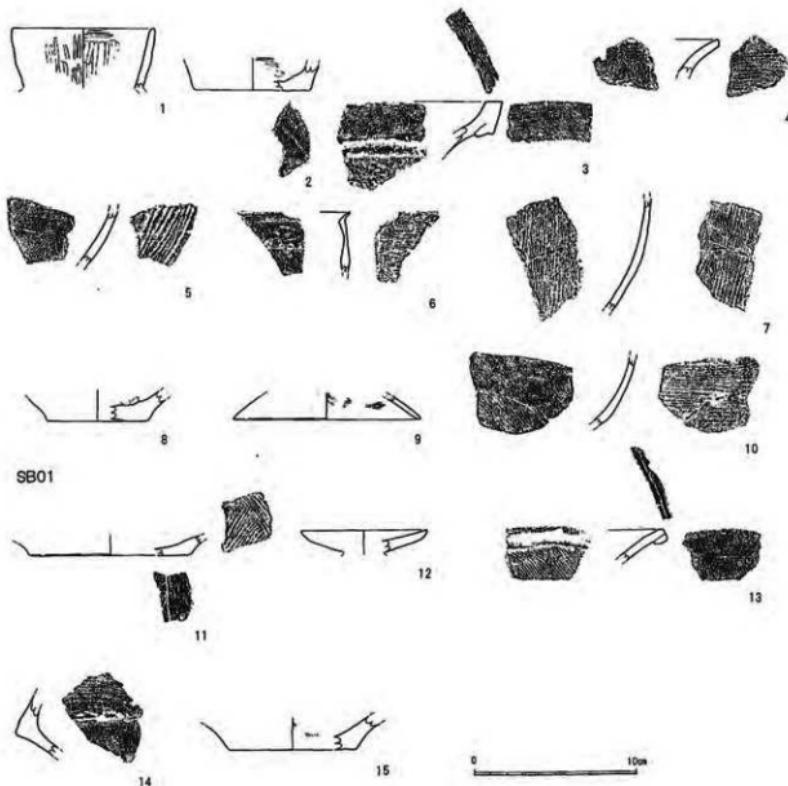
4～12は2トレンチ内のSB01の櫻土中より検出された。4は壺の口縁部の破片である。外面は口縁部付近にヨコハケメ、その下方にタテハケメが施されている。また、内面にはヨコハケメが施される。5は壺の胴部の破片である。内面には太いナナメハケメ、外面には交差するようにナナメハケメによる調整がなされる。6は鉢の口縁部から胴部付近の破片である。外面にはタテハケメ、内面には強いヨコハケメが施されている。7は壺の胴部の破片である。内外面共にタテハケメが施されている。外面上半には煤の付着が認められる。8は壺底部の破片である。内面にはヘラミガキが施されている。9は高壺の高台部である。内面にはナナメハケメが認められる。10は壺の胴部の破片である。外面にはナナメハケメ、内面にはヨコハケメが施されており、外面には赤彩が認められる。11は壺の底部である。内面にはナナメハケメが交差するように確認され、底部外面には木葉痕が認められる。12は小型器台

の口縁部の破片で、外面はヘラミガキ後ナデ調整がなされている。

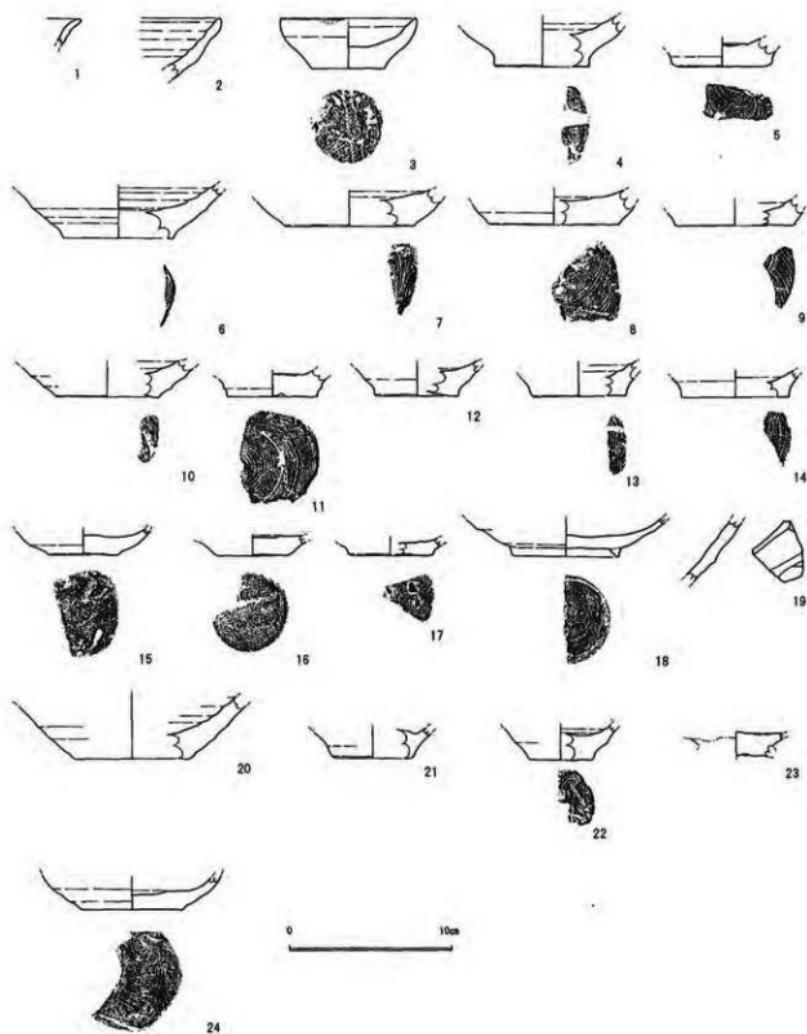
13は2トレンチ内のSB01床下より検出された折返し口縁壺の口縁部の破片である。折返しされた部分の外面は欠損している。外面にはナナメハケメ、内面の口縁部付近にナナメハケメ及び、その下半にヨコハケメが施されている。また、内面には赤彩が塗られている。

14・15は3トレンチ内のSB01の覆土中から検出された。14は駿東甕の頸部である。内面にはヨコハケメが施されている。15は壺の底部である内面にはヨコハケメとタテハケメが施されている。

以上、今回の調査出土した土師器は、古墳時代前期代に相当する大席II式期～III式期のものと推察される。



第82図 浅間大社遺跡第Ⅶ次調査出土遺物実測図①



第83図 浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物実測図②

② 古代・中世（第83図、第26表）

古代・中世の遺物として灰釉陶器4点、かわらけ392点、瓦質土器2点が検出されている。そのうち実測可能である灰釉陶器、かわらけの25点について報告書に記載する。

かわらけ（第83図1～17・20～24、第26表）

1～17は2トレンチより検出されたかわらけである。1・2は口縁部の破片である。1は薄手のつくりで土師器に似た感を持ち、2は厚手でかわらけ感を増す。どちらも口縁の一部のみであり、全体の様相を窺うことは難しい。3は今回出土した土器の中でもっとも残存状況が良好なかわらけである。底部が肥厚し、内側に屈曲しながら立ち上がり、体部中央より湾曲する。口唇部にはタールが付着していることより供膳具として使用されていたかわらけが、灯明皿として転用されていたことが窺える。4は底部を強調したつくりであり、高台を意識した感を持つ。5～8は高台の肥厚が目立ち、5・9～13は高台の肥厚が比較的弱く、14～17は高台の肥厚をほとんど持たない。

灰釉陶器（第83図18・19、第26表）

20～23は3トレンチより検出されたかわらけである。21・22の形態は異なるが、底部が強調され肥厚したつくりは類似する。特に22は4と同様、底面に近い部分に対してナデを行っているため、底部がより強調され高台の様に見える。23は足高高台である。高台部と体部を欠損しているため全体の様相を窺うことはできない。過去の調査で行われた際に出土した足高高台と同系統のものと推察される。

24は表採されたかわらけの皿である。全体的に比較的薄く作成されている。

18は2トレンチで検出された山茶碗である。東遠江産の13世紀前に生産されたものと推察される。19は2トレンチベルトで検出された清ヶ谷産灰釉陶器の破片資料である。10世紀前半ものと推察される。底部付近の外間に、斜め方向の箝削りが認められる。また、外面上には釉薬がかかる。

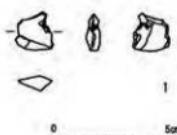
以上のように24点について記載した。中世の資料に関して遺物包含層より一括出土であるため、遺跡の一時期のみの性格を求めるることは難しいのだが、あえて年代をもとめるのであるならば、かわらけ及び山茶碗の年代より12～13世紀代と位置付けることができる。

③ 近世（第84図、第27表）

近世以降の遺物として図示できるものは石製品1点である。

石製品（第84図1、第27表）

1は火打石である。石材は肉眼鑑定より瑪瑙と推察される。産地は不明である。表面には若干の煤の付着が認められる。



第84図 浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物実測図

第25表 浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物観察表①

No.	出土地点	種別 器種	口径 器高 底径	特色など	調整・文様	備考
1	1Tr 玉砂利	土師器 壇	(8.7)	胎土 長石・赤色粒子・黒色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 灰	内外面 タテケズリ 内面 ヨコヘラナデ	口縁部1/4以下
2	1Tr 風呂	土師器 壇	(7.0)	胎土 長石・黒色粒子・砂粒含 燒成 普通 色調 灰	内面 ヨコヘラナデ(10本/ cm)	底部1/4以下
3	1Tr 段瓦	土師器 壇		胎土 長石・赤色粒子・黒色粒子・砂粒・金雲母含 燒成 普通 色調 淡黄	内外面 口縁部ヨコハケ (4本/cm) 外面 口縁部以外ナナ メハケ(6本/cm)	口縁部1/4以下 復元口縁部
4	2Tr 包含層	土師器 壇		胎土 石英・長石・黒色粒子・砂粒含 燒成 普通 色調 灰	内外面 ヨコハケ(4本/ cm) 外面 口縁部以外タテ ハケ(6本/cm)	口縁部1/4以下
5	2Tr サブトレ	土師器 壇		胎土 石英・長石・黒色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 灰	外面 ナナメハケ(6本/ cm) 内面 ナナメハケ(2本/ cm)	1/4以下
6	2Tr サブトレ	土師器 鉢		胎土 長石・黒色粒子・砂粒含 燒成 普通 色調 黄斑	外面 タテハケ(8本/ cm) 内面 口縁部までヨコハ ケ(8本/cm)	1/4以下
7	2Tr	土師器 壇		胎土 石英・長石・金雲母含 燒成 普通 色調 灰	内外面 ナナメハケ(4 本/cm)	1/4以下
8	2Tr	土師器 壇	(6.0)	胎土 長石・赤色粒子・砂粒・金雲母含 燒成 普通 色調 にじい黄	内面 ナナメスリ	1/4以下
9	2Tr	土師器 高环	(11.5)	胎土 石英・長石・赤色粒子・黒色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 黄斑	内面 ナナメハケ(7本/ cm)	脚部1/4以下
10	2Tr	土師器 壇		胎土 石英・長石・金雲母含 燒成 普通 色調 (内)にじい黄(外)灰	外面 ナナメハケ(4本/ cm) 内面 ヨコハケ(5本/ cm)	1/4以下 外面赤彩
11	2Tr	土師器 壇	(9.5)	胎土 長石・赤色粒子・砂粒含 燒成 普通 色調 にじい黄斑	内面 ナナメハケ(3本/ cm) 底面外側木葉底	底部1/4以下
12	2Tr SB01櫛土中	土師器 小型器台	(7.6)	胎土 石英・長石・赤色粒子・黒色粒子・砂粒・金雲母含 燒成 普通 色調 灰	内外面 ミガキ	口縁部1/4以下 内面剥離
13	2Tr SB11床下	土師器 壇		胎土 赤色粒子・黒色粒子・砂粒含 燒成 普通 色調 灰	外面 ナナメハケ(5本/ cm) 内面 口縁部付近ナ ナメハケ(4本/cm) それ以下ナナメハ ケ(5本/cm)	口縁部1/4以下 内面水影
14	3Tr 風呂	土師器 壇		胎土 石英・長石・赤色粒子・砂粒・金雲母含 燒成 普通 色調 灰	内面 ヨコハケ(5本/ cm)	頸部1/4以下 缺末観
15	3Tr	土師器 壇		胎土 石英・長石・赤色粒子・砂粒・金雲母含 燒成 研磨 色調 にじい黄斑	内面 ヨコ・ナナメハケ (4本/cm)	底部1/4以下

第26表 浅間大社遺跡第VII次調査出土遺物観察表②

No.	出土地点	種別 器種	口径 底径	特色	調査・文様・成形法など	備考
1	ZTr 玉砂利	かわらけ		胎土 石英・長石・赤色粒子・黑色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 淡青質	ロク成形	1/4以下
2	ZTr 磁赤鉄	かわらけ		胎土 長石・黒色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 にじみ 黄鐵	ロク成形	1/4以下
3	ZTr ベルト	かわらけ	(8.4) (3.1) (4.5)	胎土 長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 やや軟質 色調 暗	底部外面干台痕 ロク成形 余切り無調整 1/2強	口唇部タール付着 内面剥離
4	ZTr 包含層	かわらけ	(5.3)	胎土 カリ輝かわい・長石・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	
5	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(6.0)	胎土 さめ細かわい・赤色粒子・砂粒・金雲母含 燒成 普通 色調 にじみ 黄鐵	ロク成形 余切り無調整	1/3
6	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(6.0)	胎土 有色鉱物・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/4
7	ZTr 玉砂利	かわらけ	(8.1)	胎土 カリ輝かわい・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/4
8	ZTr	かわらけ	(8.0)	胎土 さめ細かわい・赤色粒子・砂粒・金雲母含 焼成 やや軟質 色調 明貴質	ロク成形 余切り無調整	1/4
9	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(7.3)	胎土 カリ輝かわい・長石・金雲母含 燒成 普通 色調 にじみ 黄鐵	ロク成形 余切り無調整	底部外面干台痕 1/4以下
10	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(6.4)	胎土 さめ細かわい・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 にじみ 黄鐵	ロク成形 余切り無調整	1/4以下
11	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(5.4)	胎土 さめ細かわい・長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/2
12	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(5.1)	胎土 さめ細かわい・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 淡黄鐵	ロク成形	1/2
13	ZTr	かわらけ	(5.7)	胎土 カリ輝かわい・長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 淡黄鐵	ロク成形 余切り無調整	1/4
14	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(6.6)	胎土 さめ細かわい・赤石・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/4以下
15	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(4.4)	胎土 さめ細かわい・赤色粒子・金雲母含 燒成 軟質 色調 淡黄鐵	ロク成形 余切り無調整	全面摩滅 1/2
16	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(4.4)	胎土 さめ細かわい・長石・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/2以上
17	ZTr	かわらけ	(5.2)	胎土 長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/4
18	陶 器 山崩	(6.9)		胎土 長石含 燒成 硬質 色調 灰灰	内面 備小に輪面付着 ロク成形	東北江戸 相模の2(13世紀前半)
19	ZTr ベルト			胎土 石英・長石・有色鉱物・有色鉱物・砂粒含 燒成 硬質 色調 白	外面 下ナナメケズラ 輪面付着 ロク成形	清ヶ谷産 三番の2(10世紀前半)
20	ZTr 腹足	かわらけ	(7.0)	胎土 さめ細かわい・長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/4以下
21	ZTr 磁赤鉄	かわらけ	(2.0)	胎土 さめ細かわい・長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形	1/4以下
22	ZTr 腹足	かわらけ	(3.0)	胎土 さめ細かわい・長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/4
23	ZTr 磁赤鉄	かわらけ		胎土 さめ細かわい・赤色粒子・金雲母含 燒成 普通 色調 暗	ロク成形	見引付干高台
24	表採	かわらけ	(6.3)	胎土 さめ細かわい・長石・赤色粒子・金雲母含 燒成 やや軟質 色調 暗	ロク成形 余切り無調整	1/2

第27表 浅間大社遺跡第VII次調査出土石製品観察表

No.	種別	器種	出土地点	法量				色調	胎土	備考
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)			
1	石製品	火打石	表採	1.5	1.2	0.3	0.8			

(5) まとめ

確認調査では、中世の遺構の広まりを知ることができた。SK01・SX01は中世の遺構であると考えられ、SK02・SX02もまた同時期の可能性も推定できる。時期の新しい石列であるSX03については、方向性から、浅間大社境内と宅地との境となっている水路との関連が窺える。

確認調査区は、神田川に向かう低湿地に面した微高地にあたり、この場所自体やや水気の多い場所である。このような場所に構築された遺構は、どのような目的で使用されたのか、調査範囲が狭く知りえる情報が少ないため、不明な点が多い。しかし、出土した遺物は、点数は少ないものの、国産陶器が古瀬戸後IV期(15世紀後半)の縁軸小皿・擂鉢などといった日用品や、古瀬戸後I～II期(14世紀後半～15世紀初)の花瓶といった仏花器、瓦質土器の風炉(中世)など様々なものがあり、また貿易陶磁器の龍泉窯系青磁碗(12世紀後半～13世紀前葉)、染付青磁碗(15世紀後半)もある。このうち染付青磁碗は富士大宮司館跡の大宮城跡からは出土していないものである。これまでの調査により、現在の社殿周辺には、かわらけを主体とする中世包含層の広がりが確認されたが、社殿から馬場を挟んで南側では、第Ⅰ次・第Ⅱ次調査で確認された溝1のように、日用品を主とする中世陶磁器や近世陶磁器が出土するという違いが見られる。SK01については、富士宮市内遺跡では、大宮城跡の素掘り井戸(富士宮市教育委員会2000)に類例が認められ、井戸跡である可能性もある。また、確認調査では近世の遺物が少なく、近世には中世のように様々な遺構が構築されてはいることが考えられる。

第Ⅵ次・第Ⅶ次調査では、現在の社殿は、北側の地山を削平し、南側に整地して作り出した平坦面上に建てられていると考えられる。その整地層は、かわらけ小片を多く包含し、整地層と地山の境は幣殿と拝殿の間にあるらしいことも窺えた。また、中世の包含層を振り込んで構築される土坑やピットが確認され、寛永十年(1633)の絵図に描かれた「御炊殿」などといった建物や、現在の社殿との関連が考えられるが、詳しいことは不明である。また、馬場南側の第Ⅰ・Ⅱ次調査区では多量の近世～近代陶磁器が出土したことからすると、そういった日用品の出土がほとんどなく、地点によって明確な違いが見られる。

現在の社殿は、徳川家康による寄進を受け、慶長九年から同十一年(1604～1606)に完成したものとされている(富士宮市教育委員会1991)。それ以前の造営については、貞応二年(1223)に藤原義時、応永二十五年(1418)に足利義持、天正年間(1573～1592)に武田勝頼による造営や、その後天正十年(1582)には、織田勢により社殿は焼き払われたことが記録されている(富士山本宮浅間大社2005)が、絵図などがあるわけではなく実際の様相は不明となっている。社殿の造営に深い関係があると思われる第Ⅵ次・第Ⅶ次調査区で、遡り得る年代は、第Ⅷ次調査区出土の12～13世紀の山茶碗(第83図18)がある。また、第Ⅵ次調査区出土の土師器(第79図60)は、10世紀～11世紀前半と考えられる。しかし、いずれも包含層中の出土であり、これらをもって年代決定の根拠とはできない。出土したかわらけは、富士大宮司館跡である大宮城跡で主体的な15～16世紀のかわらけよりも古相を呈する、底部が発達した柱状高台や足高台のかわらけはじめ、11世紀後半から13世紀の年代が考えられる底部が厚いもので占められている。廻廊内部では、中世以降の陶磁器などの日用品がほとんど出土しておらず、13世紀頃を境に場所の使われ方に変化があったことを窺わせている。

第Ⅶ次調査で確認されたSB01は古墳時代前期の堅穴住居跡である。第Ⅵ次調査でも古

墳時代の遺物は採集されており、遺構の分布範囲は広がっていると考えられる。浅間大社は、大同元年(806)に始まるとしており、この古墳時代の遺構が直接浅間大社と関わるのかどうかは、現時点では不明であるが、9世紀初頭以前の浅間大社遺跡には古墳時代の集落が展開していることがわかった。

＜引用参考文献＞

- 宮地直一・廣野三郎1928『富士の研究Ⅱ後間神社の歴史』
金箱文夫1984「近世の釘」『物質文化 43』物質文化研究会
坂本美夫1986「柱状高台の皿・环について」『古代末期～中世における在地土器の諸問題』神奈川考古同人会
大冢初重・戸沢充則1996『最新日本考古学用語辞典』新創社
櫛原功一1997「土器様相から探る在地性」『帝京大学山梨文化財研究所報 第29号』
瀬田正明1998『甲斐国分寺跡北方出土の墨書き土器』『帝京大学山梨文化財研究所報 第33号』
八峰 輿2001「柱状高台考」『中世土器研究論集 一中世土器研究会20周年記念論集一』日本中世土器研究会
清水町教育委員会2002『熊之免遺跡 一玉井寺墓地移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』
日本中世土器研究会2003『第22回中世土器研究会 シンポジウム 中世土器研究の今日的課題
－土器編年と中世史研究－』
富士市教育委員会2004『中桁遺跡』
富士市本宮浅間大社2005『静岡県指定有形文化財富士山本宮浅間大社社殿
〔棟門・拝殿・幣殿・透屏〕保存修理工事報告書』
考古学と中世史研究会2007『第五回考古学と中世史シンポジウム 宴の中世 一場・土器(かわらけ)・権力ー』
齊藤直美2007「古代の冥界觀について」『國立館考古学 第3号』國立館大学考古学会
富士宮市1971『富士宮市史(上巻)』
富士宮市教育委員会1991『富士宮の文化財』
富士宮市教育委員会1992『なつかしの町名をたずねて—富士宮市の町名今昔—』
富士宮市教育委員会1996『浅間大社遺跡』
富士宮市教育委員会2000『元富士大宮司館跡 一大宮城跡にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書ー』
富士宮市教育委員会2003『浅間大社遺跡II』
富士宮市教育委員会2005『村山浅間神社調査報告書 一遺跡範囲確認調査編ー』
富士宮市教育委員会2005『富士宮市の遺跡III』

第Ⅲ章 おわりに

今回の報告は、平成12年以来の発掘調査の中で、諸般の事情により発掘調査報告書が刊行されずにいた7遺跡、9調査地点におけるその成果を一括したものである。それぞれの報告から、新たな発見があったことは、各遺跡の報告の通りであるが、その全体を概観すると、近年の富士宮市における埋蔵文化財調査に対する調査傾向を指摘することができるものである。

今回の報告で取り上げている井出館、牛ヶ沢遺跡、浅間大社遺跡など遺跡は、平安時代以降を遺跡の主な時代とするものである。1994年に実施した浅間大社境内地の発掘調査の頃から、富士宮市においても、中世～近世にかけての遺跡調査から分かる歴史事象が評価されるようになり、その時代も調査の射程に入るようになってきた（富士宮市教育委員会1996）。特に、現在の市街地に展開する浅間大社と大宮城の歴史を解明する上では非常に有効で、それは、2000年に発行された『元富士大宮司館跡』（富士宮市教育委員会2000）の調査報告書へと結実するわけである。考古学的な手法からも中世～近世の歴史調査を行うようになり、浅間大社を主な対象としながらも、その発掘調査事例は確実に増えており、地域の歴史に大きく係ったこの時代の遺跡調査が大きく注目されるようになっているのである。

今回報告している浅間大社に係る浅間大社遺跡の調査は、回廊の中で実施されたものであり、具体的な神社の歴史を考える上で重要な資料が発見されている。その中には、10世紀前半まで遡ると思われる土師器の壺（墨書き土器）や灰釉陶器が含まれており、現在の社殿が建つ平坦地における遺物包含層の上限年代を決める手掛かりとなっている。それは、造営年代が不透明な浅間大社に直接関連すると捉えられるものであるが、浅間大社遺跡第4次発掘調査（富士宮市教育委員会2003）の際、異彩を放っていた外面にヘラケズリを見る駿東型壺の年代と合致しており、いずれも初源期の土器群を構成するものとして再評価されるのである。

10世紀前半は、『扶桑略記』の延喜二年（902）の記事にある富士郡の官舎が群盗により焼かれた事件や『諸社根元記』による延喜七年（907）に駿河国の富士明神が従二位にその神格を上げている。また、9世紀中葉、貞觀六年（864）の富士山の噴火に代表されるように平安時代には頻繁な噴火の様子が伝えられているが、10世紀、承平七年（937）にも噴火のあったことが『日本紀略』に記されている。このように、自然史的な側面を含めて、その時代は、激しく時代が移り変わる激動期であったと言える（渡井2007）。そして、それは、村山浅間神社で発見された竪穴住居跡からも分かるように、人々の富士山に対する新たな開発の時期とも呼応するのである（富士宮市教育委員会2005）。

浅間大社を遺跡として捉えてみると、ちょうど、この10世紀前半代における登場が想定されるのである。それは、神田川を挟んで隣接する大宮城における消長とも同調している。この段階以降の変遷については、特に11世紀の様相が分かっていない。空白期を迎えるのか、生活什器をあまり必要としない施設となつたのか、検討する部分が多い。しかし、その時間的な変遷を考慮しても、浅間大社の遺跡としての出現期については、一定の方向性が見出せたものと考えている。そして、浅間大社遺跡や大宮城の出現に関連して、現在の大宮地区に対する開発の開始と言う地域における大きな転換期を迎える。それは、大中里で発見された同時期の牛ヶ沢遺跡に対する歴史的な位置づけとしても考えていかなければならないのである。

井出館については、江戸時代の豪農井出家の姿相を、発掘調査による出土品からその一端

が垣間見られたのである。井出家屋敷地は、源頼朝による建久四年（1193）の「富士巻狩」に関連した施設であるとされるだけに、地域史の中での位置付けには大きなものがある（若林1971）。今回の調査では、江戸時代における地域開発の痕跡は明らかとなっているものの、中世については、少量の常滑産の甕が採集されているだけで、明確な遺構、遺物の発見はない。現在の屋敷地を中心として、もう少し広い範囲に対する発掘調査の必要となろう。伝承を史実にするためにも考古学的な発見が期待されるのである。

浅間大社や井出館などの遺跡は、それぞれを解明することが地域の歴史に直接係つてくるものである。それらは、文献史学や自然史学からの検討などを整合させながら、学際的な解釈の必要を痛感するものであるが、今回の発掘調査によって、中世～近世における考古学的な検討の有効性を改めて認識させるものもある。

縄文時代早期後葉の東海系の条痕文系土器が発見されている丸塚遺跡（富士宮市教育委員会2007）や弥生時代後期を主体とする神祖遺跡、古墳時代前期の集落が調査された若宮遺跡などの発掘調査成果からは、今まで発掘調査のメスが入っていなかった地域および時代に対して徐々に新たな知見が得られるようになった。特に、丸塚遺跡については、発掘調査の少ない市域東部における事例であり、出土例のあまりない土器類の発見でもあった。富士山西麓は、若宮遺跡や国指定史跡『大鹿塙遺跡』に代表されるように縄文時代草創期から早期の遺跡が比較的多く、その出土土器も型式変化を通して段階的に検討することができる地域である（富士宮市教育委員会1989）。縄文時代草創期から早期の土器の型式変化を検討する中で、縄文時代早期後葉についてはよく分からぬ部分が多くあったが、今回の調査で、その土器型式が多元的な状況を示すことが判明した。それは、広域的な人々の移動あるいは交流を考える上でも、重要な資料であると言える。

小規模な発掘調査の件数は、近年の埋蔵文化財調査に対する取り扱いの変更に伴い増加する傾向にある。そして、それは、いろいろな規制の中での発掘調査を強いられるわけで、遺跡の具体的な検討が期待できず、その全体像を解明するのは、なかなか難しいものとなっている。しかし、今回の報告でも分かるように、それらの発掘調査成果の積み重ねが、総合的な遺跡経営の実態を浮き彫りにしており、郷土の歴史を具体化する一助となっているのは確かであると考えている。

＜引用参考文献＞

- 富士宮市教育委員会1989『小松原A遺跡』
- 富士宮市教育委員会1996『浅間大社遺跡』
- 富士宮市教育委員会2000『元富士大宮司館跡』
- 富士宮市教育委員会2003『浅間大社遺跡II』
- 富士宮市教育委員会2005『村山浅間神社調査報告書—遺跡範囲確認調査編—』
- 富士宮市教育委員会2007『丸塚遺跡』
- 若林淳之1971「第四章 第二節 富士巻狩と曾我兄弟」『富士宮市史』上巻 富士宮市
- 渡井英善2007「平安時代後期の富士浅間宮—考古資料から見た浅間大社—」
『富士学研究』Vol. 5 №.2 富士学会

報告書抄録

ふりがな	ふじのみやしのいせき4				
書名	富士宮市の遺跡IV				
副書名					
巻次					
シリーズ名	富士宮市文化財調査報告書				
シリーズ番号	第39集				
編著者名	渡井英蔵、佐野恵里、澤柳幸司				
編集機関	富士宮市教育委員会 文化課				
所在地	〒418-8601 静岡県富士宮市弓沢町150番地 Tel.0544-22-1187(文化課)				
発行年月日	平成20年(2008)3月24日				
遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡	北緯 東経	調査期間	調査面積 m ²
大室古墳	富士宮市小泉 1467番の1	市番号92 県番号28	35° 13' 41" 138° 38' 14"	20010335 20010327	25
神祖遺跡	富士宮市小泉	市番号18 県番号94	35° 13' 26" 138° 38' 07"	20020219 20020228	69.5
井出館	富士宮市狩宿 91番地	市番号166 県番号9	35° 17' 54" 138° 35' 29"	20041116 20041126	44.75
若宮遺跡	富士宮市小泉 宇古宮2261-4	市番号9 県番号122	35° 12' 46" 138° 38' 45"	20050707 20050715	199.5
丸塚遺跡	富士宮市杉田 1230番地の1	市番号5 県番号114	35° 13' 14" 138° 39' 23"	20060703 20060727	110
牛ヶ沢遺跡	富士宮市大中里 108の2	市番号135 県番号25	35° 13' 52" 138° 35' 31"	20061204 20061208	54
浅間大社遺跡 確認	富士宮市宮町 1番1号	市番号76	35° 13' 24" 138° 36' 46"	20031112 20031127	60.5
第VI次			35° 13' 28" 138° 36' 47"	20050801 20050930	343
第VII次		県番号30	35° 13' 27" 138° 36' 47"	20070827 20070912	21
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大室古墳	古墳	古墳時代	墳丘、溝、土坑、造成跡		
神祖遺跡	集落	弥生・古墳		土器、陶磁器	
井出館	城館	近世	ピット、土坑、溝、造成跡、 道路状遺構、礫群	陶磁器、鉄製品、土製品、 銭貨、砥石	
若宮遺跡	集落	古墳前期	竪穴住居、柱穴列	土師器、敲石	
丸塚遺跡	集落	縄文 早期後葉	土坑	縄文土器、黒曜石薄片	
牛ヶ沢遺跡	集落	平安	竪穴住居、土坑、ピット	土師器、灰釉陶器、陶磁器	
浅間大社遺跡 確認	神社	古墳、中世、 近世	土坑、石敷、集石	かわらけ、陶磁器、 瓦質土器、鉄製品	
第VI次			土坑	土師器、須恵器、かわらけ、 陶磁器、鉄製品、土製品	
第VII次			竪穴住居、土坑、ピット	土師器、須恵器、	

富士宮市文化財調査報告書 第39集

富士宮市の遺跡IV

平成20年3月24日

編集 富士宮市教育委員会

発行 富士宮市教育委員会

〒418-8601

静岡県富士宮市弓沢町150番地

(0544) 22-1111㈹

印刷 三扇美術印刷株式会社

〒418-0056

富士宮市西町1番15号

(0544) 26-3636㈹

写 真 図 版

図版 1

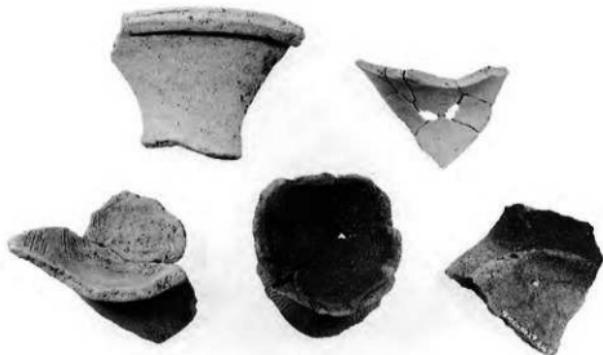


1. 大室古墳近景



2. 大室古墳調査全景

図版 2



1. 神祖遺跡出土遺跡



2. 井出館5トレンチ

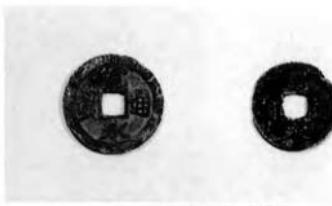
図版 3



1. 井出館SK07



2. 井出館出土磁器



3. 井出館出土錢貨

図版 4

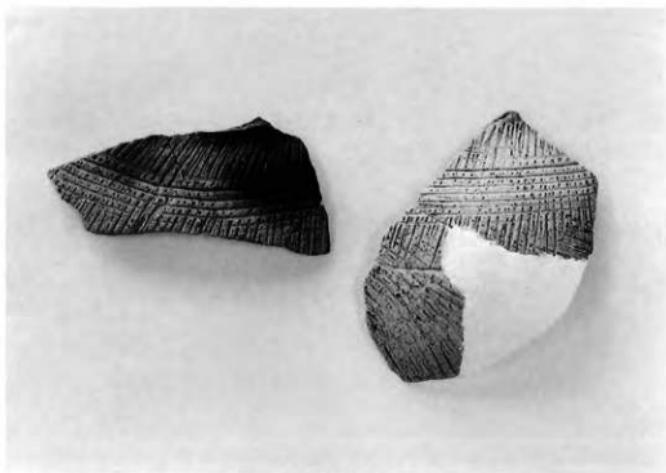


1. 若宮遺跡SB01検出状況



2. 若宮遺跡SB02検出状況

图版 5



1. 若宮遺跡出土遺物①



2. 若宮遺跡出土遺物②

図版 6



1. 丸塚遺跡調査区全景



2. 丸塚遺跡出土遺物

図版 7



1. 牛ヶ沢遺跡調査区全景



2. 牛ヶ沢遺跡SB01(カマド)検出状況

図版 8



1. 牛ヶ沢遺跡出土遺物



2. 浅間大社遺跡第VI次調査SK01検出状況

図版 9



1. 浅間大社遺跡第VII次調査2・3トレンチ完掘状況



2. 浅間大社遺跡第VI次調査出土墨書土器

図版 10



1. 浅間大社遺跡出土かわらけ